

一五、〇〇〇フランの顛末（後）

——『感情教育』について——

川 中 子 弘

一章 ボヴァリー夫人の愛と負債

娼婦はもちろん、ダンブルーズ氏でも芸術でも主義主張でも、およそこの世に「身売り」しないものはなく、唯一この趨勢に抵抗していたかにみえるアルヌー夫人さえ、共和主義と抱き合わせで、一掃販売に掛けられてしまった。夫人を品物に変えた売り立ての台は、市場経済の存立基盤ともいべきものであるが、しかしそれはバリばかりかノルマンディーの小さな市場町、ボヴァリー夫人を顧客にしていたルルーの店の二階にも、小規模ながら据えられていた。そこは金庫や商品のほかに、「もみ材の大型の事務机」があつて、上に載った「数冊の帳簿」には、掛け売り、貸し金や利子、手形の期日、仕入れ値、事業諸経費、収支の明細、要するに世界がそれを通じて商品のリストとして現れる、価値の変換体系をなすものがこと細かに記入されていたはずだからである。夫人はいちいち

覚えていないが、彼女が買いこんだ品物とその価格は、日付とともにそこにひとつの漏れもなく書き留められていただろうし、いつのまにか利子が雪だるま式に膨らんだ手形の一連の融資などは、ことによると何月何日には債権額がどの位になるのか一目でわかるように表仕立てにされていたのかもしれない。この借金は溜まるばかりで、それだけにますます返済が難しくなるのだから、やがてはアルヌー夫人と同じ清算の運命がどうしても訪れることは火を見るより明らかだった。にもかかわらずそれを顧みずにさらなる借金にのめりこんでしまったのは、農民の娘がよくよく貸し借りの事情に疎かったということなのだろうか。そういう点が無かったわけではないが、しかし借りれば返す世の開闢以来の真理を知らない者はいない。そこに注意が充分に向けられないよくよくの事情が彼女にはあったのである。

ある日突然、身に覚えのない八、〇〇〇フランの大金の返済を迫る通知が舞い込む。さもないと「動産の差押さえ」(314⁽¹⁾)を強制執行するという厳しい相手の出方に動揺した夫人は、慌てて金策に奔走するが、平素の不心得も崇つて徒勞におわる。翌日例のごとくの「正義」の使者、執達吏が姿を現し、差し押さえるべく家財道具をこまごまと彼らの調書に記入していく。パリの夫人と同じように、彼女の二掃販売の下準備であることは言うまでもない。しかも彼女の生活のなかでは有機的な一体感をなして息づいていた世界がこのリスト化によってただの物へとばらばらに切り離されてひとやまの商品に変貌するのも、そしてそれが殺害として受けとめられるのも、もう一人の夫人と寸分の違いもないのは不思議なくらいだ。「彼ら〔執達吏〕は彼女の衣裳、下着、化粧室をよく調査した。おかげで彼女の生活は、この三人の男の視線に、解剖される死体のように、最も内奥の秘められた部分までここまかに曝けだされた」(316、傍点引用者)。この内奥が愛の思い出を濃厚に湛えているのも同じである。屋根裏の机に大切に蔵っておいたロドルフの神聖な恋文に、執達吏の「赤くてなめくじのように柔らかい指をしたぶあつ

い掌」が触れた時のエンマの怒りは、アルヌー夫人の小函を競りおとしたダンブルーズ夫人に対するフレデリックの憤慨に通じるだろう。

田舎町のルルー老人の帳簿台は、見かけは地味だが生き馬の目を抜くパリの売立て台に匹敵するものなのだ。それにしてもなぜボヴァリー夫人はおめおめと身の破滅を招くまで浪費にのめりこんだのか。彼女とて決して愚鈍な質ではなかった。ただ愛と経済がこれほど緊密な関係を結び、しかもこれほど足速に動くとはルオーの娘には想像を絶することだった。借金は隠された不倫の愛の指数のようなものになっており、他に生き甲斐を見出せない彼女にとってそれに節度をもたせることが困難である以上、売立て台上の彼女の死は市場の日程に組み込まれていたと言わねばならない。そして彼女の死によって作品は、ほゞ終結を迎える。だが終結は、主人公の消滅の当然の帰結としてなのだろうか。むしろここでも金銭の清算がそれを招きいれていたように思われる。『感情教育』ほど緊密でも複雑でもないが、この作品もまた不可能な愛の追求と経済的な消費とがいわば同一の論理の裏表をなしているからである。

『ボヴァリー夫人』とは何の物語なのか。人妻の欲求不満（ボヴァリスム）とか、見はてぬ愛の追求とその必然的破綻、という見方がひとまずは成り立つのだろう。しかしそれは車の両輪の一つを語るにすぎない。エンマが陥る金銭上の困窮が正面から検討されないのはなぜなのだろうか。ましてこの財政的側面が愛の主題とほぼ同等の重みを持ち、且つそれと不可分な関係にあることに気付かれることは滅多にないように思われる。⁽²⁾ 薬剤師オメは世に及びこるいとわしき合理的市民の典型としてしばしば揶揄の対象となるが、しかし一見きわめて控え目で善良な市民のルルーの方が薬剤師をはるかにしのぐ重要な役割を果たしているのは見過ごされている。オメへの注目はずいぶんブルジョワ嫌悪に対応する犯人探しの割り出しから生まれたいわば挿話的なもので、作品の構造の読みに

基ずく関心からだとは思えない。彼はヨンヴィルに來たボヴァリー夫妻を迎え入れたし、隣人として親しく彼らと交際もする。最後にエンマが飲む毒藥を所蔵していたのも彼である。しかし作品の主要動機をなすはずのエンマの愛の成りゆきについてはほとんど関わっていない。彼女はその愛を実現するうえでじつは他人の協力におおきく依存しており、とりわけ手元の不如意な彼女が恋人に贈り物をしたりホテルで逢瀬を楽しんだりできたのはルールの助けがあつたればこそなのである。彼がいなければ、せっかく開きかけた愛の花もたちまち萎んでしまったにちがいない。そこに生まれた愛と金の緊密な関係は、「感情教育」の場合を思い合わせると、この作者にとってそこにはある必然性があつたらしいと推測させるのだが、それはともかくルルも単なる善意で援助をしたわけではない。それは両者の利害の一致において生じたことで、商人はそこに採算のとれる事業を見いだしていたのである。人妻が道ならぬ愛に惑溺して自殺に追い込まれる悲劇的な展開は、彼女の側から振り出された一枚の手形(affet)が何倍もの富をもたらす金融上は大変幸運な投資として効果(effet)を発揮する過程でもあつた。そこに見えてくる愛と金の緊密な連関のうえに顧客と商人は相手を重要なパートナーとして二人三脚を組んだのである。しかしだからといって『感情教育』でのようなシニカルな――それだけに何重もの修辭学的蓋いのかけられた――等価交換が愛と金に成立していたというわけではない。そこにはおそらく時代となにより地域(都鄙)の極端な差が、それに見合う作者の社会認識の深淺とともに関与しているのだらう。あちらは第二次帝政の後期(一八六九年出版)、こちらはまだその初期(一八五一年―一八五六年執筆)で、産業の復興を旗印にした政府のさまざまな活動がこの二つの作品を大きくへだてているはずだ。そのうえこちらはたとえ同時代でもロンドンに次ぐヨーロッパの国際金融都市パリとはまるで別天地、地方都市ルアンからさらに奥に入った中世以来そう変っていないような農村や小さな町を背景としているのだから、パリを席捲する市場主義もおのずと波の勢いは弱まらざるを得ない。だからこそ

アルヌー夫人はひとときの遅速の差をいかして、市場原理を手玉にとったかとも思われる際どいかけひきに窮するや、大都市から逃げ出してさらに浮き世離れたブルターニュのどこかで身の安全を計ったふしがある。とくにエンマの生家があるノルマンディの農村は自給自足のできる経済的には旧態依然たる段階にあり、まだ貨幣経済さえ十分に浸透していなかったようだ。⁽⁴⁾ K・ポランニーのいう互酬と再分配を主な経済過程とした、どこかゲマインシャフト的な社会なのである。それにしては彼女は派手な使いっぷりだったことになるが、逆に言えば貨幣の扱いもままならぬ自給自足の農村で人となった一女性が、一挙に経済の先端部に押し出されたものの結局は賢い近代的消費者たりえずに破産の憂き目を見る、市場経済への転換期の悲劇的ケースがここに描かれていたとも言える。エンマの父ルオーは往診に来たシャルルに、骨折の治療代として七五フラン分（これはかなりの高額である⁽⁵⁾）の四〇スー貨幣を支払うが、そこに一羽の七面鳥を添えているのはなぜなのか^(5a)。おそらくフランク王の刻印を押された銀貨フランと中世において兵隊が受け取るスー貨とはもともと上下の階級的な対立を含意しうるが、さらには二〇対一という価値の比率をこえて経済的進度や富裕度の違いへとつながるだろう。スー貨だけで支払ったことは自からルオーの位置を浮かび上がらせ、⁽⁶⁾ 貨幣経済におけるルオーと周辺地域の立ち遅れをまざまざと語るのではないか。添えられた一羽の七面鳥もそれに口を揃えている。四〇スー貨は二フランに相当するから、それで七五フラン払おうとすると三七個で七四フラン、どうしても二〇スーという端数が出る。この分はどうしたのだろうか。治療費の額、支払った貨幣の種類まで丁寧に述べた筆が、ここでは口を噤み、そのかわり七面鳥を語りだす。ルオーが持参した一羽の七面鳥とはこの残金の代価だったのだろうか？ そうだとしてもここには両者が正しく等価にあるのかという市場的価格調整の過程はなくて、むしろ七面鳥はルオー爺さんの感謝に発する贈与の気配を帯びている。いやルオーがエンマの葬式を辞す時にも婿に七面鳥をこれまで通り送りつづけると約束するの

は、おそらく以来贈与が絶えなかったことを、だから最初は治療費の一部だったとしてもこの継続が七面鳥の性格を支払いからゲマインシャフト的交流へと変えてしまったことを語る〔567〕。そういえばシャルルが最初に往診に来た時、医師はごく当然のように朝食を呼ばれていた。明らかに治療費とは別のこの食事は貨幣が貨幣の介入を経ず物々交換によって互酬的に行われる社会の指標ではないだろうか。たしかにルオー爺さんの暮らしには貨幣が活躍する余地はあまりないようにみえる。彼の大きな農場には耕作馬、雌鶏、雄鶏、七面鳥をはじめ鶯鳥、孔雀が飼われ、長くのびた羊小屋、また高くそびえる穀物倉もあり、倉に収めきれない小麦の袋は食堂の隅々に溢れ、料理場では下働きの男たちの食事をつくる火が赤々と燃えている〔568〕。生産と消費が直結したこの生活には、両者の微妙なずれをてこに無から有を創造する手ずま使いのような利潤の創造者たちのついている隙はなさそうだ。下働きの男たちにしても、その報酬たるや同時代の都市の賃金労働者からみれば、欺瞞に満ちた互酬と再分配の家族的共同体における搾取の犠牲者とも言うべき額だろうとしても、彼らの方がはるかに幸せにみえることは否めない。料理場の描写は、これから彼らがありつく温かい食事はさぞみちたりた思いを与えるだろうと想像させるものがある。これは失われた世界への郷愁に彩られた一つの楽園となっているが、同時にこれから起きる一つの悲劇をそれだけ強く際立たせる書割りでもある。中小農場主ルオーの娘と医師の結婚式には、羊の股肉、鶏のホワイトソース煮込み、牛のサーロイン、子牛のシチュー、豚の丸焼き、腸詰め、甘口リンゴ酒、ブドウ酒などがふるまわれるが、どうやらそれらはすべて自前の調達なのである〔569〕。もちろん農産物は市で売らねばならないし、ルオーはその駆け引きにも長じていたらしいが〔570〕、「うまいものを食べて、暖かくしてぐっすり眠る」〔同頁〕というその生活の理想は、おおむね自給自足で賄えたに違いない。ただ気になるのは結婚式にだすパイとヌガー作りには近くの町から菓子職人を呼んでいることだ。職人は「この土地のお目見えなので、念入りに作った」〔571〕と

言うから、まだ需要がそうあったわけではないだろうが、それだけに家庭料理には及びも付かぬ手のこんだ芸術品のようなケーキをつくって客を驚かせているから、やがてその効き目を現わして財布の紐をゆるめる者がもつと出てくるかもしれない。いやその後の経済の進展は、この消費の贅沢が日常化したからこそ可能だったのだ。もつとも例外的であれば生活に花を添える貨幣経済の上手な活用である。ところが未来の経済はこの樂園にすでに不吉な影を落としている。どこで聞いたのかシャルルの最初の妻によれば、ルオーは未納金の支払いを菜種油の売却の陰でどうにかしのいでいたし〔52〕、さらに石工職人や馬具造りへの払いが滞っていて、そのために二二アクル（一アクルは五二アール）の土地の売却を迫られていた〔57-58〕。貨幣が、自給自足しうるだけに現金収入にあまり積極的ではないこの牧歌的世界にも否応なく、それもその生活を脅かす形で入り込んできている。土地の切り売りは生産手段の削減であるし、第一基本的に農産物の取引はそれに金を払う商人の買い手市場とならざるをえないからである。あるいは医者への支払いがおくれたのも、物が豊かに溢れる樂園のそうした経済的裏面を覗かせていたのかもしれない。こうなると倉に入りきらないで台所に並べてある麦の袋は必ずしも富の象徴ではなく、むしろ不如意の印となる。家族や使用人用の食糧をはるかに越えているだろうこの収穫物の蓄蔵は、市場が不整備で販路がないための無用のストックとして、少なくともその分の貨幣収入の減少を語るからである。⁽⁷⁾

シャルルは結婚後、妻の健康のためにヨンヴィル・ラベイへの移転を決意する。小さな田舎町だが、ルアンとの間に日に一往復乗合馬車が走り、商人宿も二軒あって週一度市の立つ日はそこも忙しくなる。その一つの金獅子亭には常連もいて、毎日ほばきまった時間に夕食を取りにくる。ルオー爺さんの食卓に出たのと同じ「羊の股肉」がここでも焼かれているが、しかしそれを食べるには今度はお金を払わねばならない。エンマの実家に比べると、夫妻は大分貨幣経済の浸透した世界にやってきたのである。といっても、例の怪しげな闇取引が行われた生き馬の眼

を抜くパリとはもちろん、ルアンに比べても共同体的な人間のつながりはまだ濃く残っている。ボヴァリイ夫妻を出迎えたオメガ、下心があるにせよその後何くれとなく医師家族の世話を焼いて怪しまれず、しかも夫妻の娘の名付け親となった時にありあわせの「自家製のもの」を贈り物にして済ませるのは、そんな土地の氣風を窺わせている。ここでの目立った商取引といえは馬車でやってくる行商人と週一度立つ市くらいで、さしあたり市場主義の脅威からは遠いと言える。需要と供給の關係はいわばまだ二人称的なのである。馬車を乗りついで津々浦々を廻る商人が地方商業の先端を占めていた時代に、生活必需品（厩、くすり……）やちょっとした奢侈品（化粧品・本……）を入れた彼らの荷には売れるものしか入る余地はなく、何が売れるかは主に顧客の反応と収入に関する直接のデータに頼らざるをえないのだから、どちらかといえば客の意向が供給を支配することになる。客、客の現金収入、消費量、そして商品自体、そのどれもごく限られ、一旦築き上げた客との対面關係が商売敵の切り崩しにいつ遭うかわからない小さな緊張したマーケットにおいては、客はかなり優利な位置を占めるだろう。ルオーのような農場主は現金収入が少ないかわりにいざとなれば自給自足で暮らせる強みがあるのだから、そういう人々の顔色を見ないで財布の紐を緩めさせられるはずがない。しかし鉄道の敷設は地方におけるこの需給關係を大きく変えようとしている。マニファクチャーによる量産体制が始まり、それを支える工場労働者の賃金生活が同時にその市場拡大にみずから寄与することでこの体制をさらに強化する中、新たな供給先の開拓が焦眉の急となる。そこで、海外にさらに植民地を求め、国内では道路、水路さらに鉄路による交通網の拡大によつて津々浦々に商品を輸送する必要が生じてくる。この大量の商品を捌くには週一度の市や行商では流通経路が狭くて、どうしても別の商形態が必要になる。とはいえヨンヴィル・ラベイはもちろん、ルアンにもここでは鉄道の轟音はまだせまっていない。昔ながらの市や行商がまだ活力を保ち、主要交通手段としての乗合馬車が日に一往復通うだけで人々はさしたる不便

も感じていない。それどころか住人で馬車を利用するものも滅多にいない。後に珍しくオメーがそれに乗ってルアンに豪遊するのは家族の平安を搔乱す一大事件となるだろう。馬車は旧来の生活に安住する町にとつて、彼方なる新世界への唯一の通路なのである。そして新しさとはおそらく経済的發達のいかんによつて決まる。そんな町の中でこの馬車の常連が二名いた。一人はここに越してきた医師夫人であるが、そのことは彼女の突出した消費生活と明らかな関係がある。そしてもう一人がルルーなのである。布地商を営む老人は仕入れなどの商用で月四度馬車で出かけるのだが、主題的に作品の表と裏の主役をつとめる二人がこうして揃いもそろつて馬車の愛好者だったことは彼らの関係のあり方を示唆している。ボヴァリー夫妻が町に越してきたのもこの馬車に乗つてだが、実はそこにルルー老人も乗りあわせていたのだから、後から思えば宿命的な出会いだったわけである。もつとも万事は好み、空騒ぎの気味もある薬屋と比べて、必要でないことにはおそらく一言も口を開かないこの人物は、今回も馬車を降りたことがついでに記されるだけで、ある日突然ボヴァリー夫人を訪問するまでは、いたかないのか気付かれさえしない。いや商人が彼女の愛に抜き差しならぬ関わりを持ち、さらには彼の年来の夢がついに叶えられた時点でさえ、その存在は背景をなす群小の脇役、せいぜい愛の悲劇の差し替え可能な偶発的因子ぐらいにしか見えないのも事実である。実際エンマの葬式に出たルルーが、他人事のように「可哀そうな奥様！ 御主人はさぞお嘆きのことでしょうな！」〔35〕と人並の悔やみを言うのはそんな見掛けにおそろしいほど似合っている。やはり念願の夢が實現して受勲しわが世の春を謳歌して作品を締めくくるオメー一家の向こうで、たしかに影は薄いが（つまり文体上、焦点をばかされているが）、彼よりはるかに大きな人生の成功者がいたことにはなかなか気付かないのだ。しかし彼こそ、一介の布地商にあきたらず、時代を先駆ける経済的な洞察力と進取の気象のお陰で大をなした立志伝的人物なのである。たしかに大物とまではいえず、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの緩慢な移行期にあ

る地域的後進性に縛られてバリのダンブルーズの足元にも及ばず、第一彼の大願叶って手に入れた儲けというのが、少々時代は下るにしても、フレデリックが人妻の思召しをえようと右から左に廻した半ば小遣い銭とも言える金の約半分にすぎないのだ。とはいえ逆に地域の実情に通じそれに密着した手堅い商売をしていればこそ、面白いように人の金を搾り取ることもできたのである。

彼がエンマをはじめて訪問したのが、見習い司法書記のレオンが人知れぬ愛を自分に抱いているという証拠を彼女が握ったその翌日であることを見逃してはならない。老人は実に正確なタイミングで現れたと言える。彼女の不倫の愛こそ、以降徹底的に開発しうる貴重な鉱脈であることをよく知っていたかのようなのだ。もつともエンマは修道院での教育以外は父の家から出たことのない箱入り娘だったのだから、贅沢品を買う消費的行動様式には未だ不慣れで、この日もきれいな刺繍飾りの襟を布地商人から見せられるものの、用心深く手を出さない。「欲しいものは何もありません」ときっぱり撥ねつけている。多分商人というのはそれで引き下がるにはあまりにも人間の欲望に通じている。商品とは欲望の合法的実現であり、誰もが持つこの欲望を目覚めさせるのが彼の腕のふるいどころなのだが、それは当時ならまず押しの一手段だろう。そこを越えれば、後は黙っていても向こうから商品求めてくる。今回は市場調査よろしく、アルジェリアのショール、イギリス針、室内ばき、卵立てなどをならべながら、相手の眼が金のスパンコールの輝くショールにひかれるのを素早く取り押さえる。「おいくら？」ときかれても、彼は数字は出さずに「ただ同然でして」と答え、「急ぎませんよ。御代はいつでもお好きな時に、手前どもはユダヤ人じゃございませんから」とつけ加える。この小さな町における商人の仕事とは、商人の仕入れや客の好みの調査以前にまず顧客の消費教育だからである。損して得とる商法で手なずけて消費に慣れさせ、購買による欲望の充足という回路をしっかりと根付かせるのが先決である。手間はかかるがそれまでは、まかり間違っても些末な儲けに

こだわる心底をあらわにして臆病な客をとり逃がしてはならない。なかば自給自足、貨幣といつてもフランよりスーに近い農民の娘の警戒心を少しづつときほぐして、新しい消費行動の手ほどきをするのがさし当たりの手順なのである。そうすればやがて一人前の近代的な消費者、といつて悪ければ一廉の顧客がそこに誕生するだろう。「私はお金なんかどうでもよいのです。ことと次第では、そんなものあなたに差し上げますよ」と「人が良さそうに」ともちかける〔137〕。一体誰がそれを信じるだろうか。私はあなたの良き隣人で、これらの商品はささやかな奉仕のしるしだ、などと。ところがそうでもないのである。客がそこで「驚いたような身ごなし」をするのは、後から考えれば最初の不信感を取り除いたしるしだったのかもしれない。いずれにしてもルルーの言葉はやがて確実に効き目を現してくる。その後のエンマの様子を見ると、いよいよ八、〇〇〇フランの返済猶予を断られて差し押さえるくうまでは、この商人をいつでも好きなだけ金を用立てる慈悲深い金持ちの隣人ぐらいに思いこんでいたふしがあるからだ。

この時はスカーフの誘惑を断ち切って、そんな自分の「賢明さ」を自画自賛する彼女だが、それが油断を招いたのか、やはりルルーのお仕込の甲斐あつてというべきなのか、次の時は店で「一番美しい」スカーフを買うことになる。もつともこれは商人の消費教育の成果だけとは言えない。運が良かったというのか、相手がたまたま胸の奥に底知れぬ欲望の空虚さを悶々と抱えていた時だったことを見逃してはならない。とはいえたゆまぬ努力でそれを消費行動へと結びつけたのは彼の手腕に帰するし、第一彼女に目をつけたこと自体なみなみならぬ明察の賜物だったと思われる。医師夫妻がヨンヴィルに馬車で越して来る途中、エンマの飼犬が逃げだした。大騒ぎで探すのだがやがて見つからないまま出発しなければならぬ。「エンマは泣き、激怒しこの不幸でシャルルを非難した」〔113〕。それをあれこれ慰めたのが他でもないルルーのだが、彼はこの時露呈した彼女の強い自己執着の念に、

恵まれた消費者の素質を見抜いたのではないだろうか。

愛するレオン青年が、二人のあいだに何も起こらないままパリに出発した翌日から、エンマの不幸な日々が再び始まる。彼女はなぜ目の前に差し込まれた幸福をこの手でしっかり掴まなかったのか、とレオンと愛しあわなかったことを悔やみ、「彼の唇」への渴望に心を苛まれる。男の胸にすべてを委ねなかったことが、「彼女の欲望を一層激しい」ものにする〔156〕。もつともその相手がいないためにさしもの「情欲の炎」も徐々にささまるのだが、彼女があれこれ買物をはじめるのは、自分が払ったこの「大きな犠牲」への代償としてなのである。愛と消費の関係が早くもここに浮びあがっていた。レオンの出発が露わにした充たされぬ欲望を鎮めるものとして、ゴチック様式の祈祷台、月に一四フラン分の爪磨き用のレモン、青いカシミヤの服などと共に、ルルーから前掲のスカーフも買われている〔同頁〕。しかしそれでも心が収まらずに髪形を変え、殊勝にもイタリア語を習おうと辞書や文法書を買ひ、また歴史や哲学などの堅い本にも取り組んでみる。しかし結局はどれも身が入らぬまま、一九世紀末に流行したヒステリーの先駆者というのか、時々発作を起こすようになり、卒倒し咯血さえ起こす〔157〕。この頃は彼女にも自分が本当は何を欲しているのか判らずに、模索している段階だったといえる。そしてロドルフとの出会いを通して明確になったのはまさにそのことだった。エンマは、彼女を一眼見てすぐにものにしようとした漁色者や意気投合してたちまち深い仲になるのだが、彼女の消費生活に一段の進展が見られるのはそのころなのである。その点で、農事品評会の祝賀で賑わう狭い町をそうなる直前の二人が歩いていた時に、後ろから非常にしつこく話かけてくる男がいたことに注意したい。その場は機転をきかしたロドルフに厄介払いされるものの〔158〕、この人物こそ余人ならぬ、愛の飽くなき追求者であるエンマにとってその後有用きわまりない僕となるルルー老人であることは言うまでもないだろう。逸早く不倫の匂いをわが商機として嗅ぎとった彼のためまね精進には敬服するほかはな

い。この出現は後から考えれば新規の顧客へのあいさつ廻りだったことになる。彼がこの客を掴むのには幸運な事情もあった。エンマの夫がイポリットの内反足の手術に失敗してそれを切斷する羽目になった時に、義足の注文が彼に廻つて来た。お陰で老人はひんぱんに彼女を訪れては着手したばかりの消費者教育に磨きをかけることが出来たのである。つまりバリから入荷した品物の話をあれこれ聞かせる一方で、「全く寛大な」態度を持して代金の方は一銭も請求しないでいる。こんな厚遇を受けてどうしてエンマに「自分の気紛れな欲望をすべて叶えてくれるこの安易さに身を任せ」[217]ないでいることが出来るだろうか。どうやら一つの信用関係が生まれ、自給自足経済の殻は完全に脱ぎ捨てられた。彼女における市場経済の成立である。M・ポランニーに拠れば、「一九世紀中頃、自給自足的な家計が余剰を市場に売っていた時代が終わり、すべての所得が市場での財・サーヴィスの売却によって得られ、市場が逆に生産を支配するようになる」⁽⁸⁾のだが、この転換をエンマが実現するのは、たんに彼女が自給中心の父の元を離れ、サーヴィスの売却だけでかなりの所得を確保する医者と結婚したからだけではもちろんない。生産を左右する市場がそのことによってまさに供給、つまりは消費と需要を決定するという点においてなのである。といつても週一度の市で綿織物、掛け布団、鶏、チーズ、金物製品などが商われる、購買力のまだまだ低いこの町では[158]市場経済はとうていそこまで進展していない。しかしエンマ個人でいえば、彼女は自分の欲望をルールの商品の流通の中に先駆的に組み込んでしまったのだ。跛行的にせよ市場に依存した近代的消費者がこの田舎町にも誕生していたのである。市場で供給される商品の獲得がこの時から彼女にとって欲望の実現と等しくなるのであり、要するに欲望一般が市場内回路による解決へと馴化されたのだ。とはいえ彼女がこれほど速やかに消費的転換をはかることができた最大の功績は、やはりその秘められた愛に帰するのである。

エンマが、足繁く通うようになったルールにルアンの店で売っている「極上の乗馬鞭」[217]を注文するのは、

そういう意味で彼女が市場への依存をより深めて大きな顧客へと成長する転機だった。この鞭は愛人ルドロフへの贈り物だからである。愛、それも夫以外の男への非日常的な愛がなければ、彼女の消費が返済不可能な額の負債につながりえたのか疑わしい。もともと彼女の消費が、穀類、肉野菜、乳製品といった生活必需品の購入とは別のものであることは言うまでもない。彼女がそれまで買い求めたゴチック式の祈祷台、爪磨き用レモン、カシミヤの服、イタリヤ語辞書、哲学書、「一番美しい」スカーフなどは、そうした女中が担うべき低次元の生活をこえた高踏的な価値を持った商品の所有を目ざしている。持てる者だけが買い、彼らに掻き立てた欲望との関係で主として価格のきまる、いわば金では買えない価値を持つ品物が、おそらくそれゆえに彼女を魅了していたのだ。とはいえそれだけならどれほど気紛れを発揮しても、掛け売りの代金は大した額にはならなかったろう。そうなる以前に夫に請求書が廻されたりし、それが田舎医者には身分不相応な負担であれば身代をつぶす前に自ずからどこかで歯止めがかけられる。しかし愛人への贈り物の代金を夫に請求するわけにはいかない。「銀地に金メッキした握りの鞭」[218]以降、彼女の消費は闇に潜伏せざるをえなかった。そして夫に知られないかぎり水をさす者はいないのだから、金を貸す人間がいれば後は彼女の使い放題となる。ルルーの好意でその度に返済を延期される掛け売りや借金額はこうしていつか雪だるま式に増えていき、その実状を知るのはこの成りゆきに目を細めて喜ぶ金貸しだけで、彼としては医者の身代がつきるまで余計なお節介を言うつもりはもちろんない。借り手のエンマはどうだったのか。もちろんそれとなく負債の増大に気付いて、多少心配してもいた。だが親切なルルーから返済の延期を進められることに慣れて貸借契約の厳しさなど別の世界のことにようになっていた。借りるだけで返す迷惑の脱け落ちる偏頗さは人にありがちのことだろうとしても、やはりルルーの娘、にわか仕立ての消費者の欠陥をついさけ出したというふうにも思える。だがやはりそれ以上に不倫の愛の祝祭性が事態への反省を困難にしていたのだ。社

会制度が容認していない愛は、どうやらそれだけで彼女には日常性をこえた神聖な価値を持つものであって、その前では夫も子供も家計もいっさいが二次的なものとみなされる。せめて女中がしつかりしていたら違う成り行きになっていたかもしれないが、愛を崇拜する女主人から家計を任されたフェリシテは、トストの最初の女中と違って家計管理に不向きなうえに、エンマの不倫をいいことにそれに手を貸す一方で自分でも心安い男友達を作つて引き入れるぐらいいだから、放漫財政をくいとめる才覚などあるはずがない。「台所女が家計を取り仕切っている今、出費は大変な額になり、請求書は雨あられとふつてきた」〔237〕。

ルルーは願つてもない金鉱を発見したのである。もちろんその開発は誰にもできることではないし、さすがの彼もこの山があそこまで富を埋蔵しているとは見通していなかったらう。エンマがロドルフに贈る鞭を買った翌日、それまで一銭も要求したことのないルルーが、初めてあれこれの買い物の総計二七〇フラン也の勘定書を持つてやつてくる。消費の贅沢に慣れた今もはや後戻りはできまいと頃合いを見計らつてのことだろうが、なにより夫が使うはずのない高級鞭の購入に目を付けたのに違いない。突然請求を受けても、女中の給金さえ滞っている彼女に支払うあてはない。しかし何だかんだとうるさく食い下がられて、数日後に彼女は患者から送られてきた診察代を夫に内緒で払いに流用する。秘密の愛のために夫から盗んだ金が使われたわけである。ところで勘定書を出されて最初は払えないとつっぱねるエンマに、ルルーはでは品物を返していただかねばと脅しをかけるが、効き目はない。そこでもう一押し、鞭だけは惜しいので、ご主人に言つて返していただきますと鞭をもちだしたのは、医者に乗馬の習慣がないのを承知してのことである。すると夫人ははたして躍起になつて押留めにかかる。その狼狽ぶりに、「さあ掴まえたぞ」と商人は内心ほくそ笑んだという。彼女の弱みを握つたのを「確信して」、「仕上げをご覧じろ」と呟く彼の中で、どうやらこの時遠大な計画が具体的に描かれ始めたのに違いない〔238〕。それは一言でい

えば客に支払えないところまで次々に貸しつづけて財産を差し押さえる手口である。商品売り上げの利益に、貸した金の利子だの手数料が加算され、しかも貸した相手が店の顧客なのだから商品の販売にも寄与する一石二鳥のやり方で、儲けの回収率はずつと高く迅速である。需要は愛の欲望の命ずるまま果てしがない上に、それを抑える監視の眼はなきに等しい。この調子で思い通りに負債がふくらんだところで奥の手をだす算段だったのである。商人がそれまでおくびにも出さなかった掛け売りの代金二七〇フランの請求書をつきつけた時、計画はすでに実行に移されていたのかもしれない。払えないのは百も承知で責めたて、困り果てたところを少々ご用立て致しましょうかと慈愛の手をさしのべれば、相手は藁にもすがる思いで飛びついてくる、有難涙をながしても少々の高利にけちをつける心配など少しもないぐらいに踏んでいたので。なにより返さずにいくらでも借りられる妙味は忘れられないものである。テリエ氏からキャフエ・フランセをすでに巻き上げたことのある彼には手慣れた段取りだったに違いない。もつともそんな金貸しも客に不意の入金があるとは計算外だった。「例の代金を頂戴する代わり、もしお受けになる気がございますなら……」と融資を切り出した鼻先に二八〇フランが突き出された。度肝をぬかれた商人は、「失望を隠すために」くどくどと言いつつ諷刺をする。もつとも何を受け取らせる気であったのかこの場では不明だが、その後のやり口から見て、約束手形（さしずめ五百フラン位の）と考えてよいだろう。でなくてようやく代金を貰ったのに、不満を抱くはずもない。金のある木を植えようとしていたところだったのだ。もつとも一度けちは付くものの、その後は順調に思ふ壺にはまっていって行くだろう。なお、二八〇フランは患者からの一四枚のナポレオン金貨（二〇フラン）で支払われる。同じ医者への支払いを、スー貨（二〇分の一フラン）で払った彼女の父とは経済的に、そしてなにより経済発展段階において、エンマがいかに隔たった場所に来ているかをこれはよく示している。

高級鞭は、潜在的だった愛と商品のつながりを明確にした。そして自分の神聖なる愛を商品への欲望として安易に実現する道すじができあがると、両者の欲望は入りこんで分け難いものになる。もともと二つは所有の追求において同じものの両側面だったのかもしれない。いずれにしても、エンマが不倫に深くはまるほどルルーの懐が潤い、その分大事な客に便宜をつくのでこの信頼関係はますます強固になる。へ愛を心にという銘句を入れた印章、スカーフ、葉巻き入れが、エンマを仲立ちにルルーの店からロドルフのもとにやってくる〔28〕。やがてその挙句医師夫人から商人に、旅行用の大型マントとトランク、ハンド・バッグの注文が出される〔29〕。ルルーがこれらわけありだと睨んだ通り、早くも駆落ちの相談がまとまっていたのだ。神聖なる愛の行きつくところなのであるが、金貸しとしてはこの一時だけの祝祭的消費を喜んでばかりもいられない。駆落ちがうまくいけば、彼とんだ見込み違いに終るからである。幸いにもいざとなつてロドルフが約束をすっぱかす。人妻は愛する男の思いもかけない裏切りにあつて病いに倒れ、やさしい夫の看病で一月半ばかり寝込むのだが、その間家の中は火の車で収拾がつかない。しかも病氣の一番重い時にルルーが今は不要になつた駆落ち用の品物を納めにきて、夫にその支払いを求める。トランクなどは一箇の注文を二つにして、さらに注文にない品物もつけ加えて水増しされた請求額は一八〇フランにのぼる。はじめは品物を受けとるのさえ断わっていたシャルルだが、一步も譲らずに脅したり泣きついたりする商人の執拗さに根負けして、ついに「六ヶ月期限の手形に署名する」〔37〕ことになる。ところが他の支払いにもこと欠いていた夫は、この窮余の一策に味をしめ、ルルーからもう千フラン借りるという「大胆な考え」を抱くのだ。相手は待つてましたとばかりに、エキユ（三フラン）と別の手形を店から取ってくる。一年の期限で一〇七〇フラン借りたことにし（七分の利子という意味だろうか）、それに手数料、さらになぜかもう一度六分の利子がつき、商品の販売利益（一八〇フランの三分の一）を加えると一年後には一三〇フランの儲けが出る。

この計算がどこまで正しいのかはともかくとして、彼のこうした融資の狙いは前述のように目先の小巾な利益の少し向こうにあったことが窺える。その仕掛けがはじめてここで明らかにされるのだ。どうせ相手は手形が決済できずに、書き替えるのはめになるだろう。すると「かわいひ彼の虎の子は、医者の手元で保養所にでも入ったように栄養を摂つてすっかり肥え太り、いつの日か袋がはり裂けるほどふくらんで彼のところに戻ってくるだろう」と[238]。

この目論見はしかし予想以上に當つて、何倍にもふくらんだ借金の重みで、ボヴァリー一家はおし潰される。もつとも負債がこの千フランの手形で終れば、つまり夫人がロドルフの一件に懲りて自重していればそれほど被害にはならなかつたろうが、幸か不幸か痛手のいえかけたエンマの前に今度はあの昔別れたレオンが登場するのである。以前何もなく別れたのが口惜しくて悶々たる日々を送り、おかげで衝動買いにも走つたこの青年と再会し、いよいよエンマは身も心も焼きつくさんばかりの激しい愛に溺れるのだが、ルルーにしてみれば相手からそういう積極的な協力がえられるとは思つてもいなかった。しかも不倫自体ではないにしても不倫に根をはる借金がついに日の目をみたというのに、妻の病気に動揺したシャルルは彼女が購入した旅行用のマントやトランクに不審の念を抱くどころか、むしろルルーがエンマにさせようとしてうまくいかないでいた手形の署名を自分からすすんで願ひである。しかしいつからか金融業の本性あらわになった商人の畜財に夫が手を貸したのは、単に偶然なのだろうか。偶然といえば、第二の愛においてもシャルルはもう一つとんだお手伝いをしている。ロドルフの件で倒れたエンマは予後の経過が落着くと一時すこしは神妙になり、信心や慈善の真似ごとを始めるが、そんな平穩なある日、オメと司祭の演劇談義を聞いていたシャルルが、どういう風の吹廻しか氣ののらぬ妻をいつになく強硬にルアンへとオペラ見物につれていくのである。この親切が罪つくりとなつた。愛の賛歌でないオペラがあるだろうか。夫人はし

だいに舞台にくり拡げられる愛の憤怒、嫉妬、復讐のドラマに引きこまれていく。ヒロインを見ながら、結婚で身を汚し姦通で幻滅する前に、もしも「頼りになる偉大な心の人物」に自分の人生を託すことができたなら、どんなに幸わせだったろうかと、我が身を顧る。こうして歌劇は「彼女の苦悩の再現」そのものとなる。やがてヒロインの前に侮辱された恋人役の、実生活でも恋多き二枚目俳優が登場し、朗々たる声で心からの深い愛を歌いあげ、逆境にいたれば抜き身をふりまわして心底の誠意を訴える。エンマは、もしもこの俳優と一緒に暮らしていたら、お互いに愛しあいながら仕事で国々を渡り歩き、公演中には彼の衣裳に自分の手で刺繍を縫いこんでやっただろうなどと愛の生活を夢想する。すると折しもその俳優が舞台から自分を見ているような気がして、彼女は思わず愛の化身ともいべき彼の腕の中にとびこんで、「私を連れていつて。私の情熱も夢もみんな、あなたのものよ!」と叫びたい衝動にかられる。いわば鎮まっていた彼女の浮気の血がまた騒ぎだしたのだ。丁度そこに、まるで機が熟するのを狙い定めていたかのように、夫シャルルの手引きでレオンが現われるのである。そればかりかシャルルは、身体のためにもう一晚残つて観劇でもするようにと彼女を説きふせて、翌日ひとりで先に帰る。夫のお陰でお膳立てはほぼ揃ったわけだ。法律ばかりかその道の修行もすこしはパリで積んできたレオンは、今度こそエンマをものにしてようと決心して、翌日彼女がひとり残ったホテルの部屋を訪ねてくる。そこでただちにことが成就するわけではないにしても、動物の婚姻儀礼のような駆引きをへて、ほどなくして二人の思いは叶えられるだろう。ここで見落してならないのは第二の大恋愛が始まった途端に、それと緊密に連動するかのように夫人が財政的にも新局面に入ることである。翌日ひとり夢心地でヨンヴィルに戻った彼女は、義父の死を知らされる。どこで聞いたのかルルーが早速御用を承りにきて、彼女に「遺産相続」の祝いをのべる。しかし相続したのは名義上シャルルなのだから、ここはその富をいかにしてエンマに、そして彼女を介して自分の懐に引きいれるかが彼の腕の見せどころとなる。

こうして彼は夫から「代理権」をとることを勧める。そうすれば御主人は煩瑣な雑務から解放されて仕事に専念できるだろう。彼はためらうエンマに旅行用のトランクの件をちらつかせて脅しをかける一方で、それがあればいかに「便利」か、なんでもわれわれ二人でことが運ばますと入れ知恵をする。代理権とは、「財産の管理、運用、一切の借入れ、一切の手形の署名、裏書き、一切の支払い等」全般にわたる同意なのだから、夫の財産を好きなように使えるこの委任状の獲得をためらう理由が彼女にはあろうはずもない。エンマは夫に遺産相続がいかに面倒であるかを吹きこんだうえで良かったら私がそれを引受けましょうと提案すると、相手は妻の献身的な申し出に感激しても二もなく応じる。ところでこの件で相談できる良い公証人はいないだろうかと彼女が水を向けると、相手はなぜレオンの名をあげてくるのだ。こうして彼女はややこしい一件を若い公証人見習いとやむなく片づけるために夫に感謝されつつルアンに馬車で出かけていく。彼女が青年に身を委ねるのはこの時である、「それは充実した、甘美なすばらしい三日間、まことの蜜月だった」[280]。

愛と金の関係はここでは直結して浮上する。夫の財産の管理権を握るための奔走がそのまま新たな愛の成立を招いているからだ。消費生活も一挙に拡大する。まずカーテンやカーペットを気兼ねなくルルーから買い求める。おそらく買えば買うほどに商品への欲望は大きくなるのだろう、「彼女はもはや商品を取めるルルーの世話なしにはやっていけなくなった」[286]。この消費生活への更なるのめりこみは、代理権の委譲なしには考えられない。そして商品的欲望の解き放ちは、どうやら愛の欲望のそれと同じところに発している。もっとも商人は消費の増大を客の有難いご愛顧として答えるものの、彼の野心的な目算からみればそれだけでは利潤の巾はしれていたようだ。やがて新たな商機が彼に訪れる。エンマは根負けした夫に勧められるかたちで少し前から週一度ルアンにピアノを習いに行くようになるのだが、ピアノのお稽古ならぬ逢引きの後、レオンと腕組みしてホテルから出たところで思

いがけずこの老人と鉢合せする〔285〕。彼女が言いふらされるのを惧れているところに、またしても弱味を握った商人が会いにくる。部屋に通されると戸を開め、「お金が入り用でして」〔同頁〕と代金の支払いを切りだすのは前と同じ手口だ。ところがカーテン、カーペットに初まる掛け売りの代金は買ひも買ったり、この度は二、〇〇〇フランの太台に達していた。ロドルフとの駆落ちのつけが一八〇フランだったのだから、その頃と比べても桁違いの使いようである。前の約束手形の清算もしていないうえに、今や週一度の密会（馬車、ホテル、シャンペン、食事、贈り物……）の費用を夫の眼をごまかして捻出しなければならない彼女に支払える道理がない。そこが付け目だった。相手はさんざん泣き言で困らせた後で、「持ち合わせはなくとも、《財産》はおありだ」とどこで調べたのか、シャルルの父が残した一軒の廃屋の話を出示してくる。それを売れば、返済したうえにまだお釣りがくるという。しかも彼女は委任状を握っている。この申し出を彼女に断られるはずがない。翌週訪れたルルーは買手が見つかつたことを告げ、現地でさらに買手と交渉して売値を四、〇〇〇フランとすることに決まる。「エンマはこの知らせに喜色満面となつた」〔286〕。彼女は支払われた半金の二、〇〇〇フランを受けとることになり、早速それを買ひものの支払いに当てようとするが、相手は意外にもそれは取っておきなさい、と受けとらない。すると彼女は其二、〇〇〇フランの紙幣を眺め、「それが語る数限りない逢引きの日々に思いをはせ」ている内に、たちまち決心は鈍るのだ。ただしそれを受けとる代わりに千フランの約束手形四枚に新たに署名するという条件が付けられる。ルルーは掛売りの代金二、〇〇〇フランの支払いを猶予するばかりか、新たに二、〇〇〇フラン貸してくれたのである。もっとも後者の分は直ちにルアンの銀行家ヴァンサールに割引いてもらひ、手数料と割引き料二〇〇フランを引いた一、八〇〇フランが彼女に手渡される〔287〕。なおヴァンサール氏は作中に一度も姿を現わさず、彼の実在を保証するものは何もない。もし彼がルルーの金融操作の便宜をはかる名義上の存在なら、強引な貸付けに

よって最初から丸々二〇〇フランの儲けが出たわけである。とはいえ医師夫人も今度ばかりは、手元の三、八〇〇フランの内千エキュつまり三、〇〇〇フランは使わずに四通の手形の内三通までそれで支払っている。差引き八〇〇フランは半年間のレオンとのデット代に消えたのだらう。残る手形は一通（一、〇〇〇フランの）だが、ところがその請求書が間の悪いことに夫人が週一度ピアノを習いにルアンに行った留守の木曜日に届いてしまい事態がこみいる。この辺りは内情に通じたルルーの深謀に発すると疑つてもよいだらう。帰宅したエンマは動揺した夫に請求書の説明を求められるが、下手なことを言つて義父の不動産の売却がばれても困るので、家というのはあなたの知らない出費がいろいろと掛るものなのだとその場を糊塗しようとする。返つてそれが仇になったともいえる。

一、〇〇〇フランの返済に困つた夫は結局またしてもルルーに泣きつき、ルルーは支払つてやる代わりに彼に別の手形を二枚署名させる。その一通は三ヶ月期限の七〇〇フランだというから、少なくとも二〇〇フラン分は虎口を逃れようとして返つて深く借金地獄に引きずりこまれたことになる。他方で夫は母親に無心の催促をすると、心配した母親は様子を見にやってくる。エンマはルルーに頼んで一、〇〇〇フラン以下の偽の勘定書を作らせておくが、それを見たボヴァリー老婦人の反応が、金を使うことを警戒する自給自足的なルオー老人の娘が、その後いかに急速に貨幣経済のとは口から消費経済の隆盛期へと駆けのぼつて行つたかをよくもの語る。エンマとしては姑の眼をごまかすために「非常に安い品物」を量を水増しして請求書を書かせたつもりなのに、「裏地の絹が二フランですつて！　十スー、いや八スーも出せば立派に間にあう木綿の生地が見つかるつていうのに！」と姑は目をとがらせるのだ。そう湯水のように使われちゃどんな身代でも持ちやしないよと〔298〕。裏地の四対一の価格差は、老女が言いそうな嫌味をこえて、いつのまにかエンマとの間に生じた埋めがたい経済的落差を浮き彫りにしている。もちろんそれはエンマひとりが突出したためで、老義母の警戒感の方がこの辺りではまだ一般的なのである。再会

したレオンとの交友でバリかぶれをしたらしいオメがいつになく、英気を養わねばならない、「観劇に行ったりレストランに行ったりして、大いに羽目はずそうではないか！」などと言いだした時、オメ夫人が夫の冒す氣でいる「漠然たる危険」[301]に恐れを抱くのもそうした生活感覚に根ざすだろう。結局この危険とは経済のそれである。消費人口の低い小さな町の葉屋にとつて観劇もレストランも思わぬ出費となるばかりか、それは勤勉精神を鈍らせ身のほど知らずの新たな消費行動に染まるきつかけになりかねない。オメ夫人の不安は少しだけ適中する。夫はレオンに、近くルアンに出るから「一緒に札束をきつて遊ぼう」などと氣炎をあげるからだ。もっとも愛の危険とは無縁なこの人物には、幸い医師夫人ほどの消費者になる資質はなかったのだが。

二フランの裏地の浪費など意に介さぬ様子の嫁に委任状をこのまま持たせるのは誤まりのもとである。老婦人は一旦はそれをエンマから首尾よく取りあげさせる。しかしお陰で嫁姑の軋轢が表面化すると、息子のシャルルは妻の見幕におそれをなして彼女の肩を持つ。業を煮した母親が翌日、「どうなるか今に判るよ」と出ていった後、彼は折角取りもどした委任状を今度はこっちから何度も頼んでもう一度受けとることを妻に承知させる有様だ[298]。前回同様委任状の獲得による財産上の優位は彼女の愛の首尾に大きく波及する、「次の木曜、ホテルの寢室で彼女はレオンと狂態を演じた！」[299]。もっとも委任自体はこの段階ではもはや、少なくともルルーにとつてはどちらでもよいことだったらしい。事はすでにほぼ予定通りに仕上っていたようだ。頃合と見て間もなくエンマが署名した七〇〇フランの手形の支払い請求がまず始まる。といつても催促に來たのはルルーではなく、彼からそれを譲りうけたという例の「残酷無慈悲な」銀行家ヴァンサールの使いで、エンマは来週払うと言つて引取らせるが、その翌日執達吏から拒絶証書が届く。うろたえた彼女はルルーの店に駆けこむ。例の「もみ材の大きな事務机」が姿を現わすのはこの時なのだが、肘掛け椅子に坐つた金貸しは、これまでのあの「人のいいルルーおじさ

ん」はどこに消えたのか、上得意が泣いてすがるのにとりつくしまもない。自分には一サンチームの金もない、人の食いものにされるしがない商人の私目に金を貸す余裕などあるはずがない、とつれない返事で押し通そうとする。金策が尽きたところを差押えにかかるのがかねてよりの手筈だったのだ。ところがよく聞いてみると夫人は義父の家の残金二、〇〇〇フランをまだ受けとっていないという。老人は急に「蜜のように甘い声」を出して、ではもう一肌脱ぎましょうと一、〇〇〇フランの手形を書かせて融資する。嬉しい誤算があったのだ。客の資財、とはつまり彼の懐に入るあがりを、少々低く見積っていたのである。この時のルルーの態度は見習うにたたる。この貸しついで儲けがまた一廻り大きく殖えたのに、だからといって傲るところなどいささかもなく、入荷した新商品を見せて「一メートル七スーの服地」を辛棒強く売りつけにかかるからである。それに引きかえ金のことは「大公妃さながらに」投げやりになっていた夫人は、夫に内緒で患者から治療費をせしめ、自分の持ち物をたたき売り、女中、宿の女主人と相手構わず借金をして廻る。こうして掻き集めた金が手形の払いに使われた形跡はなく、大体はこれもレオンとの逢引きに消えたものと思われる。というよりそのための当座の小遣いが足りなくて、その場しのぎにこういう恥も外聞もない行為に出たのではないだろうか。そんな彼女にもさすがに借金が気になることもあり額を計算してみるのだが、やってみるとそれがあまりにも膨大なもので、そんなはずはないと打消しつつ恐いやら面倒やらで結局は先延ばしにして放置していたのだ。家の中は荒れ放題、娘が穴のあいた靴下をはくのも構わず、みかねた亭主が文句を言えばあららしく言いかえす。ではそこまで入れあげた青年との仲はどうなのかと言えば、財政の悪化と平行して、彼との情交もこの節は甘美を通りこして、どこか凄惨な趣きをおびている。相手のレオンは将来のエリートとしてそろそろ世間体が気になりだすし、エンマの方はこの至高の愛も結局はただの結婚生活と変わらぬ凡庸なものではないかと思うようになって、それぞれに相手が鼻についてくるのだ〔311〕。ある時などレ

オンは二度と彼女には会うまいと自分に誓い、エンマはエンマでこの恋を「どうすれば厄介払い（*sen débarrasser*）でしようか」とまで考へる〔312〕。要するに愛にも終わりがあつたらしい。しかしだからといって行き掛り上直ちに縁が絶てるわけではない。愛が終結するには何か欠けていたのである。愛を支えていたあるものが変らない限りそれはだんだん続くしかないのだ。ある日エンマは、今やむしろ嫌悪感に身を苛まれるようになったレオンとの逢引きで一晩泊つて家に帰ると、八、〇〇〇フランの債務を二十四時間以内に払え、さもないと彼女の動産と有価証券を差押えるむねの裁判所の通知を見せられる。愛と時を同じくして債務の方も清算（*sen débarrasser*）を迫られることになったのである。愛と同様に財政も末期症状を呈していたのだが、後者が決まらなにかぎり前者も片がつかない、だから物語も終りようがない、ということではないだろうか。先廻りして言えば、この一件で差押えが決まつた途端レオンとの愛は、その当然の帰結であるかのように自然に消滅している。そしてそれはエンマの自殺後も続く妻へのシャルルの愛とは対照的である。とはいえシャルルの愛もやがて終りを迎えるのだが、それが丁度借金の清算と足並みを揃えているのは注意を要する。それはともかくこの段階になつて、ようやく彼女はルルーの口口に気付く。彼が何度も親切にお金を融通してくれたのは「目的」があつたからである。彼女は、「ものを買うばかりで代金は払わず、金を借りようと手形に署名し、その手形を度々書きかえているうちに、期限の更新ごとにその額がふくらんで、ついにはルルー殿に彼が投機事業をやろうと辛棒強く待っていた資本を作つてやつたのである」〔314〕。

エンマはひよつとして期限更新にまた応じるかもしれないという仇な望みを抱いてルルーに掛け合いに行くが、今度ばかりは押しても引いてもびくともしない。「あなたにはもう何もありませんよ」と商人は相手の足元を見て突つばねる。空涙の効き目も無く、すくすく逃げ帰る。商人の掌を返すようなこの仕打ちは不人情というほかな

いが、しかしながら老人は二人の「どちらが悪いのか？」と逆襲する、奴隷のように汗水たらして働いた人間と、そのお陰で「面白おかしく暮してきた」人間とでは（三）上。黙って引下がる他ないのだ。しかも裁判所のさたなのだから法律上も咎めるべき点はない上に、社会の進歩においてもルルーは大きな貢献をしている。彼は良い意味でも悪い意味でもボヴァリー家の財産の「搾取」開発者なのである。もし彼がいなかったら、エンマがエントロピー的に放出してやまない富エネルギーは、道ならぬ愛への惑溺に唯のみこまれるだけで後には何も残らなかったに違いない。医者、の財産を上限とする彼女の消費は、市場社会に少時景気をつける美德ではあっても、それだけでは前進を画す一つの力とはなりえない。ルルーはこの拡散して無に帰しかねない富エネルギーを根気よく秩序（資本）へと回収したのである。では彼女は搾取の被害者だったのか。それがあるいは読者の取りやすい暗黙の観点なのだろうが、しかしよく考えてみると彼女はむしろ商人兼金融業者が体現する経済制度の恩恵に誰よりも浴した人間なのだ。ルルーがいなければまず彼女は、彼を主な供給者とする商品への欲望をみたすことができなかったろう（この欲望が根気よく品物を見せる商人の販売努力なしに生れたかどうか疑問である）。それが続けられたのも彼が金を融通してくれたればこそだった。委任状があつても、ルルーの幹施がなければ四、〇〇〇フランは手に入らなかったし、この金がなければレオンへの愛をあれほど大きく育くむことはできなかったろう。ルルーがお使いなさいと渡した二、〇〇〇フランは「数限りない逢瀬」を可能にするものだったからだ。一方が相手の富を愛を介して獲得したということは、見方を変れば相手がこの借金のお陰で思う存分に愛を表現できたということなのである。ルルーはエンマの愛にとつて有難い恩人であり、その恩人に感謝はしても非難すべき筋合いなどあるはずがない。そのうえ委任状の件ではエンマ個人の利益にとどまらぬ、より積極的な意義があつたとも言える。医者個人の資産にとどまれば惰眠を貪っているにすぎない富を、エンマの消費を通して社会に引きずりだし、さらには事業の

資金として大いに活用を計ったからである。農事品評会で挨拶にたった参事官の言葉を借りれば、「有閑無為の徒の無益な飾りであるかの浅薄なる英知でなく、何をおいても有用なる回収の追求に邁進し、それによって各人の幸福、万人のための改善、国家の支援に寄与する、穏やかで深遠なる英知」〔14〕、まさしくルルトはそれに恵まれていたわけである。では彼の控え目だが奥行き（奥行き）の深い英知の「有用なる目的」とは何だったのか？

それを理解するにはまずヨンヴィル・ラベイの地理的な位置を見定めねばならない。第二部一章は、『ボヴァリー夫人』がもしたんなる姦通小説なら全く無用という他はない詳細な土地の説明が始まる。それによるとルアンから三二キロメートル離れたこの小さな町は、二つの大きな街道の中間にあり、そのうえノルマンディ、ピカルディ、イル・ド・フランスの境界にも位置する。主な産業は牧畜と農業だが、チーズは郡で最下等だし、やせた土地は多くの肥料を必要とするので耕作には費用がかかりすぎる。品評会の督励にもかかわらずここは今のままだとあまり発展が期待できない土地なのだ。それなのにここの「怠惰な」農村は保守的な生産方法にしがみついている。だが最近そこに特筆すべき事態が生じた。それは「重要村道」〔15〕の開通である。一九世紀、とくに鉄道が敷設される（パリ・ルアン間は一八四七年）まで、産業の下部構造としての道路網の整備、拡充は重要な課題になっていたと思われるが、一八二四年と一八三六年の法令によって村落間の連絡を重視した村道の拡大が幹線道路の補助網として積極的に推進されるようになった。¹⁰⁰その施策の恩恵が、「一八三五年まで道らしい道が一本もなかった」〔16〕このヨンヴィルにも及んだのである。つまりは一八三六年の法令で作られたことになる新村道のお陰で、この町はルアンばかりかアブヴィル街道とアミアン街道ともつながり、時にはルアンからフランドルへ抜ける荷車引きも通るようになった。ところが「新しい販路」〔16〕の創造を意味し、大いなる飛躍の機会となりうるこの村道の開通に、それが有するビジネス・チャンスの可能性を見抜いたものは「怠惰な」住民からは出てこず、

結局町は「停滞したままだった」のだ〔106〕。ただそんな中で一人慧眼の持主がいたことになる。旅館金獅子の女主人がすでにルアンとのあいだに日に一往復の乗合馬車を走らせているが、旅客の他は町の小売商人が仕入れに使ったり行商人を乗せてきたりする程度で、まだ充分にこの村道の経済的潜勢力を開発しているとは言えない、同業の割込む余地は大に残されていると彼は考えたようだ。彼は《商業の寵姫たち》という、ひょっとしてある女性の貢献を讃えたとも思える名の会社を設立したことが作品の最後に語られているが、それは乗合馬車屋だったのではないかと思われる。同じ頃金獅子の評判の御者イヴエールに引きぬきの声が掛ったのは彼の仕業ではないだろうか。そういえば、金獅子の商売敵カフェ・フランセを主のテリエが手離すはめになったのもこの金融業者の仕打ちだが、交通・運搬に着眼した彼の野心の方向はおのずから語られていたといえる。だがただちにこの仕事を開始するには、彼つまりルルーには「資本」が欠けていた、そして「投機事業」に着手しようと資産を「辛棒強く待ちこがれている」彼の前に現われた運命の女神が、他ならぬエンマだったのである。彼女の愛が彼の事業資金の形成にいかにも多大な貢献をしたかは述べた通りだが、両者はぬきさしならぬ依存関係にあつて均衡を保ち、どちらが欠けてもそれぞれの願望は、そしてまた作品の成立も期しがたいものだったろう。エンマの姦通の物語は、同時に一零細商人が小なりといえども資本家へと飛躍する成功の物語と表裏の関係にある。あるいは前者を描いた図柄の織物が、視点をずらすとそのまま後者の図となつて浮かびあがるのだと言ってもよい。

金と愛の緊密な関係は、最初のボヴァリー夫人エロイズの死にも影を落している。この執達吏の未亡人はシャルルの母が財産目当てで是非にと息子との結婚を取決めた相手だが、ところがその肝心の財産を預っている公証人が逐電したうえに、「鳴物入りで吹聴していた」残りの財産も真偽のほどが怪しくなってくる。実際ディエップの家は抵当で虫くいだらけ、六、〇〇〇フランと称していた船株は五、〇〇〇フランにもならないことが判明する。

後者だけでも一、〇〇〇フランは鱈を読んでいたのだ。この見込み違いが父親を激昂させていることに留意しなければならぬ。彼はだまされた悔しさで椅子を石畳にたたきつけ、こんな女とお前は息子を一緒にさせたのかと妻を責め、その挙句二人して息子夫婦の家に押しかけて一騒動起こす。ここにこそ揺がせにしてはならない人生の重大事があったからである。この些少ともいえる嘘をついたシャルルの妻の方も、その些少の相違の重みを知りすぎるほど知っていたからこそ色をつけてみたのに違いない。そこを詰るのはだから彼女のまさに「急所を突いた」ことになる〔33〕。さもないければ病気でもない彼女がその一週間後、突然血を吐いて死ぬことはなかったらう。

財産の少々の相違で人の生き死にが左右されるような厳格な利害の論理が、この結婚にとどまらず作品全体を支配しているように思われる。では突出した消費者であるエンマが、自分の愛を貫くために好き放題に浪費した負債が皆さんでついに死ぬことになったとしても不思議ではない。それは先妻の轍をふんだにすぎないとも言える。だが死んだからといって負債の清算が完了するわけではないことも事実だ。普通主人公が死ぬと物語はたちまち手詰まりになっておのずから終息に向う。エンマは毒薬を飲み、名医が呼ばれ、もはや助からないことが判った後に死を前にした彼女のあれこれの思い入れがあり、葬式には父のルオーもやってくる。だがこうして主人公の葬式まで済ませたのに、最後の十一章がなぜつけ加えられたのか。この上何を語ればよいのか。表向きは、妻の死後廃人同様となったシャルルの気力尽きはたような死と、一人残された幼い娘ベルトの処遇である。少女はまず親戚の老女に預けられる。その時その家に行く交通費をどう工面したのか、細かく説明される。それは父の死後「家財のすべてが売却され」、差引き一二フラン七五サンチーム也が残った中から捻出したという。そんな些事まで詳しく語る必要があるのかという疑念は、おそらく作品全体を織りなす経済的論理の見落しに由来するだろう。哀れな父の死と最後に女工に出される少女の運命はその論理の帰結であり、その有りようを端的に語るのがこの差引き

の額なのだ。それにしてもやせて枯れても医者が死んでこの金額は少なすぎるが、その辺にもそうした動機の関与があるのだろう。最終章で、エンマの突然の死にまだ果然自失としている夫の身に、なにより「金銭問題」が容赦なく降りかかってくる。つまりこの章は終らない清算の行方を見るために付け加えられたのである。まずルルがヴァンサールの名を借りて改めて返済を迫る。しかしシャルルは妻の持ち物をひと品たりとも売る気がないので、また新たに法外な貸借契約に応じるといふ悪循環が再開される。この負債の件がもとで母との仲がまた拗れる一方、妻の死に「つけこむ」手合いが列をなして現われる。ルアン04のピアノの女先生はエンマが一度も受けたことのないレッスン料を半年分（たしか週一回 二〇フラン）、貸本屋は三年分の購読料を、以前ルドロフと親しかった時に恋文を運んだロレばあさんまでやってきてその手間賃を、それぞれ請求する〔36〕。シャルルは「借金を払うたびに、これで片がついたと思う」のだが、しかし「後から次々に別口が出て」くる〔同頁〕。そこで未払いの往診料を請求すると、それは実はエンマが取りたてた後の二度催促になる。しかも断ちがたい死者への愛着から、遅ればせながら彼女好みの軽薄な趣味に染まったシャルルは、エナメル靴をはき髭には化粧油を塗るといふ具合だから、銀器や家具を家がらんどうになるまで売り払うことになるが、これも妻譲りの約束手形の乱発先送りからそれで脱れられるはずもない〔36〕。節約をしても、「前々の負債を返済するどころではなく」、ルルは今度こそ手形の更新を断わり、またしても「差押えが迫って」くる有様なのだ〔36〕。母親が救いの手を差し伸べるが、結局怒らせてしまい、鰥夫は最後の金目のものである馬を市に売りに行き、そこで妻の愛人だったロドルフに会ってその翌日に死ぬ。生前ルルへの負債を返した気配はない。差押えの件はどうなったのだろうか。それに対する唯一の答が、「持ち物一切が売却され、後に二二フラン七五サンチームが残った」という巻末の一節なのだ。この売却が差押えによるのかただの家財の整理なのか明らかではないが、いずれにしてもこの残額はエンマの「大公夫

人」なみの鷹用な使いっぷりに始まるこれまでの長い借金その総決算であり、一二フラン七五サンチームを載せた秤のもう一方の皿にはエンマの愛が載っているのだらう。片のつかない負債の経緯を語るためにボヴァリー夫人の死後もテキストは終われなかったのだから、こうして無事返済が終れば独力で物語を跛行的に引きずっていた論理も閉じて、今度こそ語るべき何ものなくなり作品は自然と消滅する。ここでもやはり貸借の清算がやや遅れながらも作品の終結をたぐりよせるのだ。

『ボヴァリー夫人』は、物語プロットにおける愛と金との表裏一体の結合という点では『感情教育』と全く同一だと言える。どちらの女主人公も愛の帰結としての負債が清算できずに、身ぐるみ剥かれるように差押えをくって売立ての目にあう。前掲の通り、ボヴァリー家で差押え品目のリストが作成される時の反応は競売を見物にきた時の『感情教育』の主人公の感じ方によく似ている。フレデリックはアルヌー夫人が身につけた衣服、靴、下着がその値打ちを吟味する買い手たちの手から手へと渡され投げられるのを見て、「烏が夫人の死骸をずたずたに引裂いてでもいる」ような印象を受けるが〔*ibid.*〕、これは執達吏たちがボヴァリー家の台所の皿や鍋から寝室の飾りもの、さらに「彼女の衣裳、下着、化粧室を調べた」時、彼女の生活はこの男たちの視線の前にその最も内密な部分に到るまで「解剖される屍体のように」暴けだされたと感じる〔*ibid.*〕のと近い。さらに屋根裏に上った一行は、机をあけてルドルフの手紙を蔵つた箱を発見し、金目のものでも入ってないかと吟味する。「彼女はかつて心をときめかせた手紙の上に、ナメクジのようにぶよぶよした赤い指をした肉づきのよい手が乗るのを見ると、激しい怒りがこみあげてきた」〔*ibid.*〕。これも自分の「一番大切な思い出に結びついた」銀の小箱を競り落とすダンブルーズ夫人を、「死者の秘密はあばかぬものです」と制するもう一人の主人公の気持にたしかに通じている。だが両作品のこうした類似は、同時に二人の女性の相違をも際立たせている。あるいは『ボヴァリー夫人』の女主人公は、むし

ろ『感情教育』の主人公と一致している。『感情教育』は『ボヴァリー夫人』の主題の変奏ではないかと思えるほど愛と金の関係において符節が合うのだが、差押えに迫いこまれたエンマの身の振り方は同じ状況に置かれたアルヌー夫人とはむしろ対照的である。パリの夫人は甘い目つきで身売ると見せて青年から大金を手に入れ、返済しないこの借金のように臭さを咎めだてられるように財物の競売、つまりは身売りに掛けられる。ところがエンマは——シャルルとの結婚を除けば——いわば常に買う側、与える側なのだ。高級なスカーフやカーテンなどの贅沢品を買い、男に贈り物をし、情事のホテル代を払う。それに見合う財力が手元にないの買いにつづけ、借りにつづけたからこそ、窮地に陥って一転して身売りをするはめになるものの、しかし自殺は一步手前でその恥辱から彼女を救いだしている。差押えがただちに競売につながったのかどうか不明なのだが、彼女の「もつとも内密な生活」の売却も、それに苦痛を感じる当人がこの世にいなければ第三者に見えたとりの唯の商品販売である。とはいえ八、〇〇〇フランの債務履行をつきつけられ必死に金策に奔走するなかで、お門違いにもルルーの膝に思わず美しい手をのせてしまい、「色仕掛け」はごめんですと撥ねつけられるのはやむなく身売りの交渉に入ったとも言える。翌日おそらく町一番の財産家で、金貸しの朴念仁とは違っていわば花も実もある公証人に頭をさげた時は、彼女の一存で危急を脱することもできただろう。相手はいろいろ優しいことを言いながら美を理解できる人間として彼女の手をとって貧るように接吻し、こみあげる情欲に屈するように三、〇〇〇フランの融通に応じてくる。ところが魚心あれば水心とやがて袖に手を入れてくる公証人の喘ぎが頬に掛かるや、彼女はおぞましさに耐えがなくなる。激しく身を引離し、「愛しています」と懇願して引止める男に、人が困っているのに突けこむなど一喝する。「私は同情はされても、金で身売る女ではありません」。この言に嘘はないように思われる。三、〇〇〇フランの借金を申し入れる女と彼女を欲する男とが利害の調整をはかるこの交渉の場面は、アルヌー夫人がフレデリック

を一人で訪れて四、〇〇〇フランの借金の猶予を仲介してほしいと頼んだのと構図上ひとしいのだが、結果は反対である。交渉の進め方が公証人の方は性急だったし、いわゆるもて方の差もあるだろうが、何よりエンマはパリの商人の妻と違って市場社会を軽妙にあしらう手腕がまだなかった。国際金融都市のバリなら、欲情をさらけだして足下に這いつくばる財産家の鼻面を好機到来と引廻し、良いように大金をせしめる人材にこと欠かないだろうが、金の使い方を覚えだしたばかりのルオーの娘には、贅沢品でもなんでも金をだせば面白いようにそこを通してものが手元にやってくる市場は、しかしながらまだ中心的原理として骨の髄まで身につけていなかった。市場経済の論理が「人間生活のあらゆる分野に通用する一般法則であるかのような錯覚」に、彼女はまだ支配されていないのではないだろうか。まだ市場に乘らないものがあつて、愛はその筆頭をしめる。アルヌー、ダンブルーズさらにはあの永遠のカップルを初めとするパリの面々とはこの辺の出処進退がどうしても違ってくるのだ。愛が市場に乘るものだったら、エンマはここまで負債を増やすことはなかっただろう。というのはいわば採算を度外視した際限のない支出へと彼女を引きこんでいたのは愛が非市場的だったからである。過大な消費を呑みこんだ神聖なる愛の特権的祝祭性が、彼女にソロバンを弾くことを禁じていた。貸借の細かい配慮を超然と見下す「大公夫人」だからこそ純粹な愛の追求に専念できたのだ。やがて市場に引きだされるものが、ここではまだ価格がつけられない高貴なものとして一時の特権を享受している。しかし迫りくる平準化の不安を前にしてだろう、愛は宗教の非合理や身分の特権とひそかに交流している。彼女の宗教教育における神への無限の愛と非日常的な貴族の世界の一瞥は、ロマン派譲りの日常を見下した愛の観念性を背後から支えていたと思われる。非日常だからこそ価値のある愛の崇拜は、初めから貸借の経済的生活を超越していなければならなかった。同じ愛と金の緊密な関係を論理としながらも、こちらでは愛が市場外の特権存在であるために返って非日常的な消費を招いていたのである。

二章 スクルージの罪

『ボヴァリー夫人』（一八五二年—五六年執筆）は地方における市場経済の緩慢な滲透の初期の過程と対応し、『感情教育』（一八六九年出版）は題材となる四〇年代の表現である以上に、産業振興策が大いに実を結んだ第二帝政期最後の、それもバリというフランスでも文化、経済において最先端を行く都市での新たな生き方と関わっていると思われる。薬剤師オメは最後に「身売り節を折って」共和派から権力に寝返って家は富みさかえる気配なのだが、作品の最後で得られたこの人生訓は、『感情教育』ではデュサルディエを別にしてほぼ全員が抱つてたつ倫理的基盤となっている。おそらく倫理を決定するのは宗教でも哲学でもなく、旧体制を押しつけたブルジョワジーの経済の都合である。もつとも経済の支配は時代や種を越えているだろう。生活ができなければプライドを捨てて状況に従うし、生活が保証されれば自己の自由をできるだけ主張するのは動物全般に共通する行動の作法である。たとえば仲間と顔を会わせることを極立回避する単独行動型の猫でさえ、食料が確保されれば（ゴミ捨て場）、あるいはそれが食料獲得の有効な手段となれば（ネコおばさん）、その高貴な本性を捨てて一種の集団社会を受け入れるのに吝かではないという。本性とは餌を得る経済手段が社会や自然が一定期間安定していたためにそれへの適応を恒久的なものと考えるにいたつた錯覚の産物である。社会と共に経済手段が変れば、本性でも道徳でもそれに合わせて形成されたのだから変らざるをえない。生きることが強いていえば生きるものの唯一の本性だからである。ブルジョワジーの抬頭はこの経済の力を露わにしたにすぎない。それまで社会を支配していた僧侶も王侯も彼らの金・銀への偏愛によってまさるとも劣らぬ経済への信仰ぶりを示していたのだが、彼らの支配が長く続いて形式化したためにその性格が曖昧になった。例えば彼らの所有する衣服、家具調度、建物、装飾品に惜し気なく

使われる金・銀は誰もが珍重する富ではなく、その高貴さの表現として精神化されている。神も血筋も語れぬブルジョワジーは財力以外に社会的權威を保証するものではなく、レトリックでそれを隠す余裕もなかった。いずれにしてもそれまでの權威の失墜と新たな支配層の抬頭は倫理的混亂をひきおこさずにはいない。市場經濟確立期の急激な經濟の変動は旧來の社会・文化、とくにまず人間關係の破壊を招く。人々は主義主張に関わりなくその変化に合わせた生き方を探らざるをえないからである。二作品の作者がこの変化にきわめて敏感だったことは、なによりその姦通物語のいずれもが經濟的構造を展開の重要な契機として、そこから窺える。作者が經濟力の誇示による社會の支配に対してどんな立場をとっていたのか、その文体から言つて直接に語られることはないが、書簡で折にふれて洩らす何かにつけて身売りしたがる「淫売」的時勢への嫌惡を持ちだすまでもなく、苛立たしい冷眼をそこに向けていたことは、それに翻弄される人物の皮肉な描写を通してありありと感じられる。しかしそれはみずからブルジョワジーの一員であり続けた人間が、まさにそのお陰で持てた人道主義や上品な趣味を傷つけられて憤慨するということ以上であつたとは思えない。彼の階級に有利なこの変化を受けいれざるをえないことへの、芸術家としてそこから少しずれた者の苦渋とエリート的自己確認の表現ではないだろうか。それは要するにシニクな受容なのである。こうした經濟支配への抵抗は、時代が變つてもとりわけ弱者の中に、しばしば人道主義の名において、いつまでも燦り続けるだろう。半世紀後、O・ミルボ『仕事は仕事』（一九〇三年）の主人公、俗惡な資本家ルシャは、万資金で解決するそのあこぎな遣り口のために世間の非難を浴び、家庭でも反感を買っている。折しも彼は二つの事業を進めているが、一つは隣家の侯爵との政略結婚で、貴族が多額の負債で先祖の土地を手離そうとしているのに突けこんで、返済を肩代りすると交換にその息子と自分の娘との結婚を提案する。初めは「あんたはこの私を金で買う気か！」〔20〕と憤慨していた誇り高い貴族の矜持も、ルシャがこれはビジネスで、ビジネスと

は「持っているものを持たないもの」と「交換」する五分五分の、何ら名誉など汚すことのない交渉なのだと相手の体裁を調べてやる一方で「同頁」、地位も名誉も土地も愛も才能も、万事金次第の世の移り変わりに眼を開かせて相手の氣持をぐらつかせたうえで、さらに他の借金も引受けるしお小遣いを二〇万フランほど差しあげますともう一押しするとあつけなく崩れる。ところが親の言いなりになると思つた肝心の娘が、すでに未来を誓つた男がいる上に、第一そういう他人の感情を顧ない父のやり方に日頃から不満を募らせ反抗していたのだから、首をたてに振るはずもなく決然と父の家を出る。思いがけない逆襲に遭つて愕然としている実業家に、娘に同調した妻の家出、従順だつた息子の事故死の知らせと不幸が追討ちが掛けてくる。「わしは何もかも失つた、一日で、何もかも！」と彼は身も世もなく泣きぐずれる〔280〕。そこに、もう一つの事業である電力開発の推進に關してそれを持ちかけた二人の技師が来て契約書の署名を迫る。ルシャは落胆で力が抜け、手はふるえ声もろくに出不い有様なのだが、にも拘わらずただちに契約書の不備を冷静、適確に見抜き、彼らに訂正と署名をさせると、実業家としての有能ぶりに啞然とする二人を残して部屋を出ていく。どうやら技師たちはあわよくば金持ちを手玉にとるつもりでいたのが逆に裏をかかれた恰好で、この最後の場面においてルシャは強引な策略で金を儲ける悪徳資本家から、個人的不幸にめぐることなく「仕事は仕事」と敢然と公益事業に挑む英雄的人物像へと肯定的な転換をとげているようだ。金で買えないものはないと豪語する粗野で悪趣味な市場主義優越への批判よりも、悲壯な風格さえ滲ませる彼の徹底したビジネス精神への賛嘆の念の方が勝っている。彼が家族の不幸にもろくも泣きぐずれる、どこか憎めない様子には作者の共感さえ感じられるし、侯爵の頬を札束で張つて娘との結婚の取引きをする場面でも、昔の権力にしがみついて立派なことを言う相手が結局は新しい權威の前にそう面倒をとらせずに屈服するまでのその態度の変化の方がむしろ見せどころと言うべきだろう。だからといって社会は新しい英雄像を資本家に見ようとしてい

るのだとは直ちに言えない。フロベールとの径庭は作者の思想的——だから文学的な——相違に帰すべき点の方が多くように思われる。だがそれにしても時代の推移を認めないわけにはいかない。いわば背後に隠れていたルルーがここでは表舞台の英雄Ⅱ主人公になりかけており、今は「この身を売られるよりあげた方がまし」とうそぶく娘もこの針のふれ方を見ると、やはり父は偉かった、一本筋が通っていたなどとやがて風向きが変らないとも限らない。娘の愛をビジネスとして堂々と売りこむ彼の姿には例の青年と違ってみちんも愧じる気色はないし、ルルーの後暗いメフィストフェレス的な誘惑者の影も帯びていない。市場主義、そして資本主義草創期の抵抗は過去のものになったということだろうか。ではフロベールと同時代のロンドンではそうした変化はどう受けとめられていたのか、つまり社会の一部だった経済システムが社会の他の要素を決定するほど強力になり、「社会が経済システムに埋没する」までの過程において、当然それに反撥する伝統的価値との関係はどのようなだったのか。ディケンズの『クリスマス・キャロル』（一六四三年）を通しておよその事情の一端を窺うことができる。これは簡単に言えば、経済原則に盲従して人間性を失った金融業者が幽霊の見える「幻影のお陰でおのれの非を悟って良い人間になる」話である。主人公のスクルージは脇目もふらず仕事一筋に励む冷たい吝嗇漢で、今日も世間がクリスマス・イヴで浮かれ騒いでいるというのに金勘定に余念なく、いつものようにひとり陰気な夕食を取って帰宅する。ところがそんな彼を今晩は前の共同経営者で数年前に死んだマレーイの幽霊が出迎える。マレーイは腰に「銭箱、鍵、錠前、台帳、証券、鋼鉄製の重い財布」でできた鎖を巻きつけており、生前の報いでそれを下げて世界をさまよい歩かねばならないのだと打明ける（知り合いの別の幽霊は足首に「とてつもなく大きい鉄の金庫」をつけて歩き廻っている）。死んだ友人は脅えるスクルージに、お前にも同じ運命が待っているが、ただし今晩三つの靈魂の訪れを受けいれるならそれを避ける望みがあるだろうと忠告する。やがて第一の（過去のクリスマス）の幽霊が現われ、

スクルージに少年時代に始まる彼のクリスマスの諸情景、一人残された寄宿舎からの妹との嬉しい帰宅、卸問屋で働いていた時主人が催した陽気な舞踏会、愛する女性との婚約の解消（彼女は金儲けの情熱しか持てなくなった彼に愛想がつきたのだ）、さらにその女性が他の男性と築いた子沢山の楽しい家庭などを目の当たりに見せる。次に「現在のクリスマス」の幽霊がやってくる。この靈魂は、陽気な浮きうきした気分あふれるクリスマスの町の中を連れ歩いた後、ヘスクルージとマレーイ商会の事務員ボブの家庭に入って、その六人の家族が父親のきわめて低い収入にも拘わらず、お互いに気遣い感謝しあつて、いかに幸福に今日のクリスマスの祝いを迎えるかをかい間見せる。薄給しか出さないスクルージは、この一家では鬼扱いされているのだが、にも拘わらず彼は心優しくも身体の弱いボブの末息子の子行末を心配する。次に連れていかれるのは、昼間クリスマスの食事を招待にきたのにすげなく追いついた甥の家庭で、甥は美しい妻に、叔父さんはいくら財産があつてもそれを使う楽しみを知らない気の毒な人だと批判する。

最後のヘ未来のクリスマス」の幽霊は、スクルージをある男の死んだ枕元に連れていく。その男は生前しみったれの業突くばりで、親しい友人をつくらず、「まとも」な人間ではなかった、つまり「暖かく優しく人間らしく」していなかったために誰にも愛されず、こうして死んでも唯一人悲しむものも見守るものもない。それどころか「天罰」として死の床からカーテンや毛布などその身ぐるみ剥がされたうえ泥棒市でたたき売られる始末なのだ。だがかくもむごたらしい死を迎えたこの哀れな男はなにものなのか。靈魂にある墓石の前に連れていかれたスクルージは、墓標に他でもない自分自身の名前を発見する。わが身の行末がすっかり恐ろしくなつた彼は、「慈悲深い靈魂」に今後心を入れかえますからどうかこんな目にだけは遭いませぬようにと泣いて懇願する。翌朝目覚めたスクルージは、すっかりよい心がけの人間になっている。あの世の救済も掛っているだけに、何十年来ニコリとした

ことのない人間が別人のようになにかと笑いころげ、事務員のボブに特大の七面鳥をプレゼントし（それも馬車で届けさせる）、前日断わったクリスマスの募金に多額の寄付を申し出、やはり見向きもしなかった甥の招待に応じて大歓迎を受け、出勤したボブを「クリスマスおめでとう」と言つて出迎え、給料の値上げを提案する。彼は一晩で「よい友だち、よい主人、よい人間」へと変貌するのだ。

無駄使いも贅沢もせずひたすら利潤追求に走つて他には全く関心を抱かない謹厳実直な金貸しが、周囲から余り愛されないのは判る。だが職務に忠実で熱心で（彼は夕食をとる居酒屋ですべての新聞に目を通す！）少しも怠惰なところがないからといって、どうして非難されねばならないのか。たしかに合理的な、つまり経済原則に自分を適合させた人間というのは貪欲だの冷たいだのという陰口を覚悟しなければならないが、それにしても世が世であれば尊敬すべき理想的人間にも収まりかねないスクルージが、どうして金庫、錢箱、鍵、台帳を巻きつけられたマレーヤや同業者たちの悲惨にも滑稽な地獄の責め苦に値するほどの悪人なのだろうか。スクルージは周囲から非難され鬼とさえ呼ばれるが、それは一体どんな罪を冒したからなのか。共同経営者のマレーヤは例の鎖を引きずつて「休息も安心もなく悔恨に苛まれて」さまよう劫罰を受けるのだから、彼も金儲けが罰せられているとひとまずは考えられる。しかしよく見ると告発の矛先はそういう利潤の追求に絡むとしても、決してそれ自体ではない。一晩あけて真人間になったスクルージは、だからといって店を畳もうとするわけではない。この点で着目すべきはクリスマス・イヴの恐ろしい体験で改心したという彼がその時何をしたかである。それによつて彼に重く圧しかつた劫罪の脅威が取除かれたのだから、彼の罪状はそこに自ずから明らかになるはずだ。恐ろしい一夜が明けてクリスマスが終つていないのを喜んだスクルージは、まず鳥肉屋で特大、最上等の七面鳥を買わせボブに馬車で届けさせる。次に前日断わったクリスマスの募金に多額の寄付を申し出、甥を訪問して共にクリスマスの食事をとり、食

しいボブに給料の値上げを慎ましかに申しでる。善行の殆ど全てがクリスマスのお祝いに関わっているのである。給料値上げだけが例外といえるが、その動機は自分を鬼呼ばわりするボブ一家の幸福だが貪しいお祝いの食事を目撃したことにあるし、「クリスマスおめでとうー!」と言って、今年のクリスマスは特別に楽しいクリスマスだから「君の給料をあげて、家族の生活も少し楽にしてあげよう」、くわしくは後でクリスマスの祝い酒でもやりながら、と切り出す呼吸は、労働条件の改善もお祝いの一環としてであることを告げている。簡単にいえば、彼が「良い友、良い主人、良い人間」となるのは、どうやらクリスマスが世間並みに祝えるかどうかにかかっている。それは前日彼が冒した所業と正確に対応している。凍えそうな寒さなのに余り火をたかせず、クリスマスおめでとうと言って訪れた甥を「ふん、ばかばかしい」と冷嘲し、ビジネスに休みはないとうそぶいていた。たとえ金儲けにならなくても、クリスマスは一年の長い暦の中でも特別な日で、誰もが固く閉ざしていた心を開くのです、と道理を説いて食事の招待を申しでる甥を剣もほろろに追払う。だから翌日のクリスマスの休みをおそれる願いでるボブも、徒働きに金を払わねばならんのかと邪険にあしらっていたのだ。以上が彼が前日したことのほぼ全てであり、従って彼が冒した罪のほぼ全てだということになるだろう。つまりクリスマスを人並みに祝わなかったこと、それこそがスクルージの冒した地獄堕ちにも値する大罪だったのである。

クリスマスはスクルージ以外の人物にとって甥がいうように特別な日である。町の人々は、もめごとが生じても、「クリスマスの日に喧嘩なんかしちゃ恥ずかしいよ」〔88〕と言いいい、遠い海の船員たちも「今日ばかりは、一年の他のどの日よりもお互いにやさしい言葉をかけあう」〔66〕のだ。だがなぜこの日は特別なのか。キリスト教徒にとってキリスト生誕の祝いは当然大きな意味を持つだろうが、しかしもはや宗教的理由はここではあまり重視されていない。甥は「クリスマスって良いなあ」と思う理由としてキリストの生誕日ということを一に挙げる

が、しかし「それとは別に」これは素敵な一日なのだ、と主張している。なぜならそれは「人に親切にし、人を許し、人に情けをかける楽しい時」(二〇)だからである。これは船乗りたちがクリスマスを特別視する前掲の理由と重なっているだろう。それはこう続いていた、「めいめい気持は違っても、クリスマスの喜びを分かちあい、遠く離れたいたい人たちの思いだし、その人たちも自分たちのことを思いだして喜ぶ」一日なのだ(二〇)。クリスマスが大切なのは単にキリスト教の行事だからではなく、人々がこの日に人間としてお互いに親しく交流できるからなのだ。たしかに心を入れかえたスクルージは前日とは打って変って「クリスマスおめでとう！」を連発するのだが、だからといって信仰篤くなった老人は以後教会にたびたび通うようになりましたなどは一言も書かれていない。むしろ宗教とはもはや無縁になった気前の良さが賞賛されている。スクルージはどうかやらクリスマスのこの辺りのタブーにふれてしまったのである。人々に嫌われ怒りを買ひ、どう見ても異教的な三人の亡霊に後生を脅される。だがそれは正確には何の罪だと言えはよいのか。

世界に先駆けて十八世紀後半にイギリスで勃興した産業革命はこの国を最も富める強国にまず仕立てたが、それは市場経済を促進させ、産業ブルジョワジーの基盤を強固にする一方で、一般庶民とくにエンクロージャなどによつて都市に流入し、しばしば労働者としてその下支えとなった下層階級との貧富の格差をさらに押し拡げた。その弊害は貧民窟をはじめとする都市問題として世紀末に論じられるが、それまでの共同社会的紐帯の消滅による社会の混乱こそなによりも問題だったように思われる。農村を追われて長い間教会を中心に形成された生活とその慣習から切り離された旧農民たち、利潤追求の競争にあつて相互の協力よりも敵対に傾く産業ブルジョワたち（資本家、金融業者、商人）、こうした新たな都市の住民たちを結びつけるのは利害の一致以外にはもはやないのだが、まさに貧富の差は——対外戦争でも起きないかぎり——それを難しくしている。第二のフランス革命を惹起しかね

ない不穏な気配が醸しだされ、有産階級に不安を与えていただろう。いわゆる禁酒運動は、バブに苦しい生活の憩いを求める労働者たちが政治的に団結することへの彼らの恐れに発すると言われる。新たな共同社会的な紐帯の形成が、とりわけ富めるものにとって自衛上急務となっていたのだ。

デイクENZがスクルージの甥に宣言させた「クリスマス精神」とはこの課題に答えようとするものだったように思われる。この考えは産業革命に促され、急激な拡充を見た市場経済の権威を背景に全てを金勘定で律する利益社会的原則への反撥から、まだ教会が権威を握っていたそれ以前の社会を「古き良き世界」〔95〕として理想化して、それを再建することで、まるでそこでは何もかもうまく行っていたかのように全ての人つまり貧富上下の対立関係のある人が和解しあえる共通の場を作りだそうとしているように思われる。クリスマスなら、伝統的共同体の精神的、地縁的核をなしていたキリスト教の権威、および娯楽の少なかった冬の農村で人々が共に喜びをわかちあえるその祭事の特権性において、たしかにそういう幻想をノスタルジーとして掻きたてる力はあったに違いない。とりわけこれは全国民共有の祝祭なのだから、それを祝うのに富者と貧者、主人と使用人の区別はない。クリスマスは「固く閉ざしていた心をすっかり開いて」、「自分より下にいると思っていた人たちも」同じ墓場に向う旅の同伴者、つまり金持ちも貧乏人も同じ人間であることを自覚する「すばらしい時」なのだ、甥が本来のキリスト教祭事からやはり少々逸脱したクリスマス精神なるものを主張した理由はそこにあるだろう〔96〕。ところがクリスマスを足掛りに共同体モラルの建設を模索していたまさにこの時に、ある金持ちがそれを頭から否定してしまつた、それがスクルージの罪なのである。金持ちでなければ罪とはならなかったらう。このモラルは誰もがそれを通して同じ共同体への帰属を自覚しうるような一般的なモラルなどではなく、社会不安の行末を懸念する有産階級の意向を体して、持たざる者の不満が秩序の転覆へと暴発するのを避ける宥和策だったからだ。クリスマスを蔑視し

て、甥のお祝いに応じるどころかあくまでも冷やかに招きを撥ねつけ、紳士たちのクリスマスの寄付を断わり、事務員にクリスマス休みを出し渋ったことにスクールジが悪の烙印を押される理由がある。彼は浮かれ騒ぐ甥への一喝を通して、実は人間は身分の上下や貧富の差をこえて誰でも同じ人間だという、おそらく一八世紀後半の一連の人権宣言以降概念としては定着していたろう平等思想を突っぱねてしまったのだ。これは「下にいる」者には、お前たちと同じ祝いの盃に口をつけるのは御免だという特権の誇示である。そのうえに寄付を断わった。これは「現在苦しみあえぐ、貧しく見捨てられた多くの人々」に、「食べもの飲みもの着るもの」を買って与えるための資金集めであり、ある意味でこの愛の慈善事業は、急激な市場経済による貧富の差をはじめとする諸予盾を、構造には手をつけずに犠牲者の慰撫によって一時的に固塗して秩序の転覆を誘発しないための方法である。また彼がボブにクリスマス休暇を渋ったのは一日分の給与のただ取りという合理的な理由によるが、劣悪な生活しか許さない低賃金に加えてのこの弱者への無理解は、雇われる者の団結が進めば搾取として直ちに吊しあげをくうていの暴言だが、要するにそこには無反省に経済的特権にあぐらを掻いた富者の非人間性がさらけだされている。人間ないし人権の平等性を精神的にも実質的にも否認して対立を明確にした挑発的な態度は、彼を弱者の仇敵として指弾させるのに充分である。冷酷な吝嗇家とか鬼という非難はこの反「クリスマス精神」的な態度に向けられているのだ。だからスクールジの言動にもっとも困惑したのは、人間は皆同じで今日だけは互いに仲良くすべしというクリスマス精神を標榜する甥や募金活動に走る紳士、つまりスクールジと社会的に立場を同じくする強者の側である。彼の軽率な態度はこの精神のからくりを暴きかねないからだ。共同経営者だったマーレイの幽霊がああ珍妙な恰好で登場してそんな友の行過ぎを諫めたのは、まさに持てる者の代表としてではなかっただろうか。冬の雪も齒がたたぬ冷酷無慈悲な男、がりがりの業突くばりと後ろ指をさされても一向痛痒を感じない人間に、非を悟らせるには少々荒

療治が必要になったのだ。しかし彼がその再教育によって体得したクリスマス精神とは結局金持ちが貧者のそしりを招くことなく特権を享受していけるダンブルズ流の世渡りの術なのであり、彼らが皆身につけることを期待された階級的な心得の一つだったとも言える。「クリスマス」の何たるかを本当に知る人がいるなら、それはスクール・ジ」とまで言われるようになればしめたものだ。その富に牙を剥かれる心配もなく、同類も枕を高くして眠れる。

そういう意味で『クリスマス・キャロル』の作者は強者の側に立って問題の解決をはかうとしたといえる。ところで主人公の非人間性の描写はいつの時代にもいる守銭奴の伝統的滑稽化の流れを汲むが、その捉え方は経済的転換による衝撃の深刻さを伝えている。それはまずクリスマス精神という掛け声そのものに蓋いがたく表われる。スクール・ジとの対比で理想的善人の気配を帯びる甥は、人に親切にし、人を許し、人に情けをかける「楽しい時」とクリスマスを賛美するが、では他の日はどうなのか。この祭日だけはと繰返されるこの一日の特別性の強調は、それが終れば元通り、「すっかり開いた」心を再び「固く閉ざす」日常の日々が始まることを示唆しうる。クリスマス以外は親切でも慈悲深くなくてもよいとまでは言っていないが、この日に善行を施せば残る一年間の多少の行きすぎは大目に見る、という免罪特権の気配が感じられなくもない。極端に言えば、「クリスマス」の何たるかを本当に知る「人」、スクール・ジはこの日に寄付と贈り物と祝言を出し惜しみしなければ、それをお墨付きに他の日はたとえこれまでに以上に金勘定に精励しても一向に構わないのではあるまいか。彼には大変好都合なこのクリスマス精神の提案は、しかしながらたんに有産階級の意向にそった人目を欺く深謀というより、状況に押されての諦念に立つ妥協だったようにも思われる。それほどに市場の論理が人道的なもの（これも拵えた概念なのだろうが）組みまきつつ世の覇権を握ってしまい、弊害はあってもその不可逆的な発展を妨げることは今や進歩の大道に水をさすこと、人類の幸福に異を唱えることになっていたのではないか。市場経済で巨万の富を得ていた人たちが社会の舵を

直接、間接に握ることができる以上、この趨勢に抗することは難しくなっていた。その難しさが、社会不安を視野に入れての、せめてもの例外的なクリスマスMASの善行による和解の提案となつたのかもしれない。ちなみにこれは実効性としてはリップ・サーヴィスに近いものだが、しかしそこから作品が説得力——いいかえれば文学の惑わしの力——を抽きだしているのも事実である。スクルージの金への執着を嘲弄しグロテスクに描くほど、そしてその彼を一種の地獄堕ちによつて厳しく弾劾するほど、最後の改心は、その人道主義が人の心に訴えるかぎり、彼をスクープゴートに仕立てた有産階級との和解を想像的に達成する効力をもつ。

クリスマスが一瞬成功したかに見える「古き良き世界」という伝統的共同体の復権は、したがつて弱々しい幻想でしかない。そういう絆は永遠に過去のものなのである。おそらくスクルージを真人間にすると、生きた人間にはなしえなかつたことが、亡霊たちの活躍ではじめてなしとげられた理由もそこにあるのかもしれない。死後七年経つて姿を現わしたマーレイは、「お前はだれだ？」という元同僚の質問に「だれ、だつたと聞いてくれ」と過去時制にこだわる。また彼の予告した三人の幽霊はそれぞれに現実生活のひと齣をかい間見せるが、そこにみずから介入することはできない。亡霊とは、すでに過去の滅びた世界に属する、したがつて生きた現実の動きにはなすべを知らぬ無力な存在なのだ。それは彼らの擁護する「古き良き世界」の非現実性と見合っている。さらにそれは彼らが幻視させたものに恐れおののいてこの世界への帰属を表明することになつたスクルージの改心を胡散臭いものにしてゐる。これはもはや押しとどめがたいある勢いにせめても施した弱々しい飾りなのだ。そういえば主人公と対比をなすボブや甥たちは幸福な家族の姿を身をもつて提示するのだが、そういう家族同士を結びつける共同体の紐帯となると、せいぜい親切にしようといった観念的なスローガンをあげるだけで、募金の紳士を除けば何ら実践的な行動をとるには致つていない。

フランスよりも進んでいたはずの市場経済がイギリスの社会にひきおこした影響の度合をそれによつて直ちに計測できるというわけではないだろう。唯フロベールが所詮これは人間の性というモラリスト風な極度のシニスムにおいて受けいれる市場の論理は、ここではそれを戯画的に体现したスクルージを通して世の指弾をいっせいに浴びており、人間関係の論理としてはまだ許容されていないらしいことが窺える。それが二人の作家の個人的な資質によるものか、王をギロチンに掛けて最高權威を否定した国とそうでない王国との平等思想観の相違によるのかは不明である。たしかにここにも主人公の売立て台は登場する。彼は死の床にありながら生前仁少なくて見守る友も親戚もなく、お陰で身の廻りの品を剥ぎとられて闇市でたたき売られる。泥棒たちによればこの人物は大金を稼ぎながら同胞との人間的な交流を怠った報いとして死んで身売る廻りあわせに陥つたのだが、しかし経済スクルージを罰して懲らしめるその姿勢は、パリでアルヌー夫人を売ろうとしたあの辛辣さとは無縁に思われる。だから当然愛と金の等価関係もここでは許容されておらず、そんなことを言いだせば皆の憤激を買うだろう。愛は売り買いになじまないし、それどころか両者は真向から対立してさえいる。若い頃スクルージは美しい女性と婚約していたのだが、ある日彼女からそれを破棄してほしいと言いわたされる。なぜなら彼は崇拜する偶像をいつしか彼女から黄金に変えてしまい、損得勘定でしかものごとを考えなくなつた彼は持参金のない彼女を妻に選ばざきつと後悔するだろうからである。甥が招待に来た時も、「どうして結婚なんかしたんだ！」と気が知れないという調子でたずね、彼女が「好きだ」からですと答えると、クリスマスおめでとうと言われた時以上に腹を立てていたのだ。彼の独身も経済至上主義の帰結のようなのである。なおここでは愛が結婚といささかも矛盾しないのだが、女性にとつて真の愛は不倫にしか根をはらないらしい隣国から眺めるとこれもやはり驚くべきことに思える。こちらではだから甥、ボブ、昔の婚約者のどの家族でも、異性への愛はそのまま配偶者への愛、子供たちへの愛、家族の愛へとつ

ながあるのであり、これはさぞかし妻と子を愛したシャルルを羨ましがらせたに違いない。

三章 女殺しの嫌疑

フロベールとディケンズが経済的変化を迎える態度には明らかに相違があり、それは文学上の重要な問題、たとえば文体の問題と関連している。だがそれはフロベールがスクルージに注がれた非難を共有していないという意味ではない。『感情教育』の登場人物たちは売買の厳正な清算を追求することでアルヌー夫人を市場で売らせ、そしてこの売却には夫人殺害の影が濃く差していた。そこに彼女を差押えに追いこんで満足したに違いない迫害者たちと作者とのずれが見えてくる。死に致らしめるものという認識は作者がこの経済的進展を否定的に捉えているからであり、ただそれがディケンズのように、人道主義を押し立てての勸善懲惡的図式化には収まらなかっただけだとひとまず言えそうだ。しかしそれだけなのだろうか。エンマも、パリの夫人とは異なる仕方だが、市場での売却へと追いつめられみずから生命を絶った。二人の女主人公のよく似た死の運命は、それ自体で作家の何かを語っているように思われる。そこには単に發展著しい市場経済の非人道性を指弾する意図にのみ起因するのではない、別の欲求が顔を覗かせているのではないか。しかし尻尾を掴まえにくい作家よりも登場人物に話を移そう。アルヌー夫人の売却を最も悲しんでいるかに思われたフレデリックは、それが一五、〇〇〇フランを貸した時の暗黙の契約に叶う以上実はこの売却の最大の受益者であり、そこに含意される彼女の死も、だから彼が願っていたことになるのだが、しかしそうだとするとこの奇妙な願望はどこから生れてきたのか。

女性殺しの願望は、決して特殊なものではなく有史以来随所で出くわすのだが、しかし一九世紀半ばこの頃なりに傾斜を強めていたのかもしれない。『ボヴァリー夫人』の女主人公が服毒自殺をとげるのは、いわゆる毒婦が自

から冒した悪業の数々を死でもって償うという型に収まりうる。瀕死の床で司祭の差出す十字架のキリスト像に「生涯で最も熱い愛の接吻」をするのも姦通の罪を悔い改める表現にもとれる。またそれまでも「姦通の罰と代償」[271]の意思が彼女に全くなかったわけでもない。そういう意味では死は処罰であるが、では正確にはどういう罪を彼女は冒したことになるのだろうか。もし八、〇〇〇フランの負債を切りぬけて、そして新たな借金に依る人物が現われていれば、彼女は夫への遠慮などなしにさぞかし次の愛を見出そうとしたのではないだろうか。死はこの欲望を挫いたわけだから、いうまでもなく彼女の罪とは夫へのいわゆる貞操の違反である。ところが夫シャルルのどこを見ても妻の姦通への懲罰の意志などみぢんもない。もちろんそんなことはつゆ知らなかったのだが、知っていても毅然たる態度で妻に望んでいただろうか。妻の死後不倫関係によりやく気付いたロドルフに会った時のあまりにも穏やかな当てこすりと翌日の頓死から見ても、そうは考えにくい。妻を愛してやまない善良な夫が望まないのだから、では彼女の死は誰かによる処罰ではなく、単に金銭的もつれに足をとられた自業自得ではないのか。しかし悪女天罰をうけるという物語パターンを離れて彼女が自殺するまでの経緯を見直してみると、そこにはアルヌー夫人の迫害とよく似た集团的陰謀のようなものが浮かびあがって来ないでもないのだ。もともとそれを一瞬の錯覚以上のものではないと言いきることは難しい。というのはその誰一人としてエンマの処罰はもちろん死を願った形跡すらないにひとしいからである。ルルーは資本形成に邁進しているのだから、いくら彼女を食いのにしても死なせる必要は少しもない。むしろ生きていれば商売の縁がまたつながらないでもないのだ。しかしそれならばなぜいきなり手品のように巨額の負債を喉元に突きつけて、心構えのない客を進退きわませたのか。もちろんそこにはかりごとがあつたというのは飛んでもない言掛りでしかないだろう。では薬剤師オメはどうなのか。彼はルルーとは活躍の分野は違つても（商業と薬学）、ともに唯物論の信奉者である。物質神の経済的側

面が金だとすれば、人間を機械とみなしてその働きを物質によって調節しうることを疑わない彼の科学万能主義は同じ神の別の顔であろう。エンマは、ロドルフが駆落ちの約束を破ったことを知り、落胆のあまり夫に食卓に連れたいかれるが食べものが喉を通らない。親切な夫は美味だからとアンズを彼女の鼻に押しつける。すると一人逃げだすロドルフの馬車が窓の外を駆けぬけ、彼女はたまりかねて仰向けに倒れる。失神の原因は何なのか？ この時オメは、珍らしいことだがアンズの匂いがそれを惹きおこした可能性があると診立て、これは病理学的にも生理学的にも絶好の研究テーマだと付けくわえる。ルルーの事務机に匹敵する場がオメにもある。それは彼の屋根裏の物置である。彼の丸薬や水薬は、仕事の道具や薬品がいっぱいに置かれたこの場所で調査されるのだから、「彼の名声を近隣に拡める」発信地として彼が大切にするのは当然である。しかしそれは経済上の理由からではない。多分帳簿などにはここにはないだろう。彼がここへ人の足を踏み入れさせまいとするのは、そこが神のように人間を思うままに操作しうる驚くべき物質を安置した「文字通りの神殿」だからである。エンマを失神させた匂い物質もその祭壇のどこかにいつか登場することだろう。しかしその中央を占めるのはやはり人の死命を制する種の物質である。薬剤師は奉公人の少年ジュスタンが間違えてこの物置きに鍋を取りに入っただのを知って、その「恐るべき不敬行為」を烈火のごとく罵倒する。そこには酸、苛性アルカリ、また特別の蓋つきなべなどが置かれていることを神の偉大さを讃える敬虔な信徒の誇りをもって列挙した後、ところでお前は白い粉の入った青いガラス瓶を見たのではないかと問いたです。この時の彼は得意の絶頂にあると言つてよい。相手が見てはいないと言うのも構わず、その瓶に《危険》と書いておいたが、それにお前はさわろうとしたのだぞ、お前はわれわれを皆殺しにしかねなかったのだぞ、と脅す。この主祭壇の神こそ後に危機に陥ったエンマが救いを求めるものだが、どうしてその秘中の秘を彼女は知ったのだろうか。エンマはルアンの逢引きから戻った時、すぐ来てほしいというオメの伝言を受けと

る。行ってみるとこの騒ぎの最中だったのだ。お陰で「白い粉」の威力もそのガラス瓶の位置も残らず聞いてしまう。これは偶然の成行きだったのであり、底意があつたわけではない。どうみても薬剤師が彼女にいずれ役に立つからと、神殿の毒物の効用やありかを教えたというわけにはいかない。だが彼女をわざわざ呼んだ急用とは何だったのか。それはオメの個人的用事ではなく、彼女の舅の突然の死を告げるためである。何も他人を巻きこまなくても夫が一言いえばそれで足りただろうに、なぜこんな廻りくどいやり方をしたのか。繊細な妻にこの辛い報せをいかに苦しみを与えずに伝えるかを考えた夫シャルルの配慮からだったという。優しすぎる夫のお陰でエンマは毒薬の情報を入手したことになる。だからといってこの医師の善意を疑うことはさらに難しいだろう。ただ彼なりの聖域というべき診察室に骨相学用の髑髏が飾られているのが気にならないでもない。ここで人間を動物機械として捉える近代医学と、頭蓋骨の形で性格や能力を振り分ける骨相学という二つの物質の学が死の支配の下に交わっているのが、薬屋の神聖な殿堂に鎮座する砒素の威光と通じているように思われるからだ。もともと医師と薬剤師（それも闇で医療も兼業する）とは五〇歩百歩の間柄で、シャルルが信念を頑固に押し込めたら隣人と同じ旗幟が診察室にひるがえっていただろう。なおルールの告発でエンマの財物を「死体解剖」に來た執達吏は、職業上のものとしてこの髑髏を目録から外すのはどういう好意だったのだろうか。いずれにしても髑髏のうつろな死の視線がその家で起きたことを逐一見守つてはいたわけである。

もつともこれではわれわれの嫌疑は濡れ衣を着せることにしかならない。角度を少し変えてみよう。人妻を自殺に追いこんだ負債の原因は不義の愛にあるが、当時のもの堅い地方の中流家庭でこうした愛が簡単に成立したのだろうか。そんな願望の実現はよほどの幸運を必要としたに違いない。医師がトストを離れる決心したのはエンマの神経の病気を転地療法で直せると期待したからだが、しかしこの病氣はヨンヴィルでも快癒しない。レオンの出

発後に気まぐれ、買物熱、発作などの症状でぶりかえすその治療にはその後の様子から見て愛しか効き目がなかったからだ、それはこの愛を実現することの難かしさを語っている。実際海千でも山千でもないエンマがどうして夫や世間の疑惑を招かずに二人の愛人を恠えることができたのか。ルルーの資金が愛の続行に欠かせぬ援助となつたことは前述したが、それが成立する端緒においても彼女には周囲の大きな協力が与えられていたのだ。その最大の功績者が最大の被害者であるはずの夫だった。これを単なる皮肉と済ませてよいのだろうか。

エンマに目をつけたロドルフは知合いになつたうえで彼女を訪れ口説きにかかる。そこに不意にシャルルがやってきたので、あわてて蹴合わせに彼女の健康を話題にしてそれには乗馬がいいと出任せにすすめる。後に乗馬で遠出した最初の日に二人は結ばれるのだから、この提案の成行きには注意しなければならない。全くの名案だと一も二もなく賛成したのは夫なのである。むしろエンマは尻込みしそれを断わる。あれこれの理由を挙げた後で、世間が変な目で見ないかという妻に、下らないことを言うな、健康第一だと叱りつけ、乗馬服を脱ぎ捨てやるからブランジェさんの「親切な」申し出をお受けしなさいとしつこく食いさがる。普段は妻の言いなりになる人物だけに、この強引な出方は首を傾げさせる。もつともそれは病気の妻に対する夫の心配をよく理解していないからだろう。こうして尻をたたかれて出かけた林の中でエンマは「二度目の春」に遭遇し、結婚以来胸に蟠つたものを思いきり吐きだしたのでから、乗馬は有難いというのでやがて二人の愛の守護神として極上の鞭が送られることにもなるのだらう。一方妻の身体を気づかっていたシャルルの目論見も当たったといえは当たった。ロドルフとの乗馬から戻った夕食の席で、彼は彼女の「顔色がいい」のに気がつくからだ（110）。そこで彼は、まだ午後の出来事で気もそぞろの妻に、珍らしく気を効かせて大枚三〇〇フランで馬を購入したことを伝える。たしかにやがてロドルフに棄てられるまで深い幸福に浸る彼女にヒステリー症状は全く出てこないのだから、乗馬は健康にいいのだとしても、大金を

はたいて馬まで与えることはないのではないか。その後の家計を見ればこれはそうそう自由になる金額ではないし、第一この手廻しの良さは彼としては出来すぎのように思われる。といつても妻を案じる善良すぎる夫に咎めだすべき点は何もなく、非はそれにつけこんだ者にあることは言うまでもないのだが。

ロドルフとの関係が破綻して大病を患った時も、夫の悩みはなにより妻の健康にあった。彼はオメの勧めもあって、妻の気晴しにルアンまで芝居見物につれて行く。実はこの時も妻は、疲労、面倒、無駄使いなどを理由に「最初は断わって」いた。それを夫がこの時も珍らしく一步も引かずに説きふせたのだが、彼女が昔何事もなく別れて悲しい思いをしたレオン青年と邂逅するのはこの観劇の最中なのだから、夫の善意はまたしても裏目に出たわけだ。しかしそれは言いかえれば彼の介在なしに妻の願いは叶えられなかったということでもある。彼が手を廻したなどとは言えることではないが、歌劇で再び情熱を呼びさまされた妻を一日美青年に任せて望みを叶える「予想外の機会」[34]を与えたのは掌中の玉を盗人に預けたも同然で、いくら「妬かないたち」[33]にしても行きすぎではないだろうか。夫の再三の盲目ぶりにどこか割りきれないものを感じるので。しかも彼の妻の協力はそれだけでは終らない。彼の善意のお陰で今や夫婦同然になった二人に、夫はその後陰に陽に援助をおしめない。まず父の遺産相続の件で、忙しい夫のかわりに委任状を取って雑務をかぶつてもよい、ついでには誰か相談できる人はいないかと下心を抱いて訊ねる妻に、レオンの名を挙げたのは彼だった。また夫は、週一度のピアノの練習に、そのレッスン料が普通の八倍もの高額であることを知りながら通うことを許したのだが、これで妻はレオンに会うべく大つぴらにルアンに出かけられるようになる。中でも委任状の承認は、最初に唯々諸々と妻の言いなりになったのも不思議だが、それを取消して身代をなくす危機を一旦は救ってくれた母親と仲違いしてまで妻の肩をもちまた代理権を与えようと再発行の手続きをとったのだからよくよく妻思いだったのである。もちろんこれはどれも妻に対

するシャルルの愛情に根差す思いやり以外ではないとしても、しかし結局はそれぞれに不義の愛にきつかけを作りその火勢に油を注ぐのを許すことで、この愛の因となり果となつていた負債を通して、妻の身を確実に破滅に陥れていたことを忘れてはならない。もちろんこれは偶然の結果であつて、シャルルが妻の死を願つたなどということはその言動のどこを探してもとうてい見出すことはできない。彼を有罪にしうるいかなる証跡も言葉尻に残されていない。むしろ逆に、妻の死を彼ほど悲しんだ夫は稀だろう。にも拘わらず、妻の不倫と浪費の最大の被害者は彼であり、それによつて最悪の敵となりうるのも彼なのだ。これは法律上難癖をつけるにひとしいが、しかしここでフレデリックにとつてきわめて悲しむべきアルヌー夫人の「身売り」が、先にかわした一五、〇〇〇フランの取引の趣意を実現していたことを想起してもよいだろう。それに人を判断するのはその言葉ではなく行動によつてである。シャルルの言葉も態度も惚れた弱みを握られ引きずり廻される尻にしかれた亭主のそれであるが、しかしそれだからこそわれわれは見事に引つかつたということはないだろうか。乗馬の勧めにしても観劇の誘いにしても妻の健康を気遣う愛妻家の心に疚しい点は何一つないのだろうか。しかしそれらはいずれもエンマを除々に死の淵へと抗いがたく引きずりこんでいた。そしてそうなるうえで毒薬を秘蔵するオメと商品と資金を抱えるルルーの参加は大いに役立つた。早い話、後者が融通しなければホテル代にもこと欠いてレオンとの恋も長続きしなかつたろう。とはいえ三人の誰一人として咎めだてすべき点は見当らない。唯それぞれの個人的動機に基づく諸行動が、結果としてまるで綿密な完全犯罪の計画でもたてたかのようにうまく連携して彼女を死へと追いこんだという臃ろげな流れが振返ると見えるだけなのだ。だからここには犯罪はなかつた、しかし犯人のいない非人称的な殺害が、あるいはどの登場人物にも帰しえない、だから彼らの心理とは関係なく遂行されたいわばテクニ的な被害があつたのではないかという嫌疑は残るのだ。だがそうだとでも彼女はどうして死なねばならないのか。

答は彼女が夫に対して抱く輕蔑、嫌悪、憎しみなどの反抗的感情に探るべきことのように思われる。彼女は夫の選択を間違えたのだろうか。ルアンのオペラ歌手と結婚すればうまく行ったのか。結婚しても幸福を感じない彼女は上品で魅力的な美男子と会わなかったことを残念がる。だがそれだけならこうも何から何まで夫を目の敵にすることはなかった。夕食後勉強しない、有名になる野心もない、恥をかかされても平気でいる、食事の時に舌で歯をなめ廻し、スープを飲むと喉をならす……夫のすべての言動が彼女を苛立たせている。ヨンヴィルに越して、夫がイポリットの脚の手術に失敗した時にもこの不満がこみあげてくる、「夫のすべて、その顔も服装も口に出して言わないことも、彼の人間の全部、要するに夫が生きてそこにいることが腹立しいのだ」と〔23〕。たしかにシャルルはあまり女性好みとは言えない、卑俗で平板な面白味のない人物なのであろう。しかし彼女がその求婚に応じたのはそれなりに憎からず思っていたからではないのか。自分では彼に「結婚する前は愛情を抱いていると思っていたのだ」〔69〕。それが結婚後に評価が一変したのは、よく言う想像と現実の落差によるのだろうか。ある意味ではそうである。彼女は自分のこの「静かな生活」が「夢見た幸福だとは思えなかった」〔74〕。「これが世にいう蜜月なのだろうか」〔9〕と不審に思う。しかしそれ以上に、多かれ少なかれ生じるこの落差に耐えて現実を受け入れることを決して肯じなかった彼女自身の性格の中に本当の原因があるように思われる。彼女の夫への嫌悪は一点の妥協の余地もなく、不倫の男に身を任せるほど「彼への憎悪は強く」なる〔215〕。夫は愚鈍で卑俗で、指が角ばっているのさえ嫌わしい〔同頁〕。レオンと馬車の中ではじめて愛の言葉を交わして帰った時も、「虚弱で脆くて取るにたりない」夫の姿は彼女の心から「哀れみの気持」を拭い去り、そんな彼をどうすれば「厄介払いできる」だろうかとも考えている〔276〕。普通なら美点ともなるものも含めて夫のすべてに眼を尖らせる。この徹底した夫への嫌悪、憎しみとは、なにより結婚そのものの内に原因があるのではないだろうか。シャルルは欠点があるからでは

なく、彼女の夫であるために激しい嫌悪を彼女にひきおこしているということである。他の女たちは結局はあるいは最初から制度の枠内に自分の世界を見出す。シャルルの母は浪費や浮気で散々自分を泣かせた夫が死んだ時、だからといって彼のことを悪く言うわけではない。それどころか「かつての最悪の日々がすばらしいことに思える」[27]。だが丁度そう思つて涙ぐむ義母の傍らで、エンマは会つたばかりのレオンとの恋の思い出に耽る。彼女は義母のような妥協とは無縁の女性だったのだ。

彼女は愛するロドルフに、上等の鞭、《心に愛を》という銘入りの印章、スカーフ、それに葉巻入れを贈りものにする。ところが相手はそれを必ずしも喜んでいない。それはむしろ「彼の自尊心を傷つける」。彼はその内の幾つかを断わろうとするが、エンマは「後にひかない」。結局やむなく受けとるものの、「わがままで、余りにも差出がましい女だ」という反撥をひきおこす。画商アルヌーが愛人にする贈りものは、彼への愛の対価という性格を帯びていた。贈りものはしばしば上位者への庇護の願ひ（貢ぎもの、租税……）か奉仕者への慰撫や労いである。愛人の間でも対等性を損ねずにものを贈ることはそう容易ではない。エンマの場合も、たとえば贈りものを一つだけにしていればロドルフを不愉快に仕なかつたのかもしれない。だが彼の癪に障つたのはその数の多さだけではない。おそらくそれ以前に彼女を「わがままで差出がましい」とする認識があつて、だからこの贈りものの攻めを快く思わなかつたのだ。つまり最初に口説いたのは彼だが、そうして始まつた愛のリードは彼女が握つていたのではない。それはロドルフの男としての自負に抵触しはじめていたのかもしれない。そこにあれこれの贈りものが与えられて女主人の労いという意味を感じとつたからこそ、ロドルフは屈辱を覚えたのだ。「わがままな」と訳した *tyranique* は暴君や専制君主に由来する語で、この人物評価に彼の反撥の理由が窺える。一夫一婦制は表面的には男女の対等性を尊重しているとしても苗字や財産の継承、夫の性的自由への寛容という実質的な一夫多妻制によつ

て運営上は男性支配に即した制度である。ボヴァリー家の場合そういう性格は温和な人物を夫にすることで目立たなくなっているが、シャルルとルオーの間で進められた結婚の段取りにおいてエンマの果たす役割は受動的なものではない。求婚に対する諸否の権利を与えられてはいるが、乗り気の父に否と答えるのは経済的に依存している身として難しいのではあるまいか。いやそれ以前に家父長的な家庭の中で女性があるまうべき態度に即してこれはある程度答の決まった質問だったのかもしれない。結婚直後の彼女の失望、そして神経の病いは、人生の最も重要なものである愛に関して彼女には全く別の論理があつてそれと結婚とが全く相容れないという苦痛を日々深めていく、だから結婚を自分の生の桎梏として敵視していく過程に対応していたと思われる。シャルルに罪があるのは好意の有無とは別に彼が夫だからであり、自分を妻にして彼がえた幸福を憎むのは彼女の愛を無残に踏みにした結婚制度の享受者に対してではなかったか。夫が彼女に何の悪業も冒していない、いやできうる限りやさしく彼女の意に添おうとしているにも拘わらず、姦通による裏切りを彼への「服讐」〔9〕とみなすのは、彼が居心地よく属している制度の犠牲者であると自分を認識しているからである。彼が個人的には彼女を下心なく愛する善良な人物であることを知らないわけではない。彼は夫でなければ結婚前のように好意を彼女に抱かせうる。最後に砒素を飲んだ瀕死のエンマが夫に対する優しさを取戻すのは、彼女が真人間に悔悟したからではなく、彼女を彼に敵対させていたものが死と共に支配力を失おうとしているからだ。すすり泣くシャルルに、「泣かないで！ もうあなたを苦しめることはないわ」という彼女は、おそらくこの時始めて彼に心を開いている。それは彼から「夫」という制度が崩落しかけているからではないか。この言葉はまた図らずも彼女の不倫の動機の意外な半面をさらけだしている。それは何より彼を「苦しめる」ため、被害者として復讐するためだったのではないだろうか。彼、というのは適切を欠くだろう。シャルルが「これは私が悪いのか？ 私はできることは何でもやったのに！」とたずねると、

「ええ、本当に……あなたは良い人よ、あたたはね！」と答えて彼の髪に手をさし入れる。これができるならもう少しうまくやれなかったかと思うのは間違いで、結婚制度の圏外に二人が脱していればこそその優しさなのだ。あなたはね、とは誰との対比で言っているのか。あなたと違って、私は悪い女、といった科白は姦通に深入りするほど夫が憎くなる彼女のどこを押しても出てきそうにない。この「あなた」とは、私と結婚制度で結びつけられたへ夫へから解き放たれた一個の人間として、つまりはあなた個人としては、ということではなかったろうか。

だがその直前まで彼女はへ夫へと火花を散らす闘争を演じていた。金策がうまく行かず、もはや巨額の負債をシャルルに隠しおかせないと覚悟した彼女は、しかし夫に謝ろうなどとは少しも思わない。この家のものはすべて人手に渡ります、破産させたのは私です、と高飛車に出るつもりでいる。人に謝れるたちではないという以上に、逆にそれまでの不倫の愛は夫を敗北させるための熾烈な闘いだっただから、ここで自分の敗北を認めればそれまでの労苦はすべて無駄になるからである。したがってその彼女を最も苦しめるのは破産でも真相を夫に知られることでもなく、夫が嘆き悲しんだ後に自分を許しはしないかという懸念なのだ。「ボヴァリーが自分の上手にできると考えると彼女はむかつ腹が立った」(325)。これは、公証人ギヨマンに迫られて、私は金で身売る女じゃないと啖呵をきって帰宅した時のことで、金の力で肌に触れてくる男への不快感の延長上にある。ちなみにこれは、高価な贈り物をむりやり受けとらせられた時のロドルフの不快感とも通じている。エンマが死を決意するのは、彼女の敗北を意味するこの「夫の寛大な態度の重み」を受けとめることができそうにないからなのである。

この軋轢は要するに男女の権力争いに発している。もちろん正義がどちらにあるのかは制度的に決められていることであるが（父姓や財産の相続、社会権力遂行における男性の圧倒的優位……）、制度の間隙を突くことはできる。夫婦でものごとを決める家庭の内部はなおさらである。エンマは夫の善意に乗じて、財産権を牛耳り彼女なり

の一妻多夫婚を実現した。この母権の個人的な実施は果敢な行動力のたまものであるが、それは男としての夫への不満に起因するのか、それとも彼の家父長としての怠慢がすっかり彼を見くびった妻の心に不逞な欲望を大きく目覚めさせたのかは判断がつかない。彼女がシャルルではなくロドルフと結婚しても「夫」への不満は早晚首をもたげたであろうと思われるが、しかし真の愛を実現する欲望はしかしこの男性的な夫の前で芽をだしかけたまま萎縮してしまつたのではないだろうか。愛人が彼女のわがままをかなり受け入れたのは夫の権利を主張できないからである。彼女の母権的な愛の形態においては、だから彼女が自分の思い通りにことを運べるレオン青年の方が相手としてはるかに似つかわしいだろう。エンマがそこでは物事を決めている。やがて彼女は「彼の生活を監視したくなり」、尾行まで考える〔305〕。会うと逢引きまで何をしていたかを逐一報告させるのだが、これはまさに妻に対する夫という嫉妬深い所有者の態度そのものである。彼女はレオンという「情婦」〔300〕に対して、まさに女暴君（tyranique）として振舞う。しかし地母神と若く美しい穀物神の永遠のカップルを背後に透かし見せるこの関係も長く続くと鼻についてくる。元々が制度への反抗に発していたからだが、それに相性のいい二人の愛にも父権制との間に立てる軋み音が次第に聞えてくる。父権は二人の外側だけではなく、その中で人となつた彼らの内面にも入りこんでいるからだ。年上の人妻に「母親」〔同頁〕のようにすべてを任せる心地良さは、レオンの中でやがて鬱陶しさに、さらには反抗心へと変るだろう。自分が「彼女の人格に日毎に強く吸収」され、彼女が「常に勝利を収めること」に憤慨するようになる〔同頁〕。同じ頃エンマは、結婚したての頃のことを思い出している時、突然「レオンが他の男たちと同じように遠く隔だつて」みえる〔306〕。一旦追い出した男性の優位が今度は愛の内部から姿を現わしてくるのだ。レオンも夫同様一人の男にすぎないという認識である。したがつてこの愛においても、かつてシャルルの間で「そうだった」ように、「彼女は幸福ではない」ことに気付くし〔306〕、ひいては「この不

倫の愛に結婚生活のありとあらゆる味気なさを見出す」ことにもなる〔311-2〕。かつて愛想のつきた夫に心中投げつけた科白が、今度は愛人に対してこみあげてきても不思議ではない。「どうすれば彼との仲を厄介払いできるだろうか？」〔312 傍点引用者〕

彼女の敗北はいわば宿命づけられている。一時勝利をかちえたかに見える成行きも、かえって彼女を処罰するための逃れえぬ口実として役立ってしまう。こうした奔放な女暴君に社会の正義は普通どう対処するのだろうか。女性が社会、つまり男性制御の社会秩序に不安を抱かせるとすればそれは彼女たちが母や妻という家庭内の役割をほみだそうとするからであり、その逸脱は結局愛という一つの条項に帰するだろう。歴史や文学を彩る悪女、魔女、宿命の女とは、男の制御をこえて愛の快楽に奔放に身をゆだねた女たちないし女性性に下された烙印であるように思われる。悲劇には決められた妻の役割を破り夫の権利を蹂躪したために罰せられた女たちが多数見出される。おそらく一九世紀末、外科医たちが次々に女性の身体にメスを揮ったのもそのためであり、奔放な彼女たちの愛に脅えた男たちの予防措置ないし処罰の先取りだった。あるイギリスの医師はくりかえし女性患者のクリトリスを切除したが、これは女性恐怖症が愛に関わることを端的に示している。この生殖器の一部を取去ることで、ヒステリーや強硬症など種々の精神病理学的症状をやわらげうると主張していたのだ。これは時代の「通念」に立っていた。他の医師はクリトリスの刺激が女性に「慎ましきや繊細さ」を失わせ、さらに頭痛やヒステリー症状を起こして過度に感情的にすることを警告し、そのためにこの部位への様々な処置が施される。これは、従順な女性を作るためにこの部分の除去を成女式の一環として行う民族的儀礼とあきらかに通じる根深い欲動を医学的に仕立て直した言説であろう。女性の外科治療は他の部位にも拡がり、饒舌な女は舌の一部を切除され、ワルツが過度に好きな女は回転狂と診断されて下半身の神経線維の切断処置が施された。女性をメスで治療して社会に適合するように作り直

す発想は、外科手術の進展だけから生れてきたわけではない。一六世紀に教会によって人体解剖が禁止された時に女性はその埒外にあつたことをここで思い出してもよいだろう。他者としての女性への不安が外科医のメスを動かしていたのであり、この治療のメスはしばしば処罰の刑具にそのまま転じうるものだった。もっともクリトリス切除自体はその後医療処置として問題視され、当の外科医はイギリス医学協会を追放され一八六〇年代アメリカに渡るのが、しかしここで新たな賛同者をえている。しかしその治療のメスはロンドンに置きざりにしたのではないかと疑われる。一八八八年に起きた連続殺人事件の切り裂きジャックについて、犯人は外科医ではないのかという憶測がとびかったというのは、それなりに真実を突いていたように思われるのだ。被害者が娼婦ばかりでしかも腹を切り裂かれているのは、犯行の動機が何より彼女たちのくりひろげる制御できない——と想像した——愛に対する処罰にあつたのではないかと想像させる。女性を肉体的修正によつて正常化させる外科手術のメスは、回復の限度を越えた相手にはそのまま制裁の処刑具にならざるをえなかったはずである。この考え方の背後にいわゆるヴィクトリア朝の性道徳観が通念としてあると想定できる。一八五八年、ミシュレは女性を月経があるために「病人」であると生れつきの劣等存在に仕立てたが、こうした性の優劣と絡んで男性の支配と女性の服従という思想が明確に打ちだされたこの一九世紀後半、女は純潔、貞節でなければならぬという要請がことさら強まったようだ。お陰で女性椅子の脚が露出してさへ羞恥を感じなければならぬようにしつけられ、その結果彼女たちはもと性欲を持たないという見解さえ出されるに致る。イギリスにおける女の性の権威であつたウィリアム・アクトンは、一八五七年にこう述べたという、「一般に慎しみ深い女性は、自分のために性の満足を欲することはほとんどない。彼女は夫に身をまかせるが、それは夫を喜ばせたいがためである」²³。当時の結婚手引書は、「官能的快楽からくる痙攣」は女を不妊症にする危険があると注意しているが、どちらも母の背後にできるかぎり女を消しさるこ

とを求める父権的な道德的要請が、ここでもいつの間にか科学的真理へと転倒して語られている。

こうした言説の横行は、まさに『ボヴァリー夫人』の執筆時期（一八五一年九月—一八五六年三月）と重なっている。女性にのみ貞節を求めるヴィクトリア朝道德が、イギリス、ドイツとは異なる形であれ、フランスにおいても拡まっていたことは、*pudeur*（羞恥、慎み深さ）概念の勢威によつて窺える。では医学が女性における性欲の欠落を事実として語りそれによつて違反してはならない当為ともなっていた時代に、妻と母という役割を全く無視して女としての愛の幸福をひたすら求めたエンマの生き方は、当然世の強い反撥を招いたのではないだろうか。この小説はそれを告発した帝政検事の論告（一八五七年）を待つまでもなく「道德への侮辱」であり、女主人公はただ淫乱である（「皆様、これ以上淫乱な情景を見たことがありませんか？」〔378〕）。だが社会は唯手を拱いて彼女のすることを眺めていたわけではないのかもしれない。検事は彼女の自殺を密通の処罰とみなすことに同意していないが〔386〕、それは一方ではこの自殺が自らの姦通の罪を悔悟してではなく、花の盛りに惜まれつつ自分から選り出したものであり、他方では彼女を非難すべき人間が作中に一人もいないという皮相な根拠からである〔387〕。しかしこの検事のようにここでは悪徳が榮えて終るとまで悲観するのは、彼女の自殺の意味を過小評価しているのではないだろうか。たしかに男たちは、見たところ誰一人彼女に処罰や殺害の意志をもっていないが、しかし時代風潮を考慮すると、そこに三人の男の奇妙な連携的密謀のようなものが結果的にせよ浮かびでいたことを偶然と済ますことはできないように思われる。一人がなにかと口実を設けては二度も彼女に姦通の機会を提供し、お陰で愛の深みにはまった彼女に金が必要となるや他の一人がつぎつぎに貸しつけて負債を返済不可能になるまでふくらませ、窮地に追いこまれた彼女はやむなく服毒自殺することになるのだが、その時彼女が仰いだ砒素は第三の人物に用事があると言われてその家に行った時に偶然存在と薬効を瓶の特徴や位置とともにこと細かく知る

ことになったものであり、しかもその用事とは第三の人物の依頼に応じた義父の死の告知という他人の介入を必要としない性質のものなのだ。この小グループに彼女の死のミサを執り行う司祭と、「教区の死者から二重の利益」を得ている墓堀り兼教会の番人レスチブドワを補助として加えてもよいだろう。医者、薬屋、坊主、墓堀りと役者が揃いすぎた観があるが、金貸しが表から合法的に追いつめれば、後は人ひとりどう片づけようとお手盛り次第の顔ぶれではあったのだ。『ボヴァリー夫人』を風紀紊乱で告訴した帝政検事は自殺は当人の意志とみなしている。証拠は全くないのだから法律上はそれで構わないにしても、エンマが女王の傷ついた自尊心故に心底見下している「夫」の許しをはたして受けいれられるものか、その帰趨は明らかであって、そこに持つていけば手を下さずに生命を奪うのはそう難しいことではなかったともいえる。非人称的主体による正義の鉄槌がひそかに下さるべくして下されたという風な見方も決して不可能とは思われないのである。

だが何のためにそういう手のこんだことをするのか。それは基本的には文学テクストが、多分他のどのテクストもそうであるように、なんらかのイデオロギーの宣伝ないし道徳的主張だからであり、にも拘わらずそういうものとして見られることをしばしば警戒し、ましてや意のあるところを教示するのに人道的非難を招くような振舞いは一切慎まねばならないと用心しているからである。そのための自己検閲——権力によるものとは必ずしも一致しない——は、テクストを形成するうえでの最も重要なそして微妙なエクリチュールの操作を要する。簡単にいえば作家の腕の見せどころとなる。言いがどんなに正しくとも説教臭は文学の死である。文学において「楽しませながら教える」態度は、おそらく大革命以降非民主的となって教訓つきの作品は下火になり専ら楽しませる方向へと傾いたように見えるが、しかし実質的な変化はなくて唯教える態度が表向き影を潜めただけだと思われる。その分偽装工作が巧妙になったということなのだ。もつとも同じ時代でも『クリスマス・キャロル』と『ボヴァリー夫人』

ではその点で大きな開きがあった。前者の主義主張は誰が読んでも容易にそれとさし示せる。後者について前掲の帝政検事は不道德さわかる夫人の振舞いを非難する人物が作中誰もいないことを嘆くが、しかし道徳的関心がなければ「不道德な」彼女を主人公として取りあげたのだろうか。彼女の密通や夫への軽蔑は、もし社会がそれとすることを考え方を持っていたら、それを主題として描く発想は生れてこなかったのではないか。彼女が許されぬ愛に陥り、経済的破綻に足をとられて追いつめられていく展開は、市民がそれに覚える興奇心の満足と共に多かれ少なかれ抱く道徳的不安をよく承知したうえで、その受けとめ方との緊張関係のうえに組立てられているだろうからだ。

この作品は帝政検事の悲憤こそまさに理想的な読者として期待していたのかもしれない。少なくとも彼において作品の文学テキストとしての効力は十全に發揮されたといえる。文体や形式への余りにも芸術的な固執のみを標榜して、内容については韜晦的だった作者の本音も、おそらく検事と同じブルジョワジーの道徳に属していたのである。いいかえればこの「不道德な」小説も、『クリスマス・キャロル』に変らぬ並の道徳的主張に立つのだが、その荷い手（作者の代理）を個々の人物（幽霊、ボブ、甥といった）に帰することがなかったために、検事のような誤解を与えたのではないだろうか。これは読者が思想を人型論的に理解することに慣れているからだ、しかしこの非人称的な肉声なき発言も文学者がしいられた自己検閲の偽装工作の一つであり、そのために殺人が冒されても完全なアリバイがあつて告発どころかそれに気付かれさえないのである。

劣等人種としての女性を社会に適合させる矯正用の手術のメスにせよ、限界をこえた場合に揮われる処刑のナイフにせよ、そこには自分たちが課した枠をはみでる彼女たちへの男たちの狼狽が透かしみえる。それは結婚というほぼ女性を所有するためのものとなった制度を始め、定められた愛の秩序を蔑ろにする「弱い性」を、いかに所有すればよいのかに対する、苦しみ悩む男たちのそれぞれの回答なのだ。矯正が手遅れであれば手術はそこに含意さ

れていた処刑へとただちに変更されるが、普通の犯罪者の場合と違って愛するものを失うことになる処刑者の側に痛みがないわけではない。にも拘わらず正常化の望めなくなった段階で、所有権の侵害がもはやなくなることは大きな慰めであろうし、なにより動きのとまった相手を捉える喜びは束のまにせよ確実に味わえるのである。毒を飲む決心をした時のエンマはなぜ美しいのか。たしかにロドルフと森に遠出して、かねがね願っていたような愛をはじめて叶えた時の彼女も輝きに溢れている。自分の顔があまりに変ったのに驚き、「かつて眼がこれほど大きく黒く深みを湛えたことはなかった」〔19〕。しかし砒素の部屋の鍵を渡すように自分の崇拜者ジュスタンに命じるエンマは、おそらくさらに美しい。彼女は、闇に浮きあがるその顔の白さに胸を衝かれた少年の眼に、「異様に美しく、幽霊のように威厳にみちて」現われる〔334〕。ここには前者の生氣にみちた喜びはない。それは、自分の敗北を認め、すでに死の相を濃くおびた女王の不吉な威厳と美しさである。この美しさは、おそらくアルヌー夫人を売らせた競売場面の凄惨な美に通じている。アルヌー夫人の衣裳、家具などをまるで一枚一枚彼女の衣服を脱がせるように売りたてる処刑の過程が、愛の昂まりを帯びていたのはなぜなのか。そこには夫人へのフレデリックないし彼に自己の生を托した作者の充たされない思いが介在していたはずである。エンマのやはり死を背景に際立つ美しさは、常に自分の掌を逃れていた女をとうとう身動きもならぬ死の入り口で捉えることのできた所有の喜びを秘かに湛えているのではないだろうか。人物の人型論的關係からこのネクロフィリアの喜びを素知らぬ顔の彼女の夫に帰するのは困難であり、これも非人称的と言わざるをえないのだが、しかしその背後には「夫」の素顔が読者や作者のそれと共に隠れているはずである。いずれにせよ彼女の死は、自らの欲望に駆られてとびこんだ網の目が除々に絞りこまれてもはや悲劇的結末を逃れられないという形で訪れる。この過程は用意周到であり、しかもその結果としての自殺は作品の頂点をなしている。ということは進退きわまった彼女の死に作品の主要動機があったという

ことである。悲劇の女主人公たちは、死による絶対的な服従が夫を裏切った女性の服すべき償いであることを告げる。死は矯正の一種なのである。エンマの死後シャルルは彼女の思い出に感溺するが、この時ほど彼女がひたすら夫だけのものだったことはないのだ。以上のことはまた、『ボヴァリー夫人』において愛に匹敵する重みを持つ経済的コードの意味について、過大評価に陥らないように戒めてもいる。それは産業革命の勢いに乗った市場主義の隆盛を賛美するためなどでは決してなく、ある奔放な存在を差押え（*saisit*）という捌手ながら合法的な手段によつて捉える（*saisit*）ために利用されたのではないだろうか。その甘い罠に落ちたエンマは死の罰を下されて否応なく夫のもとに連れ戻されたのだ。

だがこのいわば度しがたい捍婦とはまるで趣きを異にする、アルヌー夫人の場合はどうなのだろうか。この「慎重深い」婦徳の鑑は頑くなに母と妻の殻に閉じこもるのだが、今度は逆にそれに苦しめられる愛人志願者が、それだからこそこの道德的障害を越える論理を求めて経済を援用する必要があつたのではないだろうか。こうして一五、〇〇〇フランが貸されたのだ。実際、その後の手口はよく似ている。やはり相手を「差押え」によつて「捉え」ようとし、その結果相手が死に追いこまれると誰よりも悲嘆に暮れるのは利害の最もからむ人物なのだ。この被害者顔はアリバイとなつて彼への嫌疑をたとえあつたとしても拭払させる。お陰で無欲で仁慈に篤いがやや氣力に欠ける青年紳士像が、それを否定するさまざまな行動にも拘わらずわれわれの心から消滅することはないのだし、これは共感をえるうえである種の主人公にとつては必要な規約なのである。両作品の性えはこのように類似しているが、愛の障害の性格では著しく異なる。エンマの女暴君的な熾んな欲望はアルヌー夫人には棄にしたいくもないようにみえる。とはいえ夫人はフレデリックを拒んばかりいたわけではないし、彼の愛の眞の障害は彼女の妻としての貞節だけではなかつたことに気付かねばならない。

四章 もう一つの禁忌

フレデリックの愛が首尾をとげる機会は、前述のように三回はあった。一度目はアルヌー夫人を効外の陶器工場まで追いかけていった時である。この時彼ははじめて愛を打明けるばかりか、ようやく到来した好機を逃すまいと執拗に夫人に迫る。長年抑えた思いは一旦口に出せばもはやとどめ難いまでになっていたとも言えるが、しかしそれまでとは打って変ったこの大胆かつ強気な青年の出方の背後には、もちろん返済など二の次ですすんだあの大金の譲渡とそれとともに成立した暗黙の契約があった。ではなぜ水心に魚心という具合にことが運ばなかったのか。血気にはやる青年に夫人は貞節の権化となつてその鋒先をかわす。この期におよんで貞節をたてに知らぬぞんぜぬで通ることなのかと言わんばかりだったフレデリックのはじめの見幕もお陰で勢いを失い、ついには夫人に「言葉もなく一礼して」[201]退散を余儀なくされる。一見これは美德の勝利である。だがそれはどういう美德なのか。到着した時部屋着をしどけなく纏っているのを見られた夫人はきちんとした服に着更えて彼の前に現われる。フレデリックはその美しさに魅了され、接吻したいという思いが押しとどめがなくなる。一旦はそれをこらえるものの、部屋で差向いになるとまたしても心が昂ぶつて、「彼女の膝に身をなげたい」という思いに捉われる。もう一押しだったのかもしれない。ところが彼は思いどまつてしまふのだ。なぜなら廊下で軋み音がしたからである。だがもう一つの理由もあげられている。勇み立つ青年を「宗教的おそれのようなもの」が引きとめたという。そんな彼に夫人の衣服が「巨大な、無限の、持ちあげることでできない」ものに見えてくる[200]。だが宗教的とは何なのか。この唐突な言葉を理解するのは難しいが、いずれにしても服が持ちあげられなければそれに包まれた夫人が接近しえないものになるのは確かである。二人の問答はなお続くが、もはや敗色は歴然としている。弁論術を駆

使してどうにかなることもなかったのだ。それでもなお食いさがる青年の未練に結着をつけるのは夕飯を告げる子供の登場である。「彼女が部屋の入口に、二人の子供を両脇にして立った」[201]時、青年は諦めて引下る。では「彼の希望の空しさ」を思いしらせたのは子供たちではないのか。とうに愛想をつかしている夫への貞節というより、子供の行く末を案じる母親の愛情が、心憎からぬ青年の切なる愛にこたえるのを辛うじて引きとどめていたのかもしれない。夫人の子への愛情はあらためて語るまでもない。彼が家を訪れると彼女は「ほとんどいつも」下の子に本を読んでやったり、ピアノの稽古をする上の子の後に座って針仕事をしていた。

毎度のように夫の愚痴をこぼす彼女が青年に別居をすすめられた時に、「そんな思いきった真似は決してしない」[177]と断わるが、その理由として彼女が子供への愛情を掲げたことに疑いをかける必要はなさそうだ。アルヌーと組んで一芝居うったかに見える金策時の一連の行動も、夫のためというより側杖をくって苦境に立つ幼い子の未来を憂える親心からではなかったろうか。そして今またそこに新たな暗雲が萌しはじめた、フレデリックの敢然たる工場への訪問も母親の眼にはそんな風に映っていたに違いない。あの折の甘い目付きと同じ人間とは思えない程、口を開けば先見の明や常識やエゴイズム、思慮分別を語り、嘘や不安に幸福はないと説くのも、すべてはおそらくその一点に結びついている。ではあなたのような女性はある人の心が通じないのか、とそれとなく詰問されて、彼女は言下に否定する。そうではないのだが、「しかし必要ならば耳を閉す」のだと。あなたの愛は判っているが、しかし子の安寧を乱すならば、ということなのである。自分の愛さえ犠牲にする心構えだったと見てもよい。であれば、彼女が執固い青年を、子供を両脇に従えた時にとうとう追いはらったのは、偶然ではなかった。カビの生えたお説教の向うには、必死に子供を守る母親の姿があったのだ。そのこと自体に間違いはない。だがそれがただちに彼女の膝に身を投げんとしたフレデリックの激情を阻んだあの「宗教的畏れ」の正体なのか、少なくともそ

れと関係するののかという判断を留保せざるをえない。この畏れは夫人が両脇に子供を従えて立ちはだかる前のことなのである。おそらくそれは彼女の母性と無関係ではないが、別のことのように思われる。その少し前フレデリックは、自分の道に外れた愛を正当化するために、「偉大な文学的典型」としてフェードル、デイドー、ロメオ、デグリウの四人を挙げていた(200)。いずれも愛のために悲劇的結末を迎えた人物であり、これでは返つて夫人の警戒心をつのらせたに違いないが、説得としては余りにも拙劣なこの選択にはしかしながらある暗示がこめられていたふしがある。それは単に偉大な恋人たちの引用ではなかったのかもしれない。彼がこの四名を引合いに出した後、「自縄自縛に陥る」のは、あるいはそこに触れてはならないものがあつたからではないのか。一瞬言葉が途絶え、室内は雨音しか聞こえない。ところがこの沈黙の中で口を噤んだままアルヌー夫人は返つて雄弁になる。といつても「両手を肘掛け椅子の腕にのせ(…)身じろぎもせずに」坐るだけなのだが、それがどうもいわくありげである。その彼女のかぶる縁なし帽子の垂れが、「スフィンクスの鉢巻き」のようだと言明されるのはなぜなのか。小説の描写は写実主義の立前のもとにしばしば作品の意味の開示として遂行されるが、椅子に黙して座る夫人の姿態がどこかあの神獣の彫像を模している気配なのが注意をひく。実の母と結婚してテバイの王になる青年に謎をかけたスフィンクスが、どうしてここでアルヌー夫人の背後から突然現われたのか。それはこの青年——つまりは読者——に今どんな謎をさしだしているのか。青年は直前に理想的な四人の愛の殉教者を挙げてその壘みにならうよう迫っていたが、そういえば少なくともその内の一人はオイディプス伝説と同じ愛を実現しようとしていた。それは夫のテゼ王が客死したという噂を聞かや、軽率にも長い間抑えていた愛を義理の息子イポリットに打明けて、取返しつかない事態に陥った王妃フェードルである。夫人の彫像の姿態はそれと秘かに響きあっているように思われる。それはオイディプス／イポリットが陥った危険への警告を語らずして語る一種の黙劇だったのではない

いか。青年が夫人の膝に身を投げようとした時に「宗教的畏れ」に襲われたのも彼女の衣服が「持ちあげられぬ」ものに見えたのも、彼なりに感じとった語られないこの禁忌との関係において理解すべきではないだろうか。もっともことを荒立てる前に青年が従順に身を引いたために、この禁忌は二人の前に正体をすっかり現すには到らない。しかしそれは、青年が今回の警告に懲りずに再び夫人に愛の成就を迫る毎に、必ずといっていい程影を浮ばせるだろう。そしてその事態は避けがたくやってくる。今回の彼の情念の動き方を見ると、夫人が禁じられた時に「まさにそれだからこそ彼の欲望は熾烈になる」からで、禁忌性つまり愛を困難にしているものこそ、彼の愛を掻きたてているようだからだ。だがそう考えるには肝心の点で問題が生じる。二人の子の母親はフレデリックの母親ではないのだから、彼らにはそういう禁忌自体が成立せず、フェードル、スフィンクスと道具立てをいくら揃えても無意味な状況証拠に終るかもしれないからだ。この日夫人が逸る青年に、「あなたって子供なのね」というのも、あなたは私の子供であると言っているわけでは確かにないのである。

もっともこの日のことが少しは葉になったのかフレデリックはまたしばらくアルヌー家から足が遠のく。方向を変えてロザネットやロック嬢に接近を図るのだが、皮肉にもロックに頼まれて画商を訪問せざるをえないはめに なったのが縁で、ふたたび夫人との交際が開始される。今度の関係は相手の愛が公然となっているせいなのかはるかに親密で、夫人は最初の日から、青年があなたこそ「人の姿をしたこの世の楽園」と甘い言葉を囁いて接吻しようとするのを、なぜか「驚きと恍惚で身動きできないで」受けいれている [267]。さらに青年が言葉巧みに、私は富も名誉も権力もいらない、私の全財産、私の人生の目的はただただあなただけ、あなたなしには空気がないのと同様に生きていけない、私の魂があなたの魂へ登っていくこの喘ぎ音が聞こえないのですか、二つの魂が溶けあつた瞬間私の魂の緒はたえるばかりだ、と熱く訴えると、夫人は「全身が震えだした」という。夫人の自制心も工場

で突つたねたのが精一杯だったのだろうか。いずれにしてもこの態度の軟化に、フレデリックが前回の失敗の原因は單なる自分の拙ない口説き方にあると考えるようになったとしても不思議ではない。そしてその点で彼は巧妙にことを運んだといえる。もともと夫人は身の危険を感じてか一旦はオトウユウの別荘に逃げるのだが、しかしそこまで彼が会いに来ると訪問を断るでもなく、むしろ二人が誰にも邪魔されずに相互の深い愛情を確認しあうようになるのはこの家でのことなのである。子供の頃のことから始まってなにごとも分けへだてなく語りあう内に、お互いに趣味も判断も一致していて、一方がなにかを言えばしばしば相手も「私も!」と応じる仲となり、その上自分たちの「ひたすら愛に捧げた生活」を思い描くのだから、二人はこれ以上はない理想的な恋人同士だと言つても過言ではないだろう。この頃二人が一時だけがお互いにフレデリック、マリーと名で呼びあうようになるのはその証である。夫人は作品の梗概などではこともなげにマリー・アルヌーと紹介されるが、しかしマリーとは誰のことなのだろうか。自分の幸福の追求から夫を憎み娘をうとんじるボヴァリー夫人がエンマと呼ばれるように、彼女をマリーと呼ぶことはできない。それは父姓や夫姓のくびきを脱したエンマと違って、彼女が結局一個の女としては行動できなかったことと関係しているだろう。品位に欠け、何人も女をつくる夫への「嫌悪」を覗かせても、母として家族という制度をはみ出ることのない彼女はアルヌー夫人と呼ばれるのがふさわしいし、作者もマリーを主語にした文をおそらく一度も書いていない。この抑圧された名が、突然、ただ一度だけ青年の口から洩れたのだ。夫人が家族の軛を払いのけようとしていた萌しだったのではないだろうか。青年がこの名は「恍惚のさなかで囁くの」に「ふさわしいと感じても見当違いとはいえない。恍惚の内に名を呼びあうという場面がそろそろ日程に入つてもおかしくはない関係だったのだ。もともと前回の性急な運びを反省したのか、青年は「下手なことを言つてすべてを台無しにするのを危惧して」慎重に相手の出方を窺う。「彼女からすすんで身をまかせるようにした

い」のだ〔273〕。機は自ずから熟する形で必ずやってくる。二人の完璧な精神的結びつきによる幸福は、それだけにひとつ足りないものを二人の心にたえず響かせていたからである。「やがて話の最中に長い沈黙の間が訪れるようになった。時として性的な羞恥が向いあう二人の頬を赤くそめた。」二人とも欲情を隠し抑えつけ、かえって感受性が敏感にとぎすまされ、湿った木の葉の匂いにも喜びを覚える。かと思うと小さな物音がただけでまるですでに罪をおかしたかのように戦き、「深淵へと押しやられるのを感じる」〔273〕。激情に苦悶するフレデリックは「彼女を憎む」ようにさえなる〔273〕。そんな苦い膠着状態の中に、アルヌーが女工を新たに囲いだしたのも口実となつて、ついに彼は夫人に外で会う約束をさせるのに成功する。早速意外な行動力を發揮して、家具つきの部屋を借り内装も整えて、その日が来るのを満を持して待つ。十年來の執念がようやく実りかけていたわけである。ところが結局夫人は待ちあわせ場所に現われないのである。

そこには彼女の思惑だけには帰しえない、子の急病というせつまつた事情が介在していた。だがそれをよく見ると、陶器工場で青年を退散させていたものがどうやら再び現われて愛の実現を阻止していた形跡がある。夫人の息子は少し前から喉の痛みを訴え、感冒と診断されてはいた。しかしそれが、他でもないフレデリックとしては待ちに待ったその逢引きの当日に急に容態が悪化して危篤に陥るとは、よくよく彼も運が悪かったということになる。だがことの推移を見ると、むしろ息子の病氣はまさにその日に照準をあわせて進行していたと考えたほうがいように思われる。幼い息子にそういう器用な能力があったというわけではない。しかしアルヌー夫人が *Evidence*（摂理＝神）の名でさえも恐ろしげに語る存在なら、それはシナリオの小さな手直しにすぎなかったろう。

その日の明け方に、夫人は夢をみる。丁度フレデリックと待ちあわせた通りに、彼女は「人目を恐れて」大分前からある重大な何かを待つて立っている。するとそこに一匹のいまましい子犬が来て彼女の服の裾をくわえ、いく

ら追い払つても逃げようとせずにはますます強く吠えたてる。目覚めた夫人は、犬の吠える声だと思つたのがじつは息子の咳であることに気付く。母の不倫を息子が子犬となつてくいとめようとしたかのようであり、夫人がその嘆願を「しつこく」「いまいましい」と感じるのは子を顧ずに愛に身を投じようとしていた彼女の心の傾斜をおのずから語っているだろう。急いで部屋に駆けつけると、息子の「手は灼けるように熱く、顔は燃え、声は変にしわがれている」[380]。そのまま患病にまんじりともせず夜明けを迎えるが、呼びにやつたかかりつけの医者は折悪く留守だという。幼い病人はますます容態が悪化して、今にも息が絶えそうな様子。恐慌状態の夫人はなすべを知らず、おろおろとオモチャ、人形、絵本を息子のベッドに並べ、子がまだ赤んぼうだった頃寝かしつけるのによく口ずさんだ歌を歌つてきかせる。ようやく手が離れかけてきた子供はこうして病気になる事で一挙に赤児へと後退して、マリーへとそつと足を踏みだしかけた夫人を母親へと引きもどしたのだ。もはや死ぬばかりと思われていた絶望的な病状は、この直後に好転している。ぐったりしていた息子がまた咳で衰弱した身体を鞭打つていて、口から何か羊皮紙のような管状のものを吐きだし、丁度そこに往診に駆けつけた医師は峠はこえたと宣告する。この羊皮紙にはひよつとして冒してはならない掟でも書かれていたのではあるまいか。夫人はこの時になつて、ようやくフレデリックとの約束を思いだすのだが、しかしもはやそれを守る気持は失せていた。彼女は子供、それも娘ではなく息子の病気に「神の警告」を見てとつたからである。息子に対して彼女は母の道をふみ外そうとしていたのだ。「しかし神様はお慈悲から、彼女を完全に罰しようとはなされなかった！もし彼女があくまでこの愛を貫ぬこうとすれば、この先どんな償いをしなければならなかったか！」[383]。少女時代を除けばさして信仰の篤くない夫人が、どうしてこうも深くいきなり神に帰依するのか。というより彼女に愛を禁じた神とは何の神で、その愛のどこが悪いのか？ 陶器工場でフレデリックがフェードルを賛えてその範にならうことを勧め

めた時、彼女はある聖獣の姿をまねて軽率な青年に謎をかけ、「宗教的な畏れ」を吹きこんだ。お陰でフレデリックはこの聖獣の謎を解いたために愛の禁忌をおかしたギリシアの青年の二の舞は踏まずにすんだのだが、みずから一線を越えようとしていた夫人の前にこの畏れを抱かせたものが今度は「Providence」として姿を現したのではないだろうか。子供の病気によって摂理^{ゾー}至高^{セシム}の知恵にむりにも耳を傾けさせられた彼女は、こうして母親としての立場を取戻すのだが、しかしそこに一つの疑問が生れる。一人の母親であることは、子の父親以外の男への愛をこれほどまでに禁止する揺るがぬ理由となるのだろうか。彼女が姦通に走るうえで最大の障害となるはずの夫は、一向に身持ちが改まらずに愛想づかしをしている妻の側からはもちろん、妻の肉体を高く売ろうとした形跡のある彼の側からも決して積極的な妨げとはなっていない。この期に及んで何が夫人を引き止めているのか。どう見てもただ母親であることだけが青年との深い愛を越えてはならないものになっているのだ。ここには次のような準則があったことになる、私は母親なのだから、あなたを愛するわけにはいかない、という。

フレデリックにとってアルヌー夫人はかけがえない特別な存在で、たとえ彼の目が他の女性にいくとしてもそれは叶わぬ恋の一時的な代償にすぎない。その夫にとってそうだった、取替えのきく欲望の対象の一つではない。しかしそれにしても何が彼をこれほどまでに絶対的な愛を彼女に捧げさせたのだろうか。夫人は船上で最初に見かけて以来終始変わることもなく青年の心を掴んで離さない別格の存在だが、しかしそんな彼女も他の人間の眼からは、さして変わったところのない一介の画商の妻以上ではないからである。彼の目を眩ませた船上での運命的な出会いにしても、「そこには居合わせた人々は彼女に眼をとめたようには見えない」〔8〕。器量好みでもらわれたのだから、なかなか美人だったには違いなく、それは世評に上がることもある〔223〕。しかしフレデリックのように一途に打ちこまないまでも、気紛れにせよ彼女に眼をつけた男が——借金取り立てのデロリエは別として——他にいな

いのは、彼の愛がかなり特殊なものではないかという疑惑を与えうる。美貌についても、ロザネットに言わせればさんざんで、「相当いい年をして、色は甘草のように真黒で、お腹はずんぐり……」[412]と、恋敵による腹立ちまぎれの悪口雑言であることを割引いても、崇拜者の賛美を通して思い描かれた神聖な夫人像との懸隔に驚かされる。青年の目はどこを見ているのだろうか。いや彼も色の黒さは最初から気付いていたし、(「アンダルシア出身かクレオール女だろうと想像した」[7])、デロリエもその母親の肖像画を見て、夫人がいかに南仏人らしい母親と色々な点で似ていると考える[246-7]。フレデリックは彼女を船上で見た時、肌、身体つき、指の美しさに魅了されるのだから、ロザネットの酷評も余りこたえないだろう。というより夫人のより客観的な相貌をあげつらつて青年の愛にけちをつけても始まらないことなのだが、だが男たちの憧れの的でもない人妻にどうしてあれほど彼ひとり身を入れたのかという問題が改めて提起されてくる。彼女の何が彼を魅了したのか？ それは身体の造形美より、いわゆる精神的なものなのだろうか。最初の出会いで超自然的存在の出現のように青年をまず打ったのは、夫人の姿形よりも眼が放つ光の眩ゆさだったし、彼女の最後の訪問で彼は「あなたの声の音楽と眼の輝き」がいつも心の底にあったことを打明けている[293]。だが声音も眼の輝きも物理的刺激であって容貌の他の要素と精神と肉体のように区別できるわけではないし、それらが一体となった夫人の魅力を代表させる要素として挙げた程度なのだろう。第一心身の二元論的区別が、少なくともフレデリックにおいてはかりそめのものではない。十八歳の青年は、この人は何者だろうかという「苦痛にみちた好奇心」に駆られて「肉体的な所有の欲望」さえ消えたというが[2]、彼が後にしばしば苦しめられる彼女への「猛りたつ情欲の炎」[273]はどういう筋道で生れたのかこれでは不思議だし、もともと欲望とこの好奇心とをはっきり分けることは難しいだろう。欲望なしに好奇心が生れるだろうか。それに彼女のとっておきの眼も、「地下室の空気穴みたいにはかでかくて、がらんとしている」[412]

とロザネットの同性としての厳しい批評にさらされると著しく魔力を失って、あらためて彼女のどこに惹かれたのか崇拜者に訊いてみたくなる。しかし結局どこということではなく、おそらく美醜を越えて彼女というものが一にも二にもなく青年の氣持に叶ったと考えた方がよい。他の女性では代りえない唯一無二の何かが彼女にあつて、それに惹きつけられたために青年はあれほど執着しつづけたのではないか。だがその特殊性とは何なのか。彼はオトウユの別荘で心から夫人とうち解けあえるようになった時、中学時代に「ある女性の顔」が彼の「詩的天空に輝いていた」のだが、まさに夫人こそその女性に他ならず、はじめて夫人を見た時彼女に「その女性の姿を認めたのだ」と告白している〔27〕。たんなる嬉しがらせとか、理想的な女性の発見といった通りのいい解釈に引きづりこまれることなく、言葉通り最初の出会いがじつは再会ないし再認だったという風に理解しておきたい。つまりこの女性は中学生が好き勝手に思い描いた架空の人物というのではなく、また想像が現実の再構成以上ではないことを改めて主張するまでもなく、彼が過去に知っていた女性ではなかったのか。それは誰だったのか。

少年は性的関心が高まる思春期においてさまざまな女性への憧憬に捉えられるとしても、それはしばしばある人物の変装でありうる。というのも誕生以来その存在なしには生きていけないほど全面的に従属していた女性の愛が、子が成長し自立を間近にひかえたこの頃に変化しはじめるからである。彼女は子の成長に合わせて距離を置くとするのだが、一人で生きることを性急に求められた子供は女性から見棄てられたと感じ、社会が用意した教育的諸制度を通じて否応なく前方へと成長の過程を辿ることになるとしても彼女の心変わりの理由を得てきないまま、時としてつい最近に失われた樂園へと思いを馳せては強い郷愁に捉われざるをえない。その女性は思春期の自瀆という一方通行的な愛の真の対象となるのだが、逆にいえばこうした性的成熟が子供から彼女を隔てていたのである。なお彼女は性的欲求と結びつかない時でも、総じて彼らの空想の源泉をなしているのかもしれない。もっと

もフレデリックの場合、その女性との蜜月の終結は彼女の夫が早々と決闘で死んでいるために、彼女自身のしつけの配慮よりも中学への入学によって外部から強いられたいもいえる。年恰好も作者とよく似ている主人公は、やはり作者のように中学生になると共に寄宿生活を送ることになるからだ。彼が当時「家庭の心地よさをなつかしがり、学校生活を辛く思う」〔26〕のは、突然その女性との関係を断たれた子供のそういう精神状況を反映している。これが続けば場合によつては、つまりその女性への執着が絶てなければ精神に変調をきたすことも考えられる。フレデリックはこのタイプの子供だったようで、彼が夫人に打明ける中学時代の「憂鬱」ないし「鬱症」〔27〕がどの程度のものであったのか判明しないが、それが好き勝手のゆるされない厳しい寄宿生活の中で、別離を強制された女性へのますます強まる心の傾斜の裏面であつたという想定は可能である。となると憂鬱に続いて語られる「詩的天空」に輝き出た女性とは、面向きはどうあれその人物以外ではなかつたように思われる。いわば乳離れがうまく行かずに残存したその人物への物神崇拜的な固着なのだが、フレデリックのアルヌー夫人への変更不能な愛とはまさにこうした愛の性格を図らずも語っているのではないだろうか。彼の夫人への愛に *la pudeur* (羞恥) がつきまとうのもそのためなのではない。彼が夫婦仲の悪いのにつけこんで夫人のところに入りびたりになつた頃、彼女を知るほどに返つて心が打明けづらくなり、今日こそはと決心しても「打ちかち難い羞恥」に妨げられる〔17〕。なぜか。「この女性は他の女たちとは違う」ので、従うべき手本が存在しないからだという。ところがこの同じ青年が他の女性たちを口説く時にはそうした感情は全く持ちあわせず、遅疑なく果敢に攻めおとしている。では夫人はどの点で特別なのか。ここで振り出しの問いに戻つてしまふのだが、どうして彼女は彼にとつて愛を打明けてはならない女性だったのか。もつともこの「打ちかち難い」と思われた障害も、一五、〇〇〇フランの貸与によつてのりこえられる。前述のように、本論の主要な問題である市場経済の意味とはまさにそこにあつ

たように思われる。誰もがその規矩を免れない市場の支配力を逆用して叶わぬ愛の成就が願われていたのではないだろうか。一五、〇〇〇フランの貸与後、だんまりを決めて魚心に水心という風に少しも相手が出てこないのに業を煮やした青年は、夫人がひとりいる陶器工場に駆けつけて、約束が違うではないかとばかりに思いのたけを打明けたのだが、そこに「打ちかちがたい羞恥」の出る幕などはもはや少しもなかった。もっともそれは虎威を借りる一時の空元気だったようだ。再会してこの時のことなど忘れたように琴瑟相和するまで親密になった二人は、そうなるほど画龍点睛を欠くものを意識するが、その時消えたはずの障害がふたたび彼らを隔てようとする。「時おり、性的な羞恥心が向いあう二人の顔を赤く染めた」〔273〕。お互いに相手の愛、すなわち欲望を知悉すればこそその反応であり、この段階での羞恥はしたがって社交的配慮をこえた根の深いところに発していたことになる。二人は欲望を抱いてはならない関係にあるということではないのだろうか。そこにスフィックスの謎に対する解があり、「宗教的畏れ」を吹きこまれた青年が両脇に子を従えた夫人を前にやむなく引下った理由もあったのだ。急病で死の一步手前まで行った息子が奇跡的に回癒した時、夫人が自分の愛を子供の幸福のため「犠牲」として捧げた「神^{プロレダンス}」の真意もそこにある。この時夫人はフレデリックへの愛を「彼女の最初の激しい愛」〔282〕と呼ぶのだが、最初のは正確を欠くように思われる。彼女は病いに翻弄される息子に「私の愛」と叫んだばかりだし、彼女が夫の仕打ちに耐え、言いよる青年を撃退するのも「子供たちへの愛」からである。彼と出会う以前に子供のいた彼女にとって最初の愛とは、当然子供への愛をささねばならないのに、この聖なる愛の資格を子供から青年に移してしまったのだ。だが、これは単なる誤りなのか。それとも、語りえぬことを語るための修辭法の一つ（撞着語法といった）ではないだろうか。とすれば夫人は子の未来のためにまさに子への愛を断念したということになるのである。もっともそのためにはわれわれは二種類の愛を混同する誤りをおかさなければならぬ。しかし

子への愛と異性への愛は本當に嚴密な區別ができるだろうか。ソボクレスの悲劇とは違つて幸福な結婚をする多くのイオカステとオイディプスたちの母子創世神話の検討は、夫と子の區別が父權社会の課した當為にすぎないという疑いを与えうる。対象が社会的に異なつても同じ衝動が問題になつてゐるのではないか。とすれば二つの愛の區別は、許されぬ愛に懊惱する母親において逆にその真相を隠すアリバイともなりうる。夫人は神の警告を無視して青年への愛を通せばどんな災難がふりかかつてきたらうかと身のすくむ思いをするが、そんな彼女には「青年になつた」息子が喧嘩で瀕死のけがをして担架で運ばれるのが見える。しかし道ならぬ愛の処罰が、なぜ彼女自身ではなく、あるいはさらに娘をまつたく除外して唯息子、それも青年になつた時の息子だけに下されるのか。ここには一考を要すべき修辭法があるように思われる。

われわれの嫌疑を一層強めるのは二人の年齢への奇妙なこだわりである。二人の年齢差は正確には示されてゐない。フレデリックは一八四〇年に初めて夫人を見たとき一八歳である。夫人はその時の娘の年齢からみて少なくとも結婚後七年は経つてゐるから、仮に一八歳で結婚したとすれば二人の年の差は七、八歳、せいぜい十歳くらいだつたことになる。このことは恋愛の妨げになるだろうか。これは当事者間の問題であつて他人の容喙すべきことではない。まして二人の場合熱をあげたのは年下のフレデリックの方であり、その彼に年齢差を苦にする氣配などみぢんもなかつたのだから、誰がみてもこれはとつくの昔に解決した、いやそもそも始めから問題となりえなかつた事項なのだろうと思ふところである。そして實際、恋人たちは概ねそうふるまつてゐる。ところがはやどうでもないはずの年齢問題が突如として、それもまるで二人を隔てる越えがたい障害であるかのように語られ始める。青年がオトウイユの別荘に入りびたり二人が心からうち解けて至福の時をすごしてゐた頃である、「はてしない嘆き」が彼らの口をついて出てくる。青年は、「なぜ天はそれを望まなかつたのか!」とか「私たちの出会いが

もつと……」と返らぬ恨みをくどくど述べる。夫人はさえ切つて「あの時私がつと若ければ……」と自分の責任であるかのように嘆息すれば、相手も皆まで言わせずに、「いやいや、僕こそもう少し年をとっていれば……」とわが身とその罪をかぶろうとする〔272〕。すっかり言いなれているらしいこの二重唱は出逢いの時期の遅さを嘆くようで、じつは年齢の問題が取返しのつかない失態であるかのように愛しあう二人を苦しめていることを窺わせる。さらにこの人力ではいかんともしがたい障害がある以上、彼らの愛の成就是ありえないという諦めがどうやらすでにそれぞれの心に深く刻みこまれているようでもある。青年は「天はそれを望まなかった」と断定的に語り、夫人は「私がつと若かつたなら……」と過去の非現実な仮定を現わす条件法でやや婉曲にそれに和している。いずれにしても愛の不首尾は過去に決着済みのことなのである。夫のある身ゆえに若い男との恋を泣く泣く諦めるというならともかく、その点には例の如くいささかの顧慮も払わずに、それまで一度として問題にならなかった年齢の開きがとつぜん唯一の障害としてたちはだかるのだ。それも実は二人が前々から心を悩ませていて、まるで二人の永遠の繰り言であるかのように一方が片言を洩らせばただちに相手も隻句で応じて、「きりのない恨み言」が始まるというのだからさらに理解に苦しむ。これは年齢差というのがたんに年上の女との愛というだけの意味ではなかったからではないのか。そのことで注意しなければならないのは、彼らの恨み言の持つていく先がまたしても例の *la Providence*（神の摂理、237）だということである。おそらくすでに陶器工場で追いすがる青年に宗教的畏怖をひきおこし、このすぐ後にも身の程を忘れた夫人に息子の急病で警告を発したのと同じものが、当り障りのない年齢差の問題としてふたたび接近を開始する二人の間に割って入っているのではないだろうか。となればそれに歯向かうことなどどうてい許されるはずもなく、一刻も早く断念するのが得策なのだが、それにしても年齢差とは本当は何のことだったのだろうか。すでに二度ほど影を浮びあがらせたあの禁忌の偽装とでも考えるほかないよう

に思われる。もつともそれは作中一度もその顔に光が当ることを許さないものでそれ以上の断定は難しいのだが、しかしそんな警戒深さにも拘わらず最後に一瞬手が緩められるだろう。

長い歳月が過ぎて、ある日突然アルヌー夫人が訪ねてくる。一八六七年三月末というから、一八五一年二月一日の彼女の動産の売立てから一六年ほどたった夕暮である。この長さの意味を計るうえで、それが始めのプランでは一二年だったのが決定稿でさらに四年延びたことに注意を払いいたい。二人の再会にはより長い歳月の経過が必要だった、言いかえれば二人がふたたび愛を語るには夫人が女として少々微妙な年齢に達していなければならなかった、ということではないだろうか。おそらくそのお陰で愛を阻んでいた宿命的な年齢差の意味が前ほど曖昧ではなくなっている。一六年といえば、フレデリックが船上で夫人を見かけた時の年齢（一八歳）に近く、競売まではそれからさらに一一年流れているのだから、彼は今や四五歳、最初の頃の二―三倍の年齢を重ねている。これはその間に次の世代の青年ができあがるだけの年月が楽に流れたということである。げんに一八四八年病気で母の不倫をくいとめた息子は、今や成人して軍隊に勤務しているというが、その彼も船上の出会いが起きた一八四〇年にはまだその影も形もなかったのだ。この時七歳だった長女はすでに結婚し、三〇歳を超えているから、夫人にとうの昔に孫を慥えていてもおかしくない。夫のアルヌーが「今や老人のようだ」(p.80)というのも誇張とは言えなくなる。とうに六〇を過ぎているかもしれない。しかし一六年の歳月は誰よりもアルヌー夫人に重くのしかかっていたはずだ。彼女は五十を越えて、いわば女としての年齢をまさに越えようとしている。とはいえ色香もまだ残す微妙に揺らぐ境位で夫人が現われたことに今回訪問のもつ意味もあるだろう。そういう一六年だったのだと思われる。中年の主人公は、夫人が帽子を脱いだ時その銀髪に胸を抉られるような思いをするのだが、その失望を隠すためにかつて自分が彼女にいかに深い愛情を捧げていたか、と賞讃の言葉をならべはじめる。夫人は嬉しそうに聞きほれ

るのだが、しかしそれについて「自分もはやそうでなくなっている女性へのこの熱愛の言葉」(288) という表現が用いられるのは、自分もはや女性として愛される年齢ではないという苦い認識が夫人にあったろうことを仄めかしている。その後で「私の年で！ この人は！〔…〕私のように愛された女はいないわ、そうよ、若いからなんの役に立つというの？」という彼女のなかば独り言のような述懐は、まさに胸中のその辺りのわだかまりから生れてきたものである。かつて夫人が若さと美しさ、あるいは女盛りの魅力を放っていた時には粉れていた年上の女性との年齢差が、彼女の息子がかつて自分に愛を迫った青年と同じ年恰好になり、自分も女の境界を越えかけた今、決定的な愛の障害としての性格を際立たせるはじめるのだ。中年の蕩児は彼女の白髪に直面した愕然たる思いを卒なく昔の彼女への賞讃で取りまぎらし、これで年齢の問題は、愛を過去の光芒として葬りつつ落着いたという展開のように見える。ところがあるはずのない「情欲」が、この時「かつてより強く」激しく狂暴にフレデリックを捉え始める。その理由を夫人への賛美を「自ら信じた」男の錯覚とか、死を目前にした情欲の残照のはなやぎとかのせいにすると、この愛の意味はまるで判らなくなる。むしろ障害であるはずの年齢差を蓋いがたく曝けだした白髪こそ、情欲を惹きおこした当の原因ではないのだろうか。かつて郊外の陶器工場で宗教的畏れから夫人のドレスが巨大な持ちあげえぬものになったからこそ「欲望が募った」(200) のと同じことが起きているように思われる。愛を禁じるものが愛を掻きたてるのだ。だから性懲りもなくまたしても、愛を掴もうとする諦めの悪い男に警告が発せられねばならない。情欲に駆られた主人公は、その瞬間「その一方で言いわく言いたいもの、強く撥ねつけるもの。」を心を感じるのだ。これが陶器工場でスフィンクスの彫像と化した夫人が、軽率にもフェードルを賞揚した青年を金縛りにしたあの宗教的畏れと別物だと考える理由はないように思われる。要するにあの神^{プロビデンス}の摂理のお告げなのだ。しかし相手は二度の悟しにも反省しなかったごく察しの悪い男である。そういう心配からか、彼

を引きとめるべくより決定的な第三弾が放たれる。「言わく言いがたいもの、強く撥ねつけるもの」の後にこう付け加えられる、「そして近親相姦への激しい恐怖のようなものを彼は覚えた」と〔423〕。そこまで言われればもはや意を叶える見込みはなくなる。よう、な、ものとは表向きは夫人が彼の母親ではないからだが、しかしそれ以上に言ってしまった言明の反響の大きさを打ち消そうとしているようにも思われる。そして口に出した事を直ちに後悔するかのように、ここで思いをとげれば後で嫌悪にかられるのではないかという「別の懸念」が彼を引きとめた、と続くのもそういう打ち消しの線に沿っている。だからこの「激しい恐怖」はあまり意味がない、と考えるかどうかは読むものの判断によるが、ごく狭い文脈に限ってもこの直後に夫人が立去るに際し、彼の額に「母のように」(comme une mère, 424) 接吻する続き具合は注意しなければならない。その前、彼女は自分への情欲にうち克つたらフレデリックに、「なんて心遣いの細やかな!」と賛辞を呈するが、屈折した思いがそこには畳みこまれていよう。すべてがそこで終ったからだ。彼女は少しして「二度とお目にかかることはしないでしよう」と帽子を取って「これが私の女としての最後の行動でした」と続ける。彼女は身を任せるつもりで訪ねてきたという主人公の疑いは当たっていたらしいのだが、これは長い闘いを経た末に結局いかんともしがないと判明した二人の愛の終息宣言である。だから「私の魂はあなたの側を離れませんよ」とプラトニックな愛への転換が本格的に語られるのだし、「神 (le ciel) のすべてのお恵みがあなたの上にありますように!」というのは、幸福の最後の機会を断念して神の悟しに従ったことになる柔順な男にはその加護をうける権利が大いにあるからである。もはや二人の間に禁忌に背く心の葛藤はない。だからこそ男の額への接吻は大つぴらに「母のように」なされるのだ。それは二人の愛の母と子のような精神性を語ると見えて、じつはその禁じられた愛の明るい反面を今だから曝せたということなのである。こうなつてはもはや誰はばかることのない母として (comme mère) の接吻なのであり、それゆえに重ねての

愛の終息宣言なのである。一触即発の欲望と禁止の間を揺れうごく以前の二人だったら彼女がこんな行為に出る余裕はまずなかったろう。ここに、二人が神を恨んだ年齢差の本当の意味が浮上している。二人の年の開きとは程度の差ではなく、母が子との間に持たざるをえない宿命的な年齢差を背後に隠し持っていたのではないか。だからこそ二人の愛は夫人だけを早く生ませた天のせいであつて実を結ぶことが絶対に許されなかつたのである。夫人は白髪の間を根元から切つて男に与え、夜の闇に呑みこまれていく。この白髪に二人の愛の原因と、そしてなによりも成就しなかつた理由のすべてがこめられていたのだ。

とはいえ近親相姦の禁忌が二人の愛を宿命的に阻んでいたと断言することがどこまで許されるだろうか。むしろそれは言葉尻をとらえての妄想ときめつける方が容易であることは間違いない。私見によれば、この愛の主題は古代に溯及する、なぜか抜きがたい文学的伝統をなしているが、一九世紀のフランスにおいて、おそらくは父権が一段と強化される中で新たな活力を与えられたかのように、そしてフレデリックが自分たちの愛に擬して語るゲーテ『若きウェルテルの悩み』（一七七四）の衝撃の余波であるかのように、たとえばスタンダール『赤と黒』（一八三〇）、『パルムの僧院』（一八三九）、バルザック『谷間の百合』（一八三五）、ジョルジュ・サンド『フランソワ・ル・シャンピ』（一八四八）、フロマンタン『ドミニック』（一八六三）などの一連の作品を通して、その伝統を再燃させていたのではないかと思われる。細部に入る余裕はないが、ただこの場合もそのどれ一つとしてこの禁じられた愛という主題が、ソボクレスの『オイディプス王』の母子やラシーヌ『フェードル』の義母と息子のようにいかにもそれらしい姿で語られるわけではない。禁忌性が登場人物の愛ばかりか、作者の個人的問題として作品執筆の動機に関わるなら、この主題が語られるためには、つまりそれに衝撃を受ける読者の眼をごまかすためには、時には何重ものベールをそこに掛ける必要があり、折り合いのつけがたいこの表現と隠蔽の撞着は、そこに描かれた

男女の愛にこの禁忌を読みとることを当然ながら難しくしているからだ。とはいえそうした前掲書と比べても、『感情教育』の用心深さは徹底している。ジュリアン・ソレルを優しく受入れたレナール夫人や捨て子のフランソワを養い育てた粉屋の奥さんに母の濃厚ともいえる影をとらえ、その愛に近親相姦を透かしみることはそう難しくはないが、フレデリックとアルヌー夫人の年齢差の嘆きや二人の愛を執固く妨げる神の向うに誰がわざわざそれを認めようとするだろうか。実現できなかった宿命的な愛ぐらゐで充分なのである。このことはフロベールのいわば作家としての資質に関わる。『ボヴァリー』執筆中の彼が「外的な絆をもたず何ものにも依拠しない本、文体の内的な力によっておのずから支えられているような本」[N.383]を理想として述べたことは有名である。文体に関して、「私以上に労苦を払った人間はいない」[N.306]と豪語し、日々の孜々たる努力にも拘わらずいかに作品が進まないか、一週間に一頁だけ、「私は不毛だ」とくりかえし泣きごとをいう当時の手紙は、不満を打ちあけるとみえて文体の彫心鑲骨に身を捧げる芸術家の自恃がそれだけ強く現われている。芸術において重要なのは「形式」だからだ。だがそれを言葉通りに受けとるのは危険である。「何ものにも依拠しない本」(un livre sur rien)とは要するに「何も書いてない本」ということだから、形式さえ美しければ内容は二の次どころか無くてもいいと思われかねないが、それでは言葉の綾にひきずられすぎるのだ。だからフロベールもあわてて、「ほとんど主題がないか、少なくとも主題がほとんど気付かれないような本」と付け加えて、内容を全く軽視したようにみえる前言の修正に直ちにかかっている。しかし修正の度がすぎれば、逆に内容さえ美しければ文章は少々杜撰でも大目に見るといふ、バルザック当りを念頭に似たような文学観への彼の批判的立場が不明確になることも事実だ。簡単にいえばここには形式と内容という、使いなれた便利さが災いして今もってあまり權威を疑われることのない二分法の弱点が暴けだされているのだろう。両者を正反対の概念にしかねないこの言葉の一般的用法に依拠するかぎり、形式

を立てればおのずから内容の軽視へと傾くはないからだ。少し後の手紙で、「形式」のないところには思念イデアもまたない。一方の追求は他方の追求である。両者は物質と色がそうであるように分離することができない」（No.321）というのは、この二分法の欠点を補足するためである。となるとフロベールの文体上の苦心とは、凝った文章をいたずらに磨きあげることにあるのではなく、ただたんに思念ないし内容をそれに最も適合した形式の文章で表現するというごく常識的な心得に帰するだろう。「何にも依拠しない本」をめざすフロベールの一見きわめて前衛的な形式重視も、その限りでは古典的美学に収まりうるものだった。これなら例えばモーパッサンに語ったという、一つのことには一つの語しか当てはまらないという作家としての信念と直接につながるし、ボヴァリー執筆の頃も「一語を探すのにしばしば数時間を掛けています」と打明けているのに通じる（No.321）。「ほとんど主題のない本」を理想として掲げた後でも、「表現が思念パッセに近づけば近づくほど、言葉はそれに密着して姿を消し、美しくなる」（同書簡）と述べていたのだ。これは彼の美学について空疎な形式主義的な幻想をいだくのを戒めている。文体に人並みならぬ苦勞をするのは、したがってそれだけその内容が作家にとって深い意味を持っていたからなのである。この頃の手紙の一節、「愛について言えば、それはこれまでの私の人生の大きな考察の主題でした」（No.321）もそれを裏書きしている。だがなぜ愛がそれほど重要なのか。いうまでもなくそれが彼自身に関わることであったからである。「私が研究した心は、私の心でした」とその後で述べている。しかしここには前掲の適切な表現を求める古典主義美学とは少しずれるものがある。彼に文体の苦心を強いたのは、そういう形式と内容の調和ではなく、むしろ告白と否認の、基本的には折合いのつかないものの不毛な調和の追求ではなかったかと思われるからである。フロベールが文体追求の一方で、個人的なものの表白を極度に警戒したことは有名である。たとえば一八五二年二月のルイズ・コレ宛の書簡は、例の如く「悪い一週間だった。仕事は進まなかった」で始まり、その理

由としてまたしても文体の苦渋が語られる、「下書きを書き、それを破り、ぬかるみに足をとられ、手さぐりで進む」(70.307)と。たしかに「考えが漠然としているものを言葉で明確にするのは大変難しい」に違いない。だがその後で明晰な文章の追求とは無縁なことが語られる、「私は他の本で胸をはだけているだけ、この本ではボタンをかけるように努めている」と。これが個性没却の態度を述べていることは、「この作品では」叙情ゼロ、考えの表明なく、作者の個性は消されている」と続くことから見てとれる。ここでは文体の洗練と個性の消滅がごく自然に結びついているのだが、しかし両者は本来全く別の問題ではないだろうか。逆に個人性を押しだすことに文体の彫琢が向っても少しも差支えないはずである。にも拘わらずフロベールにとって文体とは個性の排除や抑圧を意味していた。この考え方にはロマン主義への反撥、また市場主義の抬頭などが影響しているように思われるが、結局はそれらとの関わり方を決めた彼の資質の問題というほかはない。その表明が形式重視であり「純粹芸術」(70.303)であり、「情熱は詩を生まず、個性を出すほど弱いものになる」(70.332)という理念なのだ。これは作家にとって辛い背理である。表現するために筆をとったのに表現しないように書かねばならないからだ。「詩人たちは幸せだ、十四行詩に心のおくをぶちまけられる！ ところが不幸な散文家たちは、私のように、全てを抑えつけざるをえない。(…)、自分について何かを語るなんて、趣味の良い人間なら差しひかえることなのだ」(70.362)。だから『ボヴァリー夫人』は、ラブレールとは反対に、厳密な下図通りに線を引き、「絞め殺すほど紐でしばりつけた」作品である(『同書簡』)。彼の文体上の苦渋とはあるいはここにこそ、原因があつたのかもしれない。彼がしばしば自分を「不毛」と嘆くのもそのためではないのか。そういえばやはりボヴァリーに関してそれを執筆しているとこれまでの作品では経験したことのない不安(inquiétudes)を覚えると打明けていた。作家はその理由をこの作品が「私の生来の道」から外れて、「逆に全く技巧、術策」に依存しているせいではないかと分析し、実際に作品

の執筆が「これまで長くすさまじい曲芸的仕事であつた」ことを振返る（No. 352）。たしかに胸をただけようとしてボタンをかけるという二律背反を乗りきるのは、文体的な曲芸が必要なのである。心の動揺とはむりやりボタンをかける抑圧から生れていたわけで、この不幸な散文家の中にはそれを外したいという気持が当然強くあつた。手紙は「いつか私にぴったりのテーマ、私のはらわたに即した構想」の作品をきつと書くつもりだと言明して結ばれる。mes entrailles（私のはらわた、私の心の底）という語を使ったところに、彼における物を書く動機と美意識との難しい関係を窺うことができる。ただしフロベールの見通しには誤算があつた。技巧、術策と呼んだものこそ実は掴みかけた彼のスタイルではなかつたのか。ではボタンを外して「はらわた」を見せる機会が彼にはついになかつたのか、といえはそういうわけでもまたない。というより、それ以外のことができるわけではないのだ。愛に関して彼が「研究した心」とは彼自身の心なのだから。ただそれは文体（style）というメス（scalpel）によつて彼の顔の刻印が削り落とされていた。それをフロベール自身は、「私は何度、私の最良の瞬間にメスの冷たさが私の肉身に入るのを感じたことだろう！」（No. 351）と述べている。「ボヴァリーは〔…〕そういう意味で我が心理学研究の集大成」〔同〕なのだ。メスは単に「心の底」を腑分けする認識の道具ではなく、語らずに語る文体という切り分けの「術策」を仄めかしているように思われる。

以上のことはほぼそのまま『感情教育』に当てはまりそうだ。動機となる個人的な経験の表現とそれにボタンをかける美学的要請との葛藤は、フレデリックが作者の相貌を容易に透かしみせるぶんだけ強くはないのだが、しかしこのためにある種の禁忌の告白はかえつて徹底的にメスが揮われたのではないだろうか。同じ頃の手紙で、「フランス人の趣味に迎合するためには、詩情をほとんど隠さねばならない」と述べている。詩情とは、他の場所で問題になる抒情とか個性とほぼ同じものをさすと考えてよい。ではそれはどういう風に行うのか。「詩情を丸薬でや

るように無色の粉末に隠し」、読者に「気付かれないように呑みこませる」(No.329)。これは未来の『感情教育』の手の内を明かしているのではないだろうか。あるいはそれが小説一般の手法なのかもしれない。小説の主人公の設定で大切なのは、善人であれ悪人であれ、彼が読者の共感を損ねないことである。ところが他方で読者は小説に平凡な道德の教示を求めるわけではないから、作者は作品を刺激的な内容にするためにしばしば社会規範を冒すことを余儀なくされる。ところがこの侵犯に興味をひかれて読む読者は、同時にかなり厳格な道德家になっていて、日常生活では彼自身平気でやつてのけるような些細な悪事でも小説の中だと直ちに眉をひそめるものなのである。だからそれが敵役によつて冒されれば、主人公が彼をいかに処罰するか、主人公自身によつて冒されればいかにそれが償われるかがそれからの読みの軸をなすだろう。しかし主人公の悪が彼に内属していて切離せない時、さらにそれが作品の主題をなしているような時にはどうすればよいのか。「無色の粉末」にくるんで、詩情を読者に呑みこませるといふフロベールの手法は、それに応じうる射程を充分に備えている。『感情教育』の人妻と青年との恋もすでに禁止の侵犯であるが、しかしそれは少なくとも文学的題材としては常套化しているうえに、もう一つの禁忌の愛に比べれば社会通念を著しく傷つけるものではない。それは真実の苦みをおおう「無色の粉末」となりうるのだ。フレデリックの愛はそれにくるまれて、彼への——つまりは作品への——共感を損なうことなく読者に呑みこまれる。主人公はこうして少々怠惰だが一途で邪心のない好青年でありつづけるだろう。たとえなぜその愛があまで実らなかつたのかという疑問が燦ぶつても、相手が人妻であるという紋切り型の答がそれを粉らわせてしまう。そういうことは世間に山程もあるという理屈が立つわけだ。ただしこの禁忌がもう一つの禁忌の偽装であると読み解く筋道が、だからといって閉ざされているわけでは決していない。というよりこの「心の底」を語るためにこそ筆がとられたと考えるべきである。だから題材からも、「純粋芸術」を唱える彼の資質からも、その筋道がいかに

におおい隠されていようと、その「術策」を施す「技巧」の手が他方でそれを見あらわす目印をそここに付けずにはいないのである。われわれは以上でその幾つかに注意をひこうとしていたわけである。

この語られぬ母と息子の愛に關して、もう一つの点に注意を払っておきたい。それはアルヌー夫人が、制作のある段階まではモロー夫人の名で呼ばれていたことである。いうまでもなく後者はフレデリックの母をさす名称である。この夫亡き後息子大事にけなげに家を守る母親の鑑というべき女性も、やはり家名でしか呼ばれないのだが、青年が至高の愛を抱く女性の名が制作途中で彼の母親の名になりえたことは、その愛の性格を考えるうえで看過しがたいものを含むはずだ。これは二人の女性が何らかの点で等価であったことを暗示するのではないだろうか。もつともこれだけで終れば生成途上における副次的な名称配分の処理でしかなく、あまり深い意味を与えるのは危険なだろう。だが、二人の夫人は、他ならぬ名称を通じて、最終稿においてもいぜんとして緊密に結びついている。というのも二人の名前 Moreau と Arnoux（なづ） Marie Arnoux）はよく見るとアナグラムの關係にあり、しかも両綴綴語の核をなしているのはどうやら Amour（愛）なのである。表面的には相隔たつた人妻と母親は実は主人公への愛において互いに脈を通わせていたことをこれは端的に示しているのではないだろうか。

『感情教育』における経済原則の優位は、愛の障害を乗りこえる強力な論理として援用するためだったのではないかという考えを上で述べた。青年の誘惑においそれとものらない人妻をその力で口説きおとすべく、一五、〇〇〇フランが投入されたのだと。この見解は今や多少の手直しが必要になった。障害は人妻の貞淑ではなく、この愛に禁忌性を嗅ぎつけたあの Providence（神＝摂理）の監視にあったからだ。友人を裏切つてまで大金をはいたのは、個々人の事情に頓着なく世界を平準化してそれ自身の冷厳な手続きに従つて万事をとりさばく市場にこの愛を

載せれば、ひよつとして世界を支配する「摂理」の眼を出しぬいて、しかも道德的なアリバイも得つつ、ことが成るのではないかという期待があったのだ。しかし何時までも清算されない負債の余波が大きく人々を巻きこんで、ついに夫人の「売却」にこぎつけても、いわば神の眼をごまかすことはできなかった。それは、ようやくの思いがついに叶えられる肝心の場面になると必ず哀れな恋人たちの間に割って入ってきたからだ。市場の論理もその無粋な邪魔立ての前には結局はなすべがなかったのである。しかし、そうなると青年にはもう一つの手立てがあったらしいことに気がつく。活用するには至らなかったが、彼の革命への共感とはそこに根差していたように思える。

一八四八年の二月革命の時、前日デロリエからデモへの参加を呼びかける手紙を受けとるが彼はそれに乗ろうとはしなかった〔277〕。しかし弁護士は全く脈のない人物に招集をかけたのではなく、「君の約束どおり、参加をあとにしている」と書いたのもそれなりの根拠があつてのことである。たしかにフレデリックはブルジョワだから、別の富の配分法を実施する新政府の樹立において、切迫した要求を持ったあくせく稼ぎ口を探しまわる貧しい友人たちとは截然と立場を異にする。お陰でセネカルから疑惑の眼で見られている彼だが、しかし少し以前からこの連中の彼を見る眼が変つてきていた。ある日保守派の重鎮ダンブルーズのサロンで皆が口々に改革勢力の悪口を言っている中で、彼らへの反感に駆られた彼が、財界人、政府、王などへの攻撃を敢然と開始したことがある〔281〕。このことがセネカルたちの耳に入つて、ついに彼は彼らの仲間と目されるようになっていたのだ〔283〕。だからデロリエは同志の一人として彼にデモ決起の連絡をとつたのだ。それがいざ行動の段階で彼は裏切つたわけで、これは前掲のように後々に跡を引いて思わぬしつぺ返しをくうことになる。では彼の過激な言論とは知的なつけ焼刃にすぎなかったのか。そういう面もありそうなのだが、しかしデモの二ヶ月程前に彼が、デロリエさながらに「世界の転覆を願つていた」〔274〕ことが本心ではなかったとは決して言えない。デロリエもセネカルも彼らを抑えつけ

ているこの世の秩序がひっくり返れば、自ずと運が開けて日の目も見えらう。フレデリックの革命志向もその種の見通しの上に醸しだされていた。といつてもそれは財や地位・名譽のためではなく、やはり愛の障害を除去する期待からだった。彼の転覆願望が問題になるのは、交際を再開した夫人とこれまで以上に親密な仲になりお互いの愛情もよく判りながら、しかしあと一步のところどうしても先に進めず、「狂暴な情欲」が彼を苦しめていた頃なのである〔273〕。この差し迫った悩みを一体どう解決したらよいのか。だがこの難問に突きあたったのは始めてではない。以前パリの家に出入りするようになった時にも、「打ち克ちがたい障害」を前に苦悩した挙句、合鍵を作つて夜中に寝込みを襲おうかという「恐るべき」計画さえ立てたことがあった〔172〕。今回は同じ苦しまぎれながら解決策を犯罪から革命に変えたということなのだ。だから彼の革命志向とは、友人たちのような単に現体制の打倒にとどまらず、保守、革新の別なく依拠する倫理基盤そのものを倒壊して父権以前に回帰しようとする、より過激な目論見に立っていたことになる。言いかえれば、彼の愛を目の敵にする Providence の失墜を革命の名のもとに夢見ていたのである。ところがこうして革命に深入りしかけた矢先、そうでもないかと実現できないと思えた夫人との愛が、彼女の色よい返事で思い掛けず見込みが立ちかけた。そこにデロリエの呼びかけが届いたのだから、もはや転覆は無用の廻り道になっていた。彼は少しの迷いもなく、「もつと楽しい約束」へと出かけるだろう〔277〕。彼の革命への傾斜の意味は、作者が夫人との待ちこがれた逢引きをわざわざデモの当日に重ねたことに汲みとれる。愛のための革命であつて、革命のために愛を軽視するのは本末顛倒も甚しい。彼はその日來ない夫人を待ちながら、官憲がデモ隊の一部を乱暴に引立てるのを見て憤慨するのだが、しかしそこに巻きこまれないように言動を慎むだろう。さもないと「アルヌー夫人と会えなくなる」。全てはそのためだったからである。その前日彼は同時に母からも手紙を受けとるが、そこには彼女が熱心に結婚を勧めているロック嬢が四五、〇〇〇リーヴルの

年金収入があることが記されている。彼はこつちもろくに読まずに投げ捨てるのだが、もはや用済みの点で母の手紙は友人の手紙と対をなしているように思われる。

フレデリックのこの思惑はみごとに外れるが、彼が見捨てた二月革命の方はひとまず成功を見る。だがそれは彼が選択を誤まったというようなことではない。現政権の打倒は、もともとあの「摂理」の権威に影響を及ぼしうるものではなかったからだ。実際夫人への愛に対するその監視の執念深さはいささかも緩むことはない。では何一つ売れぬもののない時勢に金も歯がたたず、それで世の中が変わるはずの革命も効き目がなすれば、もはや何の手立てもなく断念するほかはないだろう。しかしそれが潔く受け入れられなければどうするのか。女性を所有できないこうした悩みを、ボヴァリー医師も彼なりに抱いていた、あるいは抱きうる状況にあった。妻を心から愛していたのに、相手は自分を気嫌いするばかりか、あり余る愛情を他の男たちには惜しみなく注いだ。欺かれたことさえ気付かぬお人好しの夫は、しかしますます妻に親切をつくすが、それは彼女が不逞な欲望をとげるお手伝いしかならない。こうして夫人は享楽の世界に溺れていく。しかしそれは同時に、彼女が死の深淵に引きこまれる破壊の道筋でもあった。この帰結から見ると、彼女の夫がいくら善良で愚かであっても、少々その度が過ぎていたのではないかという一抹の不審の念が湧いてくる。実際親切な夫の介在なしにはロドルフとレオンとの不倫は、少なくともあれほど円滑にことが運ぶことはなかったろう。しかしだからといって不倫の果ての自業自得の彼女の死を、騙された夫とその共謀者による計画殺人などと言えば大変な濡れ衣を着せることになる。嫌疑を掛ける手掛りがないわけではないが、法律上の犯罪を構成するには途中で糸が切れすぎている。だが前述のように語らずして語検閲対策としての黙説法は、オイディプスの父殺しと母子相姦をまさにそれを避けようとして、当人の知らぬうちに冒されたという風に設定したソポクレス以来、微妙な主題を扱う文学者たちが長じるべき重要な技法であり、中で

もボタンを掛けて胸をはだける文体の「術策」に腐心することを作家的宣言としたフロベールにとって、尻尾を掴まれずに一人の女を殺すことはさして難かしい「曲芸」ではなかったかもしれないのである。一九世紀後半のいわゆるヴィクトリア朝道徳が、父権的支配を逸脱した奔放な女たちを身体毀損や殺害によって処罰することへと男たちを追いつめたのと同じ事情がここに働いていなかったとは言えない。『感情教育』にはそうした悪女も彼女への処罰もないが、理由は異なれ同じ位に所有の不可能性に苦しむ男がいる。そしてその一方で相手の女性も競売で死の影を濃く宿したまま以来行方不明になっている。この二つに因果の糸は結べないのだろうか。競売は身を任せぬ女性を「差し押え」て身売りさせるかぎりで、彼女を所有できなかった愛する男の欲求に深くこたえていたばかりではない。競売へと連れこんだ利害の諸々の粉砕の原因を元へと辿っていくと、どうしても彼がアルヌー（夫人）に貸した一五、〇〇〇フランの負債に突きあたざるをえないのだし、この融通の動機とは口外を憚るていものなのだから、最後の競売の真の仕掛け人は、彼がどんなに嫌な顔をしようともフレデリック当人であったことになる。そしてそのことによって彼はまた夫人の殺害者でもある。「屍体をずたずたに引裂くカラス」のような競売の買い手たちによって夫人は殺されたのである。これは比喩による修辭的殺人だといって安心はできない。人を殺すことが必ずしもそう困難だとはいえない記号操作の世界で、修辭的殺人はどうしても悟られてはならない殺人の偽装ともなりうるからだ。

だが、やはり夫人は修辭では死ななかった。最後の訪問で長い歳月を経たにせよ、彼女は無事な姿を見せたではないかという反論が当然起こるだろう。しかし彼女は本当に生きて戻ったと言えるのか。その折の彼女の挙動には気がかりにさせるものがある。この日彼女は「日が暮れる」頃、案内も乞わずに突如として彼の部屋に現われる。いくら心安い仲でも一六年間音信不通の人妻にしてはやや礼を失した訪問の仕方である。それになにより、なぜ逢

魔が刻の「たそがれ時」を選んだのか〔50〕。しかも彼女が立去るのは夜更けの十一時半頃である。こんな時刻に女一人どこに行こうというのか。彼女の出現もどこか非現実的である。入って来た時室内が暗くて、黒のレースのヴェールを通して「彼女の眼しか」フレデリックには見えなかったというし〔49〕彼の氣遣いに感動して「私の年で! (…)

私はど愛された女はいないわ!」と言った時、当然声をあげて叫んだのかと思える内容だが、実際は「凝つとしたまま、夢遊病者のような奇妙な口調で」〔50〕語っている。彼女の希望で二人が通りを散歩した時も、彼女は町の灯に「青白い顔」を浮びあがらせるが、それはすぐに「また夜の闇に包まれて」しまふ〔42〕。夫人には全く生氣がなく、まるでペルランが一時期凝つたという交霊術〔50〕で呼び出されたかのよう

な、この世ならぬものの雰囲氣を漂せている。「私の魂はあなたから離れません」と宣言する夫人だが、実は論より証拠の、すでに肉体を脱した存在だったのではないだろうか。そういえば彼女の「青白い顔」をのみこんだ l'ombre (闇) には「亡霊」の意味もある。夫人は船上での最初の出会いから早くも「霊的な出現」(apparition) をしていたのだが、この彼女の非現実性に遅れてきたロマン主義だけを見てはならない。むしろそれはますます遠去かる女たちの光景なのだ。一九世紀後半次第に触れえぬものとなり、その隔たりをあえて越えようとすればしばしばその息の根をとめることになった女性とのある距離の表われであり、お陰で彼女たちは、フレデリックの愛の特殊性をこえて、死の影を帯びることになったのではないだろうか。

結 び

二人の愛を中心に金と愛に関するさまざまな確執を周囲に拡げ次第に騒々しく主立った人々を巻きこんでいったその第一原因ともいべき一五、〇〇〇フランが、とうとう返却された。時を同じくして主人公の愛が成立しない

ままお流れになったのは、もちろん偶然ではない。色好い返事をえるために投入されたお金なのだから、あらゆる出来事のそもそもの始まりは需要としてのこの許されない愛にあったわけである。では経済的にも物語のうえでも清算が滞りなくすみもはや語ることとは何もないのだが、細かい処理上の不備が二点残っていた。一つは革命の機運高まった頃使われた「子牛の頭」という謎めいた言葉であり、もう一つは冒頭の一部二章で散歩するフレデリックとデロリエが、川岸の明りの洩れる家を見て思い出したという「二人一緒の恋愛事件」〔8〕である。この二つが次の最終章でようやく読者に明かされるのだが、しかしこの章はたんにそういう補足説明として付加されているのだろうか。一見それほど重要でないことが、今や人生の失敗者であることを共に認めた中老の男ならではの恬淡たる調子で語られ、昔は良かったとリセ時代を懐かしんで終るこの七章は、ほぼ二〇年前と四〇年前へとわれわれの回顧的な視線を誘うことで、変動の時代を背景に描きこまれた主人公の不幸ともいえる半生をユーモラスな色彩をつけた絵巻として締めくくる洒落たエピソードとなっており、そこに長篇小説の構成的配慮を見ることができ。だがこの短い章の半分近くを占める「恋愛事件」の思い出は、過去の興行きを浮びあがらせる陰影法というだけでも、また二人のノスタルジーを満足させる若い頃の失敗談の披露というだけでもなさそう。それはむしろ主人公の宿命的愛のやや諧謔的な転調のように思われる。言いかえればこの失敗談はほぼ三〇年にわたるフレデリックの愛の可能性を高校時代の逸話を通して予兆的に、しかし実際は作品の一番最後で語られる以上そのおおわれた意味を後から仄めかす中心紋的な要約として、われわれに示しているのではないだろうか。ある夏の夕方、帰省中のフレデリックは家人の留守にデロリエを誘って、川沿いにある娼家へと出かける。周囲に「幻想的な輝き」を放ち、青年たちは誰もがこの悪場所のことで頭がいっぱいだったという家へ大きく迂回して着いた二人は、花束を持って中に入るのだが、すると不覚にも興奮のあまり顔は蒼ざめ口もきけず立往生となり、女たちの笑いを浴びて

逃げ出すはめになる。なぜこれほど困惑したのか。「その日の暑さ、未知のものへの不安、一種の後悔、さらに思いのままになる女をこれほど大勢一目で見た喜び」などが理由として挙げられている〔428〕。誰にもおきる他愛のない青春の一こまというところだろうか。しかしそう思っただけで看過するにはフレデリックの「これこそわれわれの最良の経験だ」という言葉は少し強すぎるように思われる。それに合槌を打つデロリエはそう深い意味もこめなかったろうが、言い出したフレデリックはその後のあの恋愛事件を思い出していたのかもしれない。困惑して逃げたのは彼で、友人は遊ぶ金がなくてその後を追わざるをえなかったのだから、これは主人公だけの失敗なのである。つまり「未知のものへの不安と一種の後悔」は彼が覚えたわけだが、今まさに女性を所有しようとしている時に内面から彼を引留めるこの良心の咎めのようなものの出現は、後に陶器工場でアルヌー夫人の前に身を投げようとした彼を阻止した「宗教的畏れのようなもの」〔300〕に通じているように思われる。こちらは歴とした職業女性であるが、夫人も一五、〇〇〇フランの負債が払えない間は立場が同じであることは縷々述べた通りである。そしてこの頃はフレデリックにおけるあの「女の顔」への崇拜はすでに始まっている。作者はこの出来事をなぜか一八三七年と正確に位置づけている。では家人の留守、つまり母のいない時に、娼家を訪れた少年はその内面に輝く夢の女、中学生になるや失ったあの女性にそこで会おうとしていたのだという推測も成立つ。実際この出来事はあの二人の女性のそれぞれとかすかにだが結ばれている。この冒険を一八三七年のことと述べた後で、このことは「三年後でも忘れられていなかった」と付け加えている。三年後といえば、まさにアルヌー夫人の驚くべき姿に船上で彼が初めて接した年なのである。なぜ宿命の愛の紀元に娼家訪問が因縁づけられているのか。夫人との出会いはひょっとして娼家に女性の愛を求めに行った経験の延長上にあるということではないのか。彼が夢の女に会おうとしてそこに行ったのなら、実は彼女こそすぐにこの女性だと見抜いたアルヌー夫人の背後には、夢の女を介して一人の売春

婦がいたことになる。そういえばその名前からトルコ女と思われてお陰で独特の詩情を帯びる店の女主人と、青年が一見してアンダルシア出身と見立てた浅黒い肌の夫人とは、南方的な異国趣味という点で符節を合わせてもいる。なお主人公は娼家で「恋人が婚約の女性にするように」〔428〕、持参した大きな花束を差出す。このプレゼントは遊びなれた男の粹道に立つものとは違う。そこにはむしろこの家で起こるこの商業的コードを掻き乱すものがある。彼は後にアルヌー夫人にしばしば花束を捧げるが、ではそれはアルヌー同様に夫人と売春婦との境界を曖昧にするいかがわしい行為だったのだろうか。しかし一五、六才の少年が婚約者への花束を女と金の等価性の上に成立する娼家で差出したのは、他方でそこで出会うはずの夢の女の非営利性に対する強く素朴な信頼からでもあるだろう。その女性ほど利害を無視して彼のためにつくした人間はいなかったからだ。ところで少年はこの花を「モロー夫人の庭で」摘みとったという〔同頁〕。なぜ花の出所に拘泥するのか。母親が育てた花を金で愛をかわす女に捧げるという、やや冒瀆的な図を迂遠法によって浮かびあがらせる意図があつたのではないか。この日少年達は娼家に真直ぐではなく、「大きく遠廻りして」行くのだが、これは語らずして語るフロベールの文体の極意に通じる。遠廻りのお陰で彼らは世人の眼をごまかせたに違いないが、このやり方であの女性への禁忌の愛がもう一度ここで語られているのではないだろうか。周辺の家々で恐れられ禁じられているが慣習上かなり許容された女遊びにくるまれて、別の禁止が読者にのみこまれているのではないか。花束を抱えた娼家訪問は、二位一体というべき二人の女性をひそかに巻きこむことで、主人公の愛の相手は誰なのか、その予告ともまた要約ともなっていたように思われる。それはまた後の彼の愛を実現する手段を規定することになったのかもしれない。この時の失敗の原因とは、フレデリックが懐に持った金ではなく花束を差出したことにあるだろう。金を出せば、それによって始動する揺ぎない女との等価コードの幽車にまきこまれて、不安や後悔のためらいなく目論見は達成され、それによって母

親への固着も断たれていたのかもしれない。いずれにしても三年後アルヌー夫人という夢の女に会った時フレデリックは、この最初の愛の試みの失敗に懲りて、女は万事金と思い悟ったとでもいうように彼女の前でなければならぬ。一ルイ金貨を自分の食事を抜いてまで楽師にめぐむのだし、それが後の一五、〇〇〇フランの贈与へと尾を引くことになるのである。

注(1) 引用は本文に頁数のみを記す。出典は G. Flaubert, *Madame Bovary*, Garnier-Flammarion, 1966。以下本文中の引用はこの版に拠り、頁数は数字だけを記した。

(2) 例えは Marc de Biasi はその校訂版 (*Madame Bovary. Mœurs de province*, Imprimerie Nationale Éditions, 1964) の序文で、エンマの三人のモデルを挙げた後で情事で家計を顧みなくなったワコドヴィカ夫人の回想録が小説の負債や差押えのヒントになったのではないかと指摘するにとどまり、その主題的重みには言及していない (p. 21-2)。

(3) A. Broder, *L'économie française au XIX^e siècle*, Ophrys, 1993, p. 33.

(4) *Ibid.*, p. 35.

(5) これはシャルルが医者のはしくれ(彼はいわゆる *médecin* ではなく博士号を持たない *officier de santé* である)として、ブルジョワジーの一角を占めていたことを示す。前述のように年収三、四、〇〇〇フランが下層階級との境界となるようだが、ちなみに当時(一八三〇年から一八五〇年位)バリーに出稼ぎに来た石工職人の日当は三フラン五〇から四フラン五〇位でたしかに糞泥の差がある(M・ナド「ある出稼石工の回想」、岩波文庫、八五頁、三三六頁)。

(6) 旧体制までは十二分の一リーヴル、十二下ウエの価値を持っていたスー貨(銅ないしニッケル貨)は、革命期の十進法の採用において通貨としては残ったが、新フランを中心とする貨幣制度(一七九五年国民会議で採択)でその二十分の一の価値を持つものとして規定された。これはフラン/スーの格差を追認している。

(7) 物流のための道路整備の拡充が一八三六年法令として定められた。それはフロベールも第二部の最初で言及している。しかし村道が開通しても馬車が走るとは限らないし、たとえ走ってもはば十年後に敷設される汽車と比べて運搬量は限られ、賃料も割高だったから、どこでも市場の活況を招くわけではなかっただろう(資料については、A. Broder の前掲書 p. 41 を参照のこと)。

(8) 猪木武徳「経済思想」、岩波書店、1981, p. 45.

(9) この時のルルーの反応を「失望を隠す」ではなく「つれ隠しに」(伊吹武彦訳)とすると、金貸しの心積りが見えにくくなる。

(10) F. Braudel & E. Labrousse, *Histoire économique et sociale de la France*, III (1789-1880), Quadrige & PUF, 1993, p. 248

(11) 第二帝政下のフランス産業が、イギリスより遅れて着手された鉄道敷設に多くを負うことは言うまでもないが、一八四二年にギゾ内閣で

通過した法案に従って、一八四七年パリリールアン間が、パリリールユッセル間と同時に開通した（A. Broder Op. cit. p. 43）。『ボヴァリー』の執筆はその四年後に始まるのだから、馬車業界の衰退を作者はよく知りえた立場にあったわけだが、その傾向は作品が発表された一八五六年には更に進んでいたろうから、ルルーの成功は読者にはやや皮肉な意味を帯びたのかも知れない。

(12) この成りゆきは首を傾げさせる。エンマは八、〇〇〇フランの負債を払わずに死んだのだから、差押えは免れられない。冷酷なヴァンサールの訴えで執達吏が現われ調書を作成した運びからいって、予定通り彼女の動産が競売にふされたのは確実のように思われる。ところがルルーは彼女の生前と同じやり口で借金返済をシャルルに迫る。自殺騒ぎで競売が中止になったというのだろうか。そういう情実の入る余地があるのだろうか。第一これでは、エンマは「ルルー殿に待った待った資本をついに儲えてやった」(364)という前掲の一節と矛盾する。しかもルルーはそれを元手に事業をすでに始めているのだから(366)、この辺りは作者が充分に整理しきれなかった箇所ということなのだろうか。

(13) 猪木前掲書、p. 45。

(14) Octave Mirbeau, Les affaires sont les affaires, Charpentier & Fasquelle, 1924. 以下本文中の引用後の頁はこの版に拠る。

(15) Charles Dickens, A Christmas Carol, in Christmas Books, Chapman & Hall, London (出版年不明). 以下本文中の引用後の頁はこの版に拠る。

(16) 主人公の経営する商會が何を扱うのかは明示されていないが、推測はできる。商品らしきものはなく、事務員も一人しかいない。スクルージは為替手形の受取り人で、店には両替部屋もあり、仕事の交際は取引所で行われ、彼への返済に苦しむ借主も登場する。さらに台帳や金庫を身体につけた元同僚たちの出立ちから見ても、金融関係と考えるほかないだろう。

(17) ここで『感情教育』でフレデリックが貧しい友人たちに対してこの社会的ハンディだけで負い目があったらしいことが思い出される。阿部謹也『甦える中世ヨーロッパ』（日本エディタースクール出版部、一九八七年）によれば、上に立つ者は気前の良さを発揮することで身分の維持を図る。中世ではそれは種々の施しによる死後の救いの希求に継承されるという。今日の寄付は古代における王たちの惜しみなき贈与に遡るということだろう。この普遍的制度にスクルージは反したことになる。

(18) たとえばオレスティア三部作のクリュテムネストラ、テーセウスの妃バイドロス、そして私見によれば『ハムレット』のガートルードなど。いや一般に悪女、妖女の名を持つ女性はこの範疇に入るだろう。

(19) 金森修『生殖のバイオポリティクス』へ思想へ、岩波書店、二〇〇〇年二月号、一五五—一五七頁。

(20) 同論文、一五八頁。

(21) 同論文、同箇所。

(22) Jules Michelet, L'Amour, 1858.

(23) スティーヴン・カーン『肉体の文化史』、法政大学出版、一九八九年、一二七頁。なお本論のヴィクトリア朝道德観は主としてこの本（とくに八章—十一章）に依拠した。

(24) 同書、二二七—八頁。

(25) ガルニエ版の校訂者ビーター・ウェスリルはこの科白に着目して、二人の男女に母子の気配があると指摘し、青年が陶器工場でアルヌー

夫人に対して「行動不能」になるのは部分的にはそのせいだと述べる〔No. 405 p. 408〕。賛成であるが、指摘がこの細部にどまり、それが作品全体とどう関わるのか、他にどういう根拠があるのかといった踏みこんだ議論にはなっていない。

26 二七一頁、および注五五二（四八一頁）参照。

27 以下フロベールの書簡の引用は、*Preface à la vie d'écrivain*, Seuil, 1963 による。数字は書簡番号で、コナール版全集を踏襲している。

28 フロベールの文体ないし文学は市場主義と密接な関係があるように思われる。それについては稿を改めて論じたい。

29 P. Wertheim の No. 812 (p. 506) に拠る。

30 死んだ妻と瓜二つの女性との愛を描くローデンバック『死都プリュージュ』（一八九二）はその一帰結と思われる。もっとも一八五三年以降爆発的な流行を見たといわれる交霊術が、逆に諸事象にそういう色彩を与えた側面も考えられる。